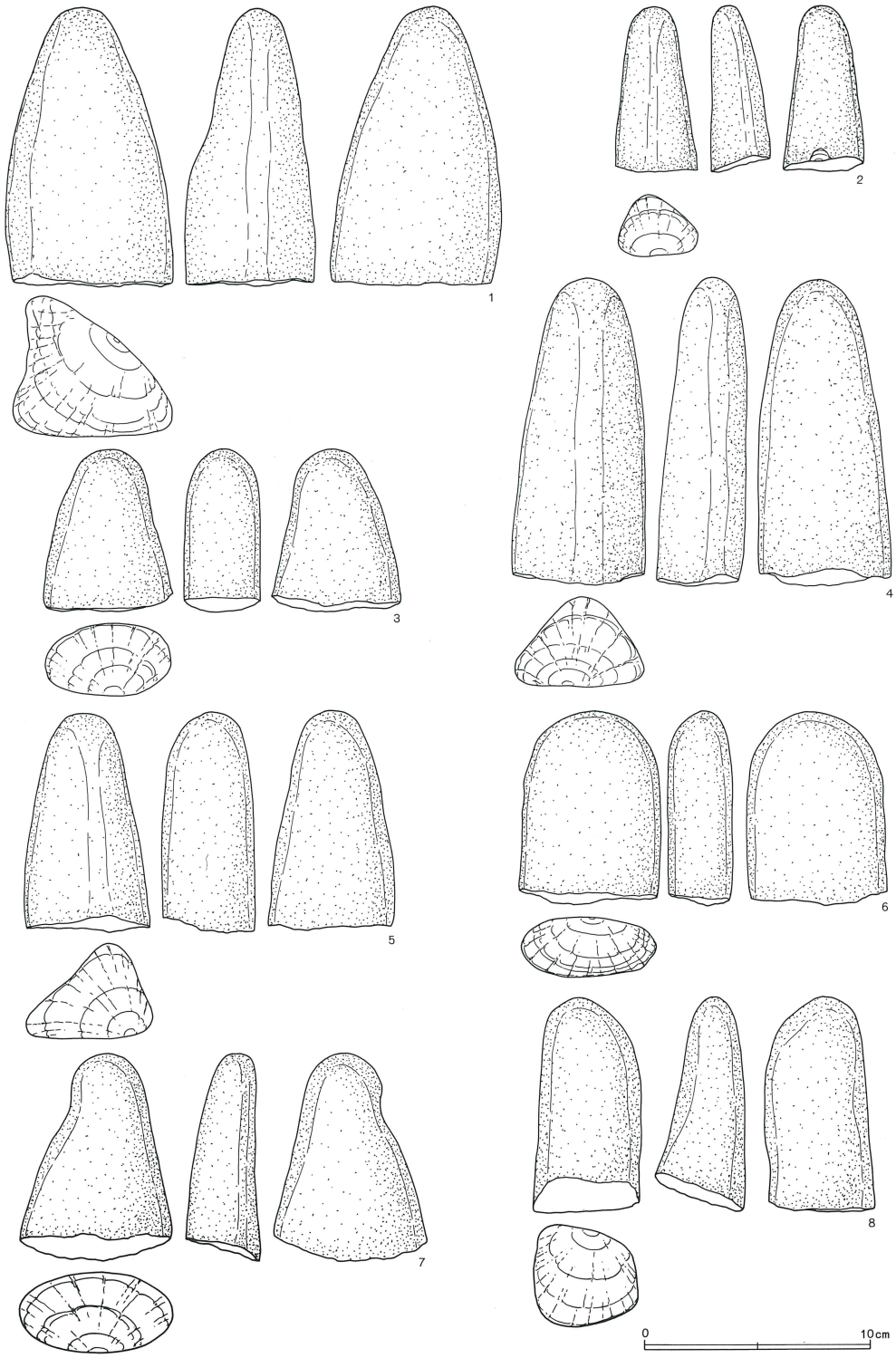
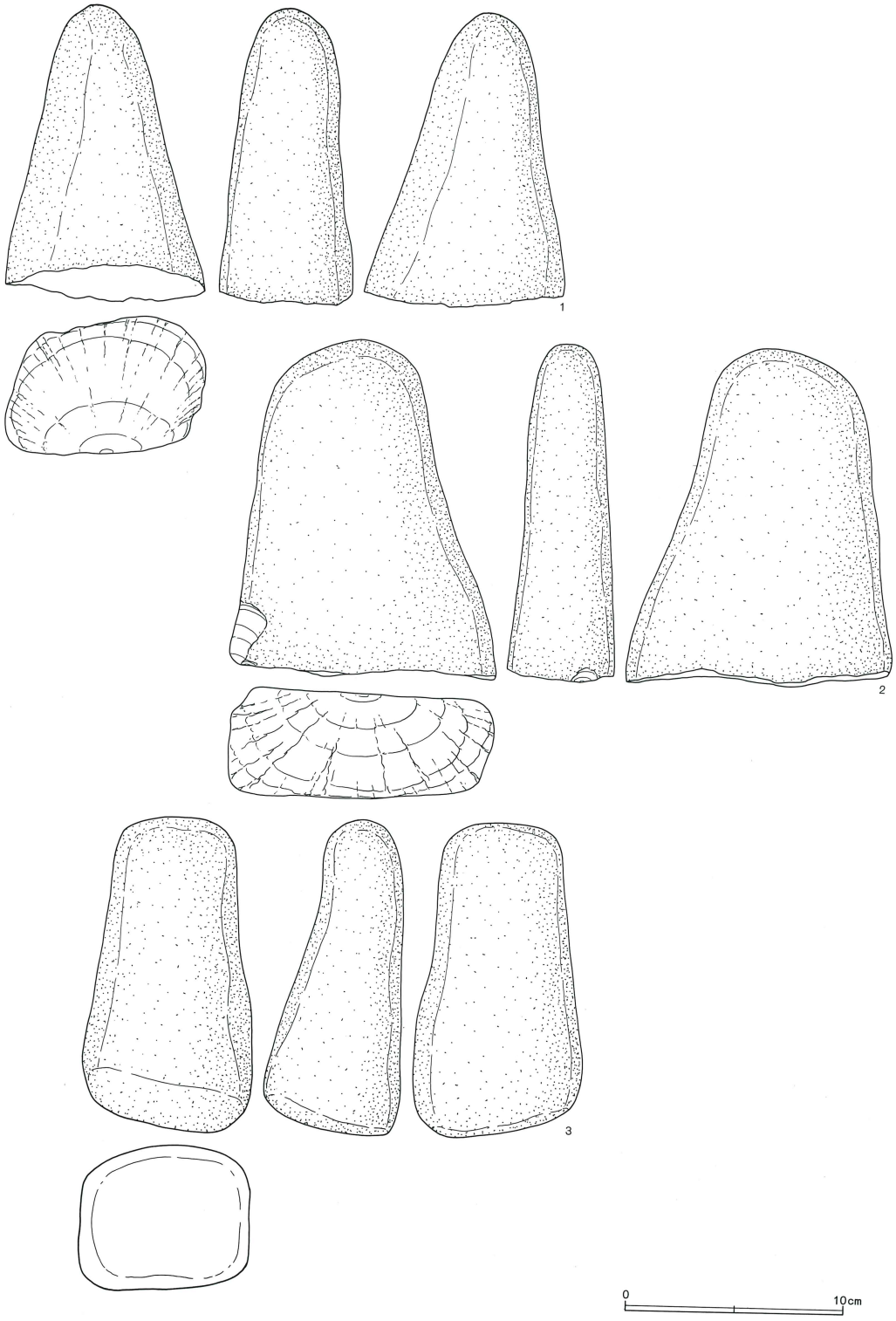
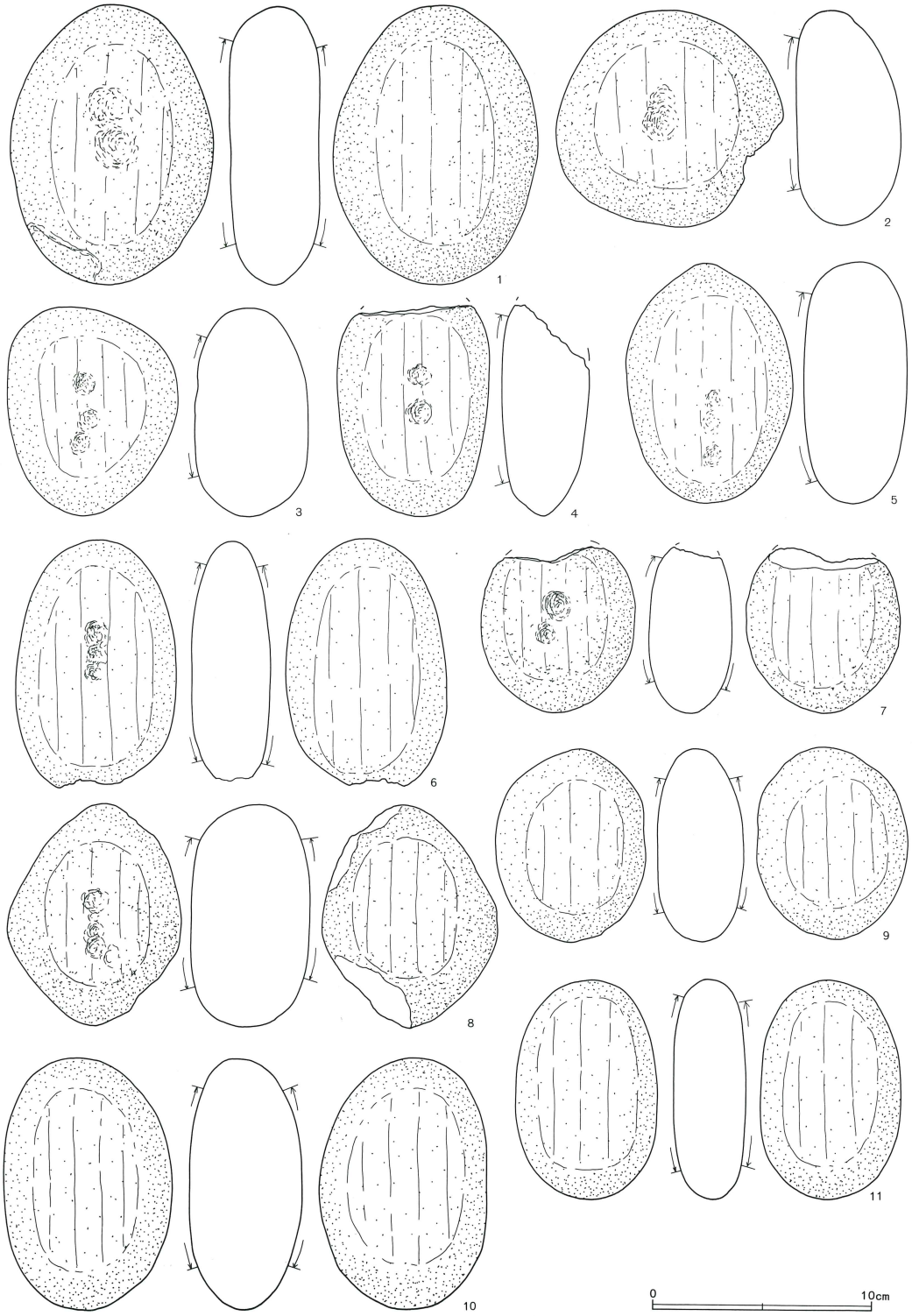


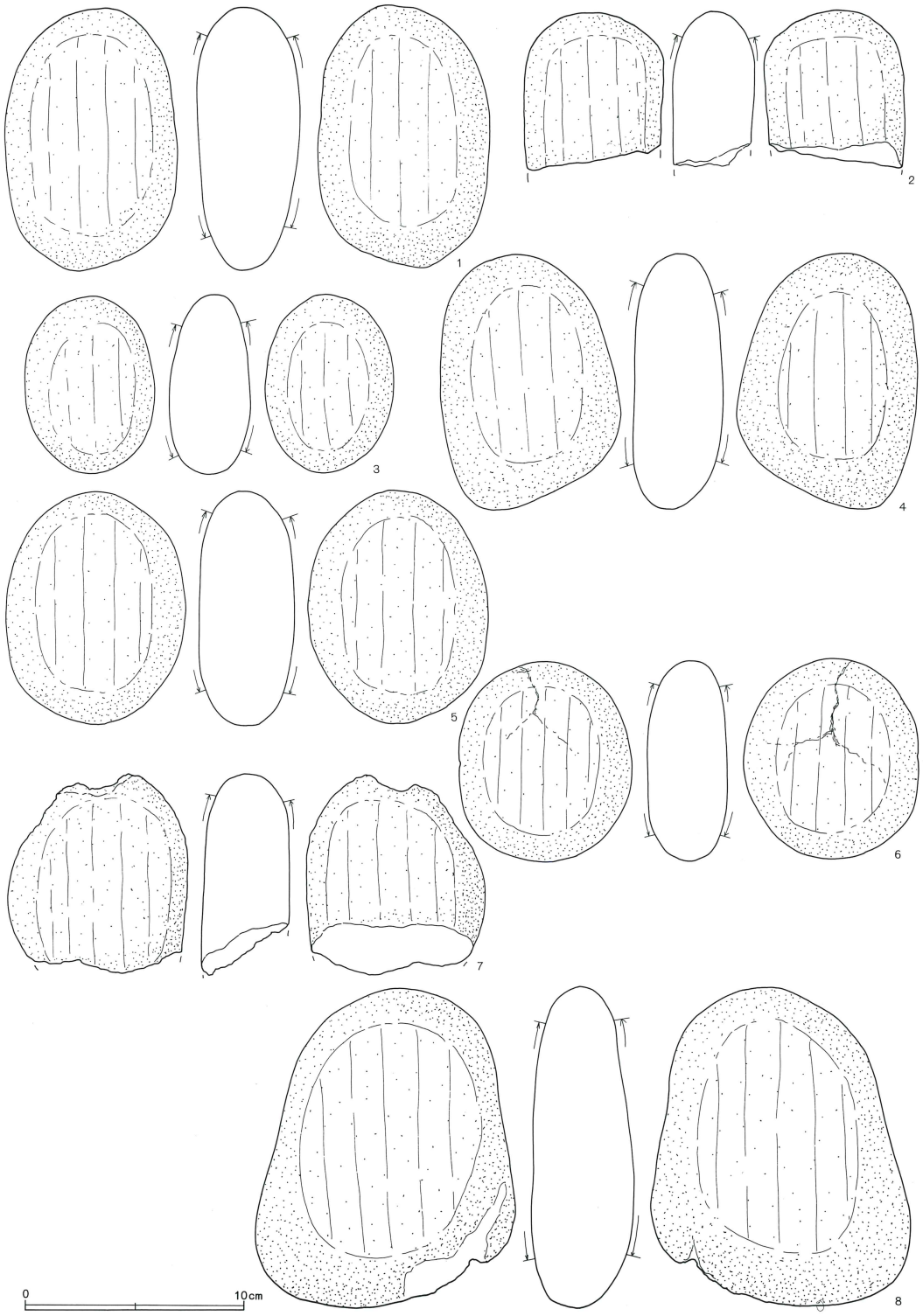
第184図　スタンプ形石器 (13)



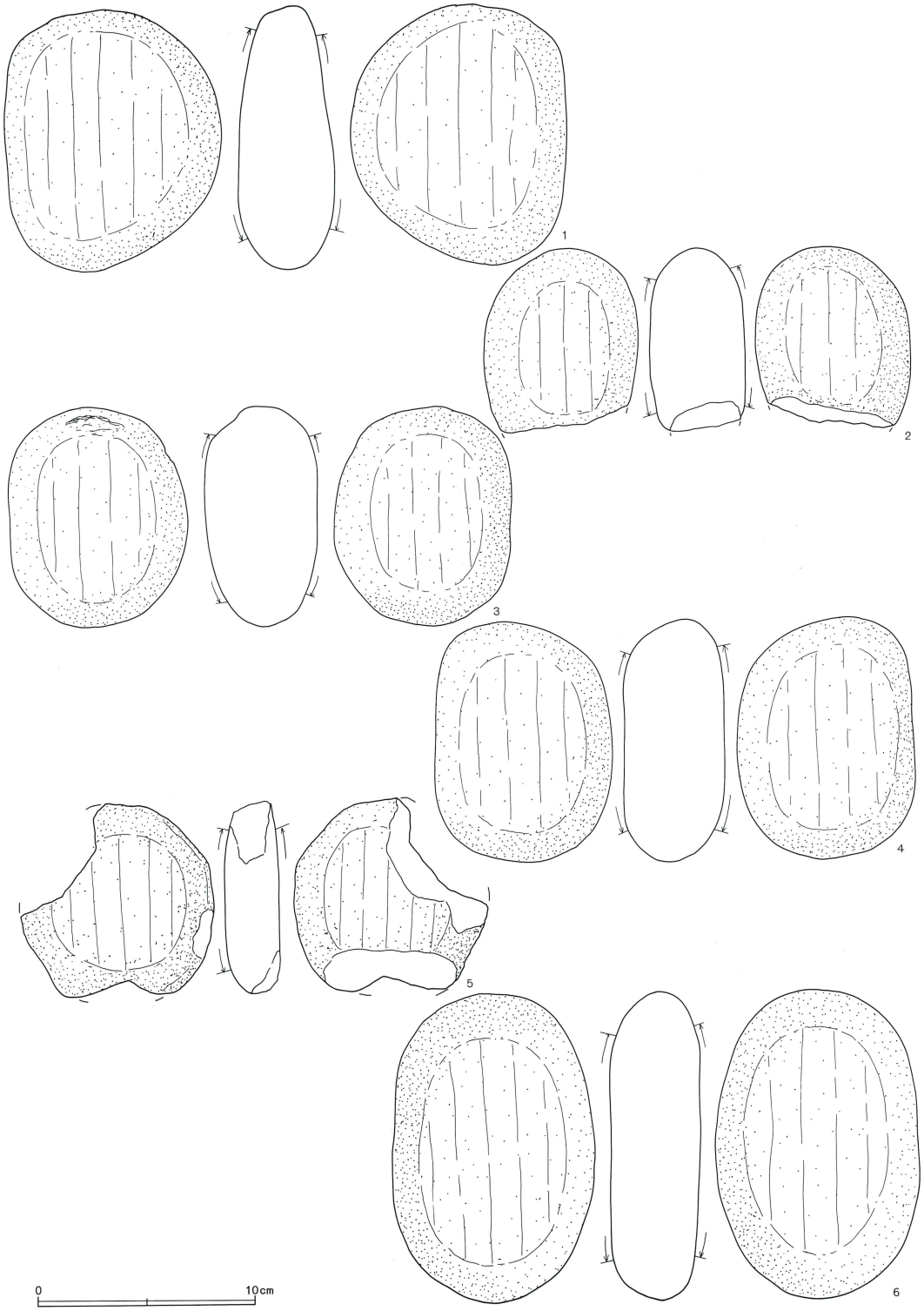
第185図　スタンプ形石器 ⑭



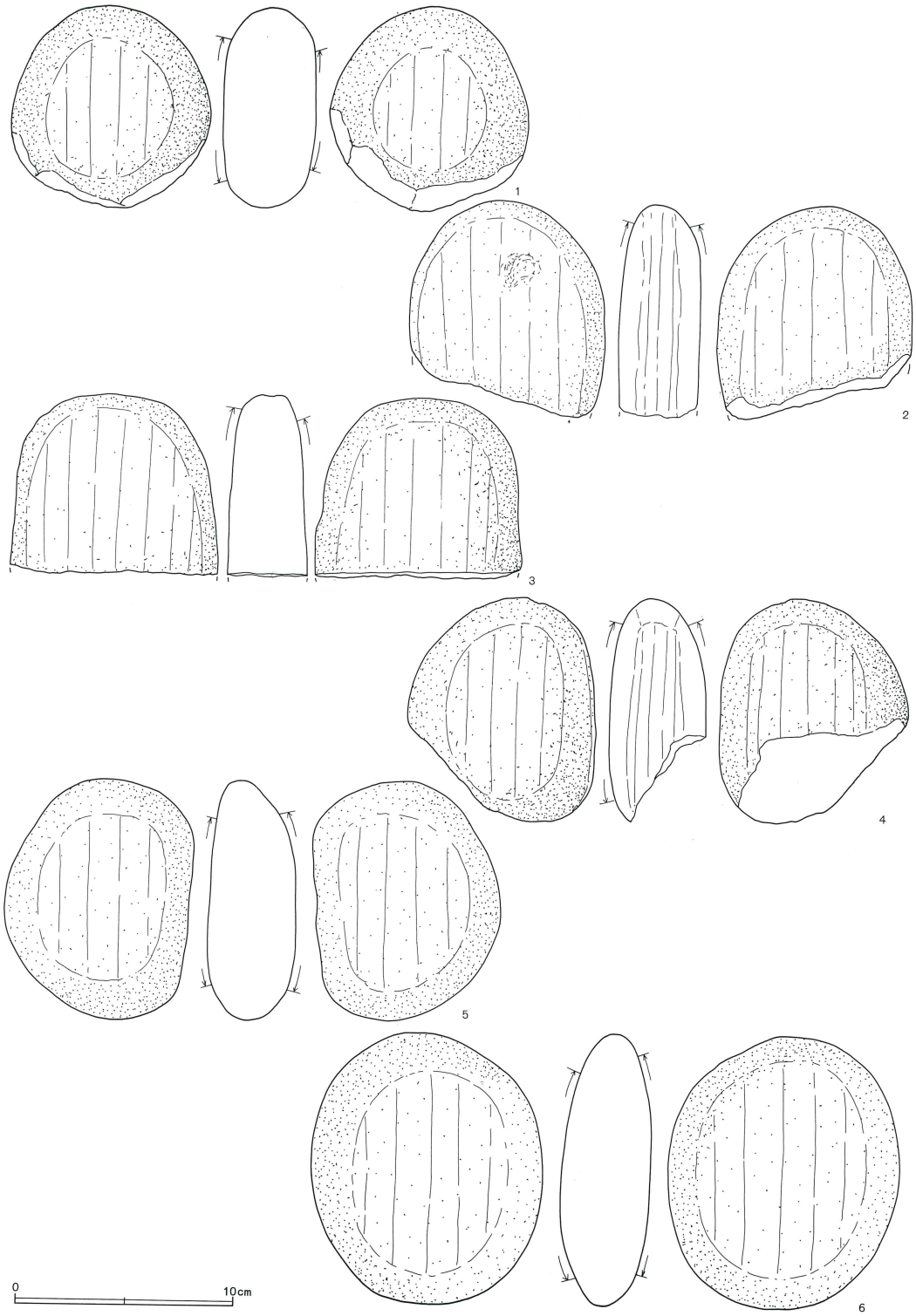
第186図　磨石 (1)



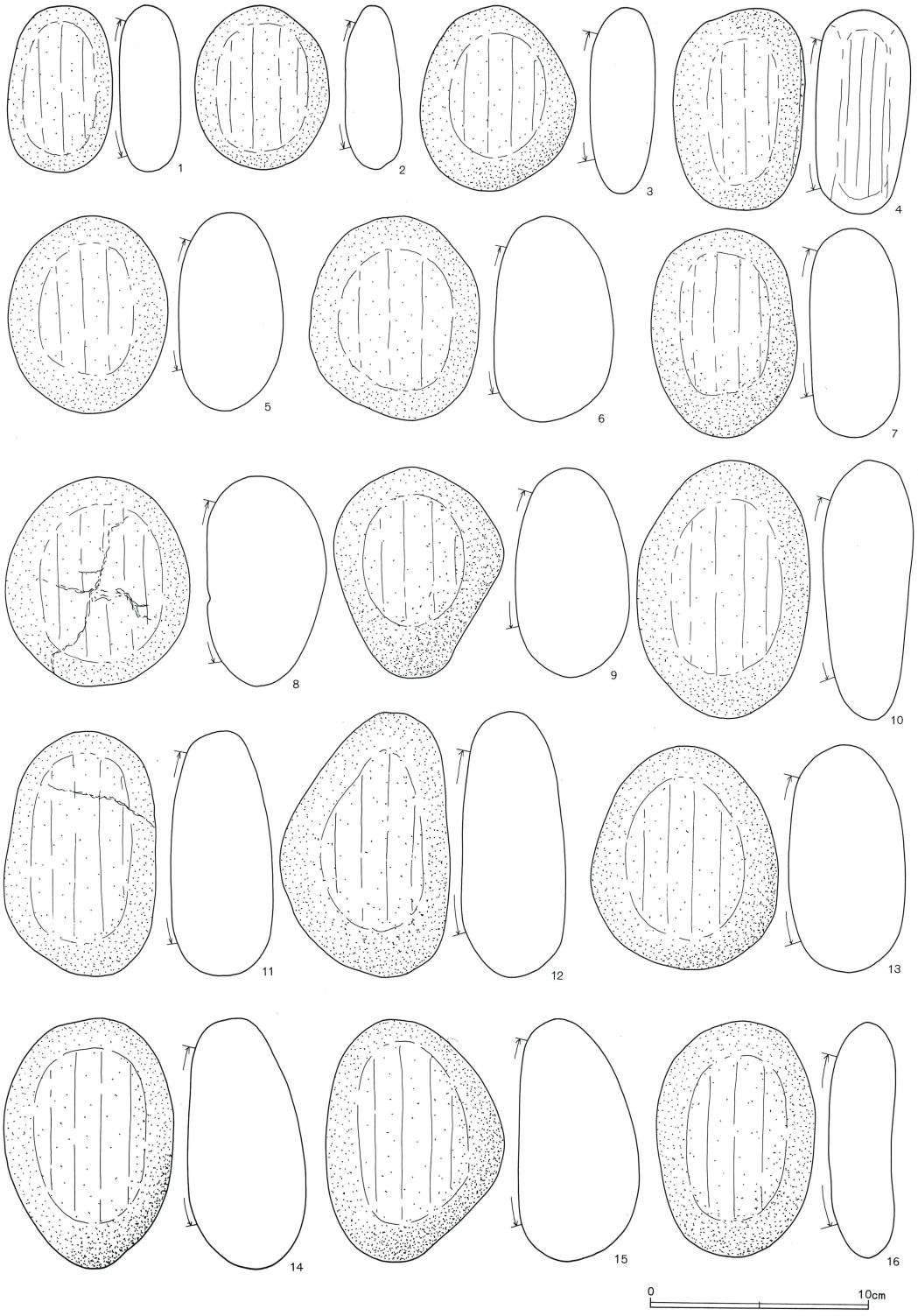
第187図　磨石　(2)



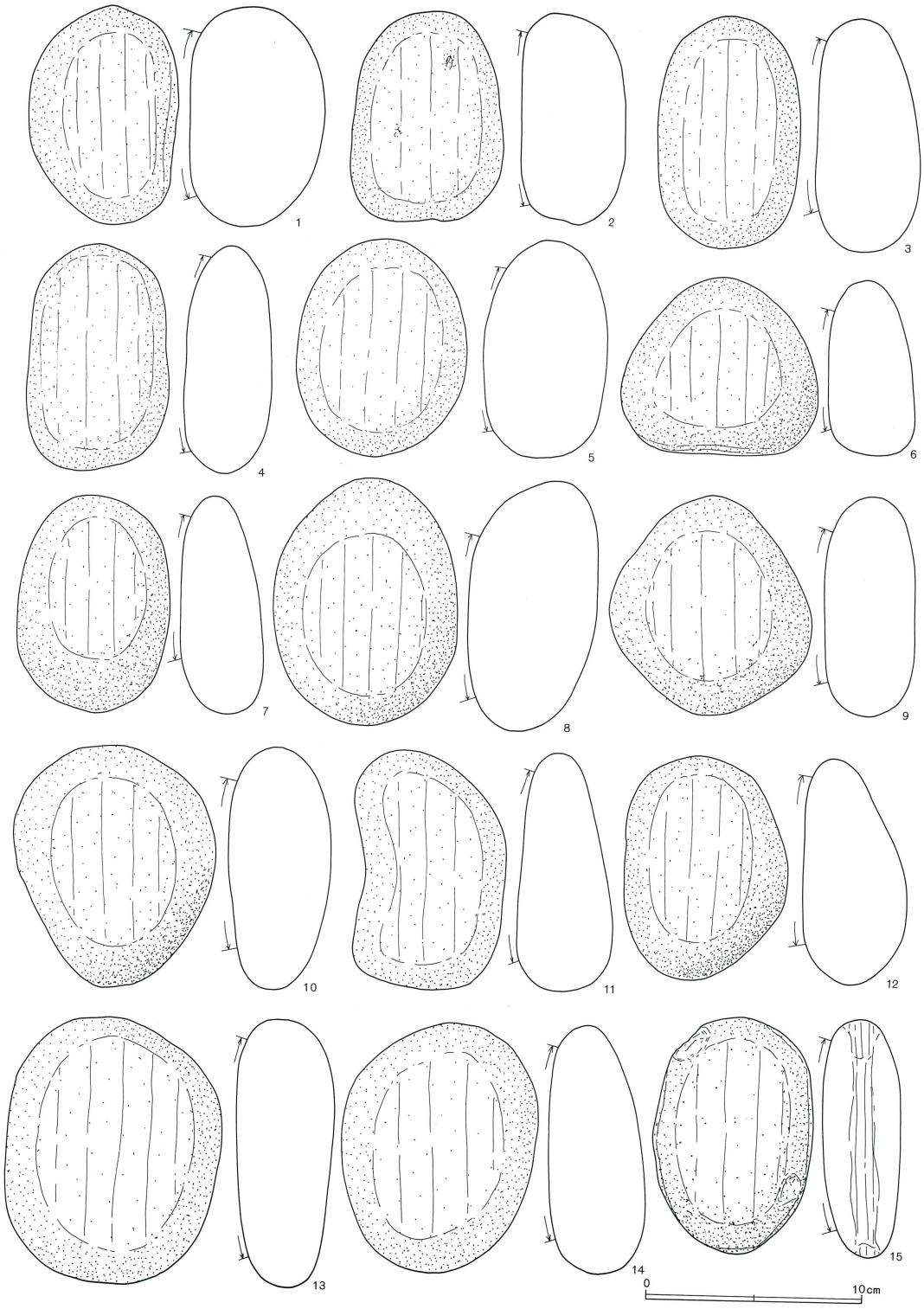
第188図　磨石 (3)



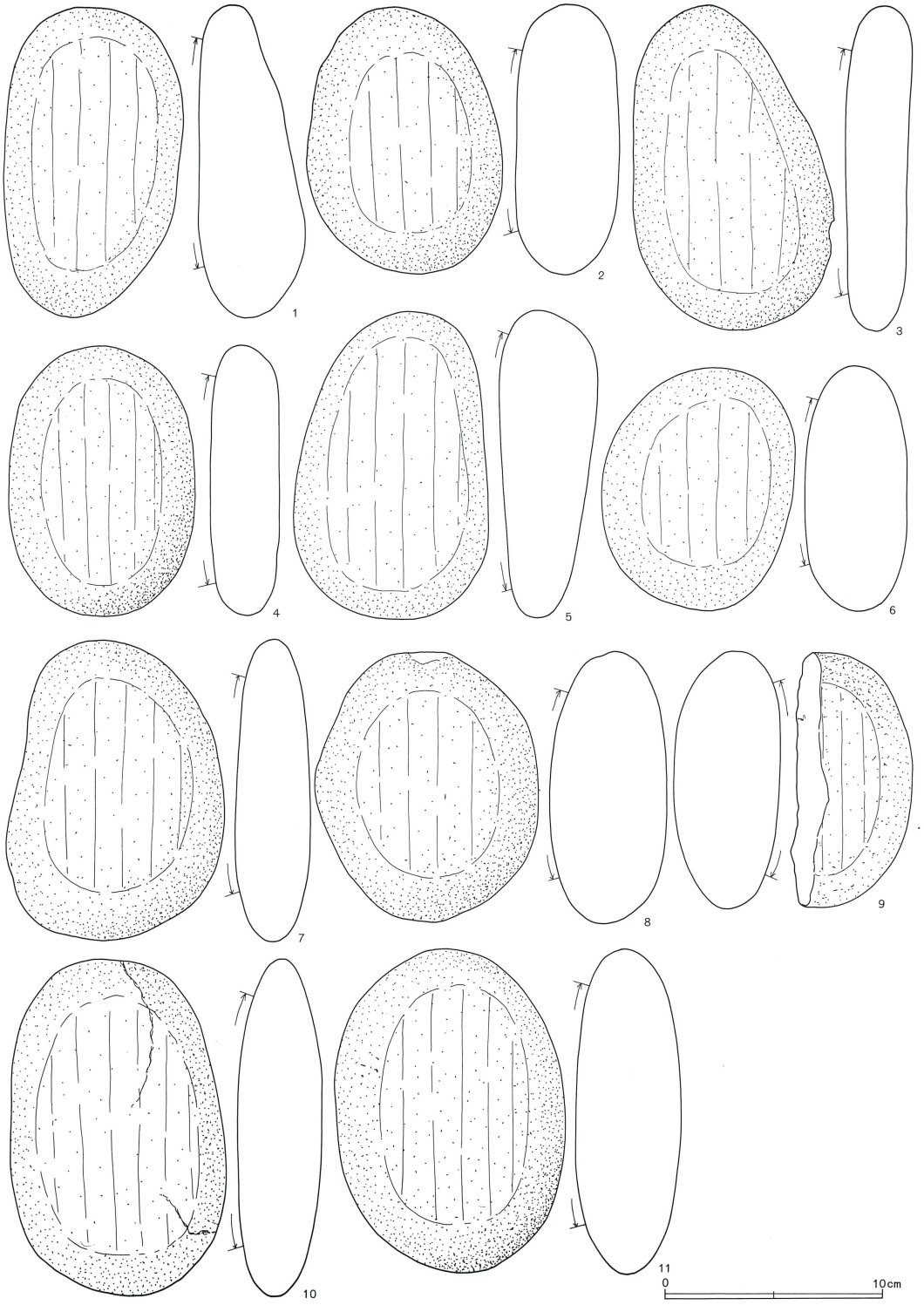
第189図　磨石 (4)



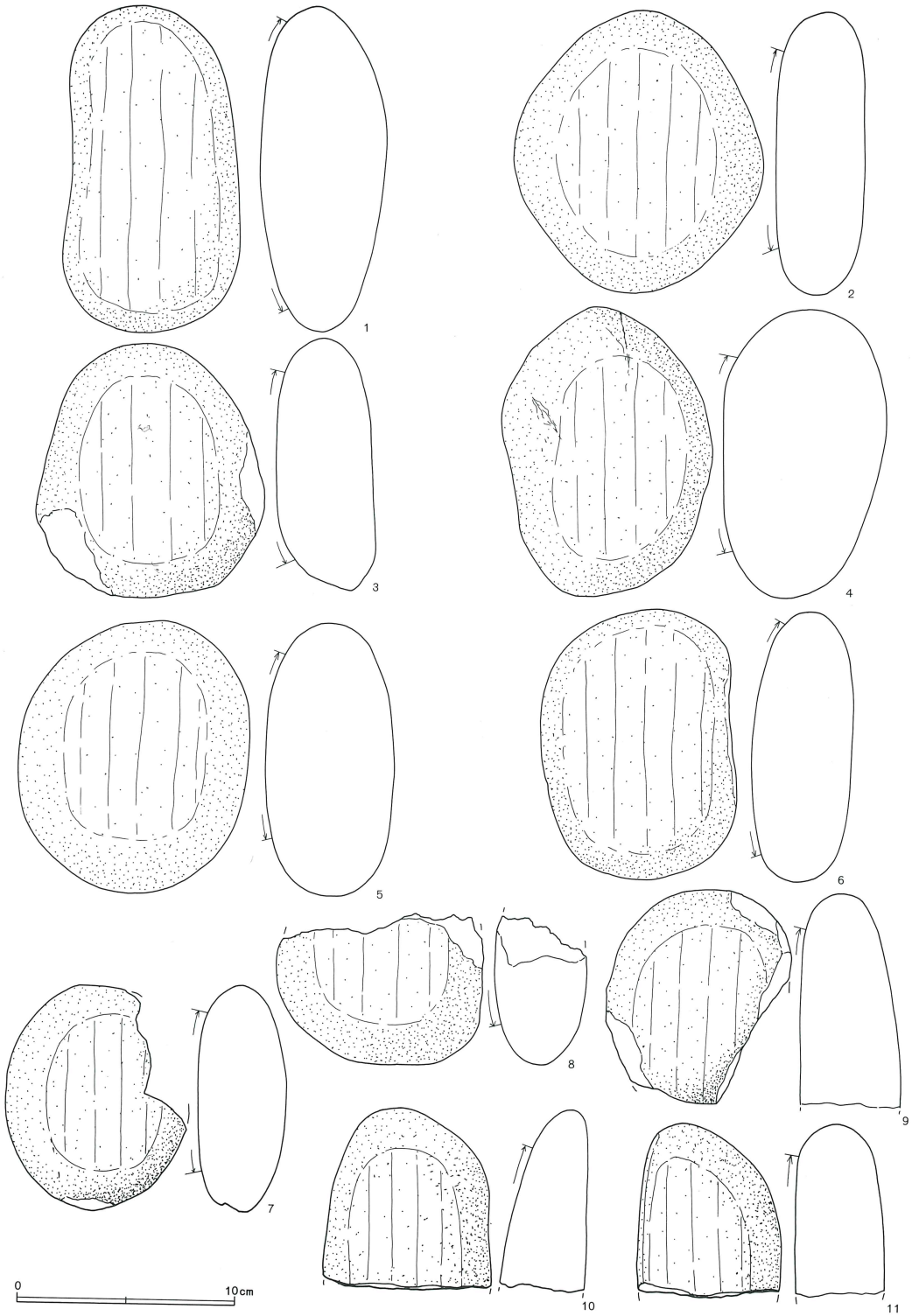
第190図　磨石　(5)



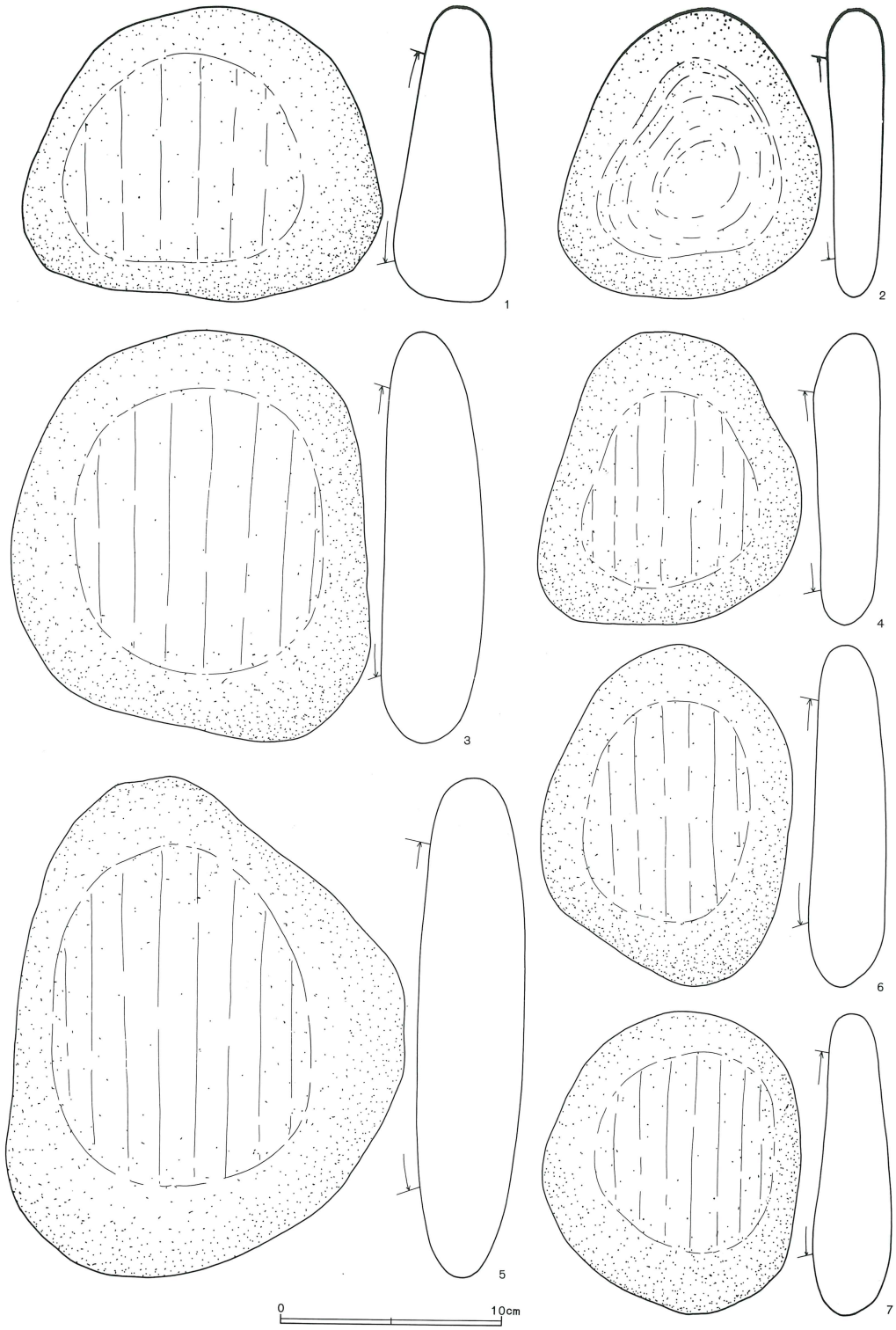
第191図　磨石 (6)



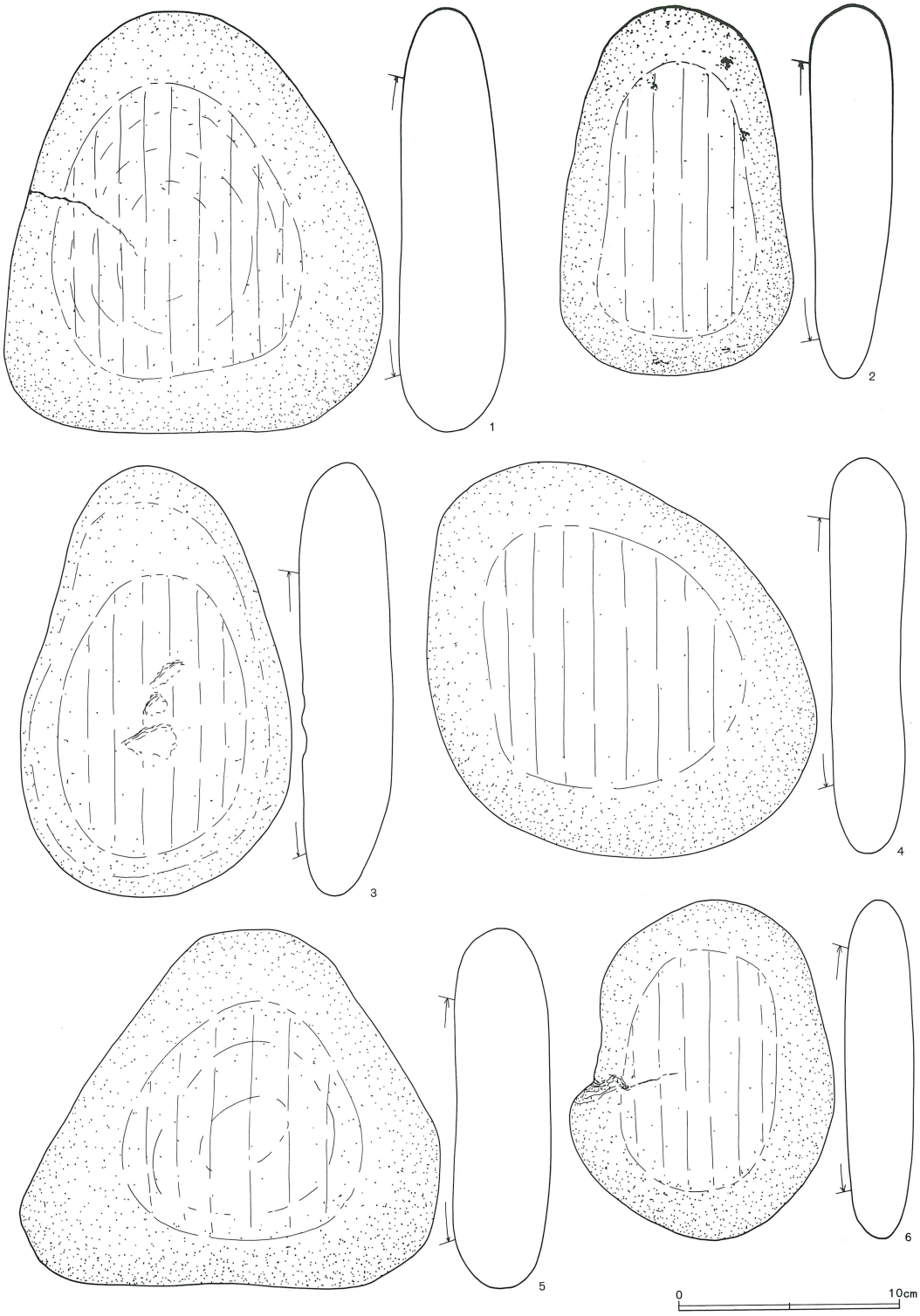
第192図　磨石 (7)



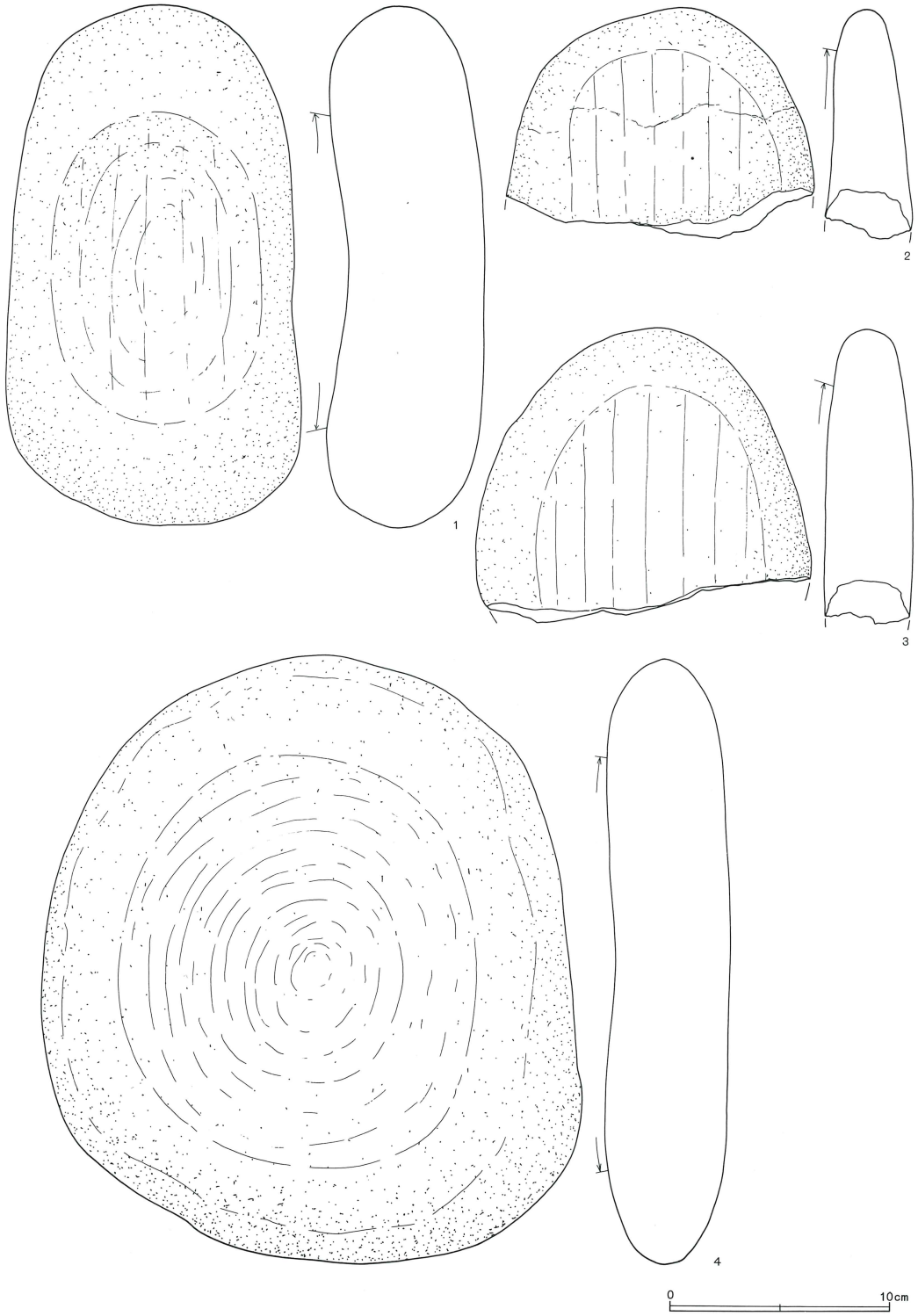
第193図　磨石　(8)



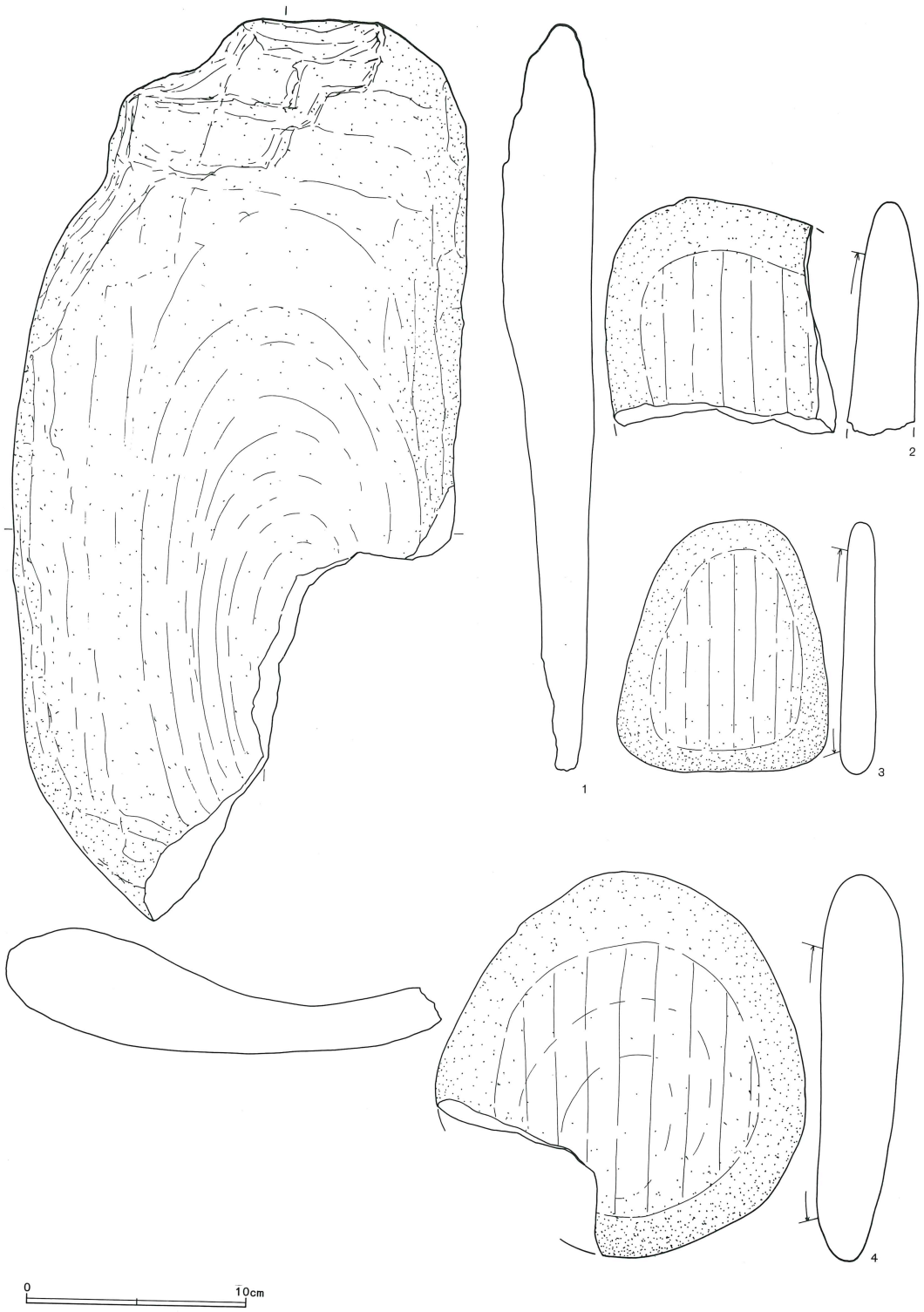
第194図　石皿 (1)



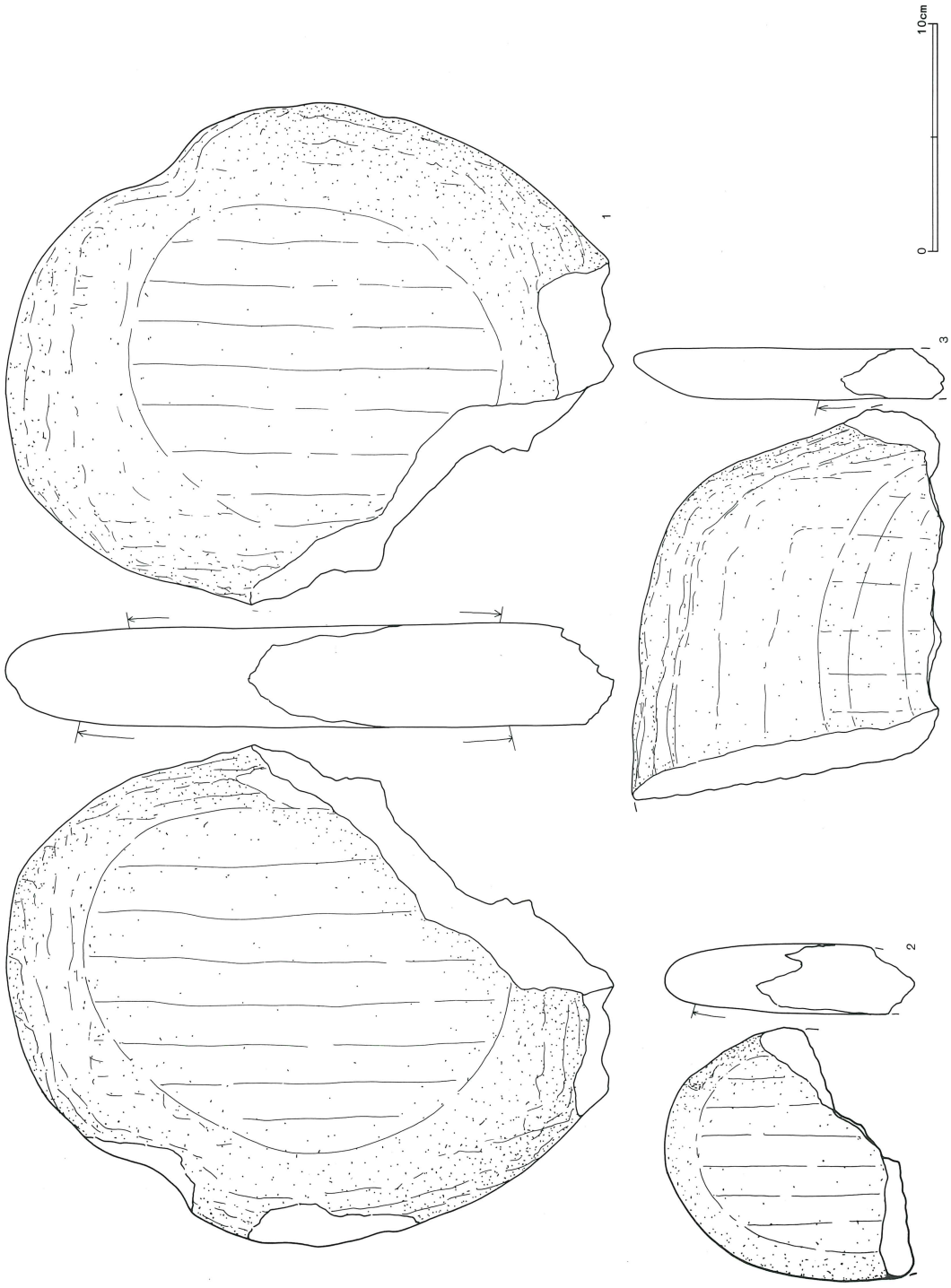
第195図　石皿 (2)



第196図　石皿 (3)

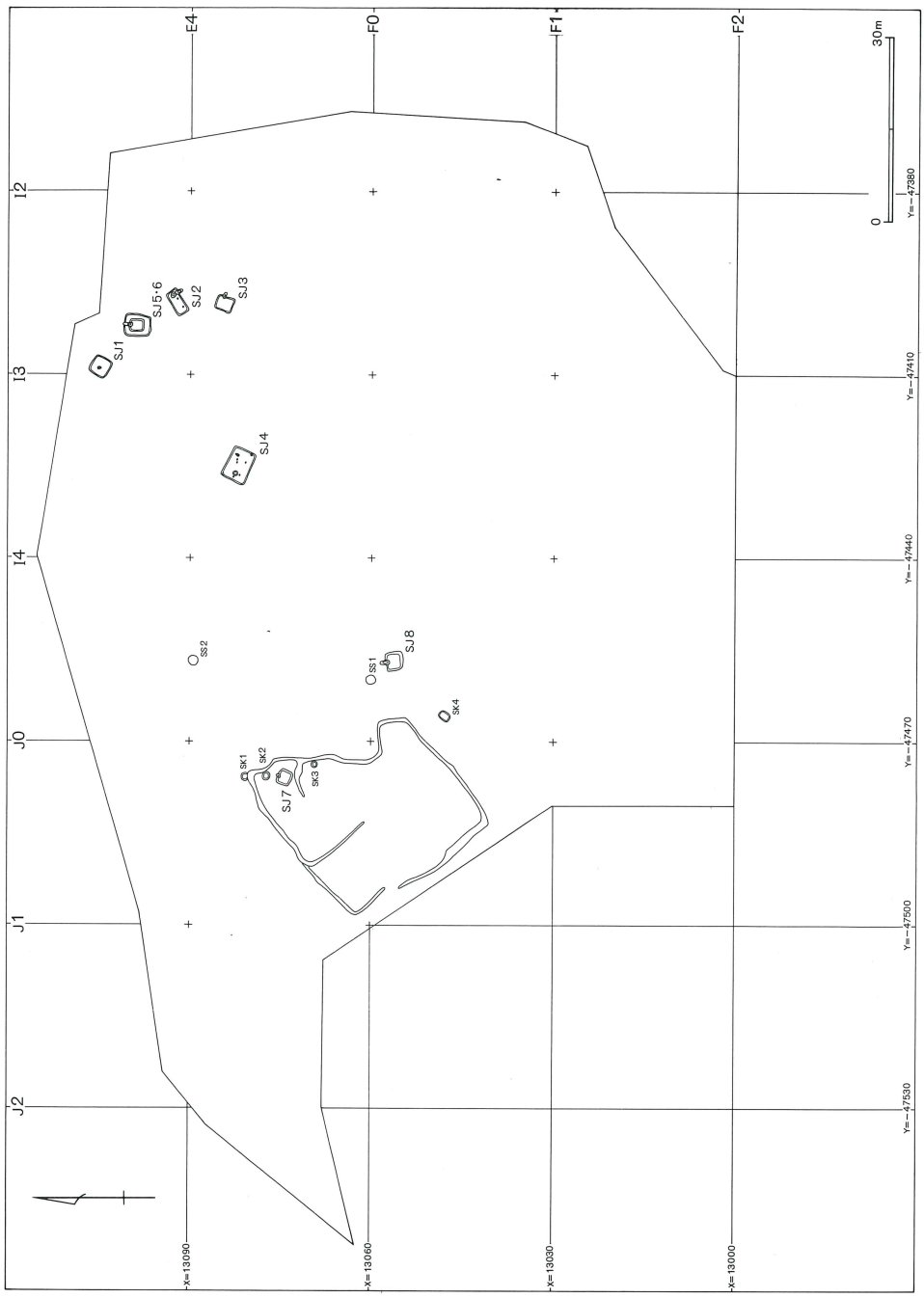


第197図　石皿 (4)



第198図　石皿　(5)

Ⅴ．四反歩遺跡東地区の調査



第199図　四反歩遺跡東地区全体図

四反歩遺跡東地区は、その南側の大半を南地区と接しており、境界部分に浅い谷が東から西へと入り込んでいる。谷はＦ１Ｉ４区にかけては明瞭であるが、それ以西になると南地区との境界になる程明瞭ではない。遺物の分布も谷部では希薄であるが、それ以西の台地肩部から上面にかけては濃厚となる。東地区では遺物のドット処理は行えなかったが、Ｆ１Ｉ４区以西の台地部では南地区程ではないが遺物分布の切れ目がなく、南地区との境界が不明瞭であった。

南地区と接する地区では縄文時代早期の遺物が多く分布しており、特に、条痕文系土器群の分布が著しい。この付近の南地区では、撚糸文期の住居跡等が検出されており、撚糸文系土器群の分布が濃いものと思われたが、東地区の境界にかけてその分布を薄くしている。東地区における条痕文系土器群の出土状態は、特徴的な傾向をみせている。

縄文時代では調査区の北端であるＥ３Ｉ２区で、前期の住居跡が１軒検出されている。他に、縄文時代の住居跡は存在せず、遺跡全体としても前期の遺物量は少ない。この遺跡独特の住居跡分布状態を示している。他に、早期の集石土壙が２基検出されている。集石は土壙の覆土にまで及び、南地区にみられた集石遺構とは、構造的に異なるものと思われる。更に、Ｆ０Ｉ４区では、落し穴状土壙が１基検出されており、隣接する南地区でも同様な土壙が検出されていることから、同時期の土壙と思われる。土器は撚糸文系土器群も含まれるが、条痕文系土器群が主体を占める。時期は条痕文系土器群初頭期の野島式土器を中心とする。他には、前期の諸磯式と後期の堀之内式が若干出土している。石器は、破砕礫や剝片類が圧倒的に多く、製品は石斧、礫器を中心とした早期の石器類が多い。

弥生時代では、後期の吉ヶ谷式期の住居跡が１軒検出された。非常に特徴的な分布で、周辺には土壙も存在していない。住居跡は焼失しており、南地区と同様な廃棄状態を呈している。遺物は甕を中心にして、少量出土している。

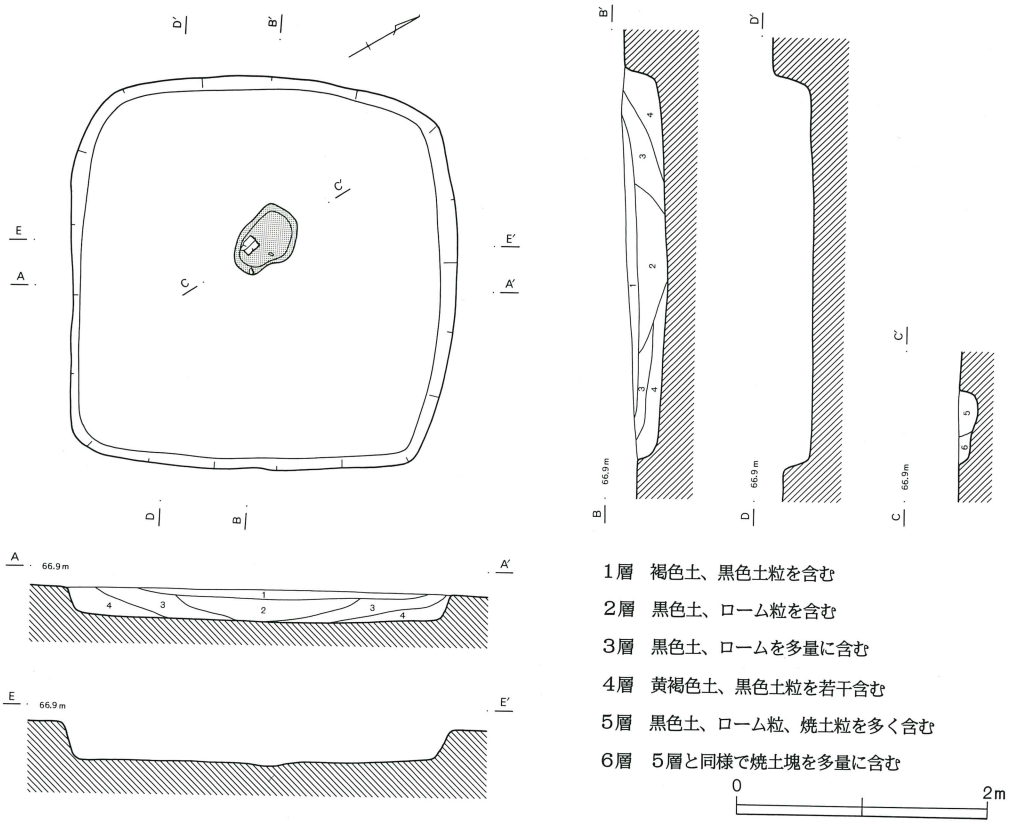
奈良時代では７軒の住居跡が検出されている。住居跡は東と西の２群に分かれており、東群では８世紀第１四半期の第３号住居跡、第２四半期の第２号住居跡、第３四半期の第５・６号住居跡が存在し、西群には８世紀第１四半期の第７号、第８号住居跡が存在する。また、西群には住居跡と土壙等を連結する道跡も検出されている。

１．縄文時代の遺構と遺物

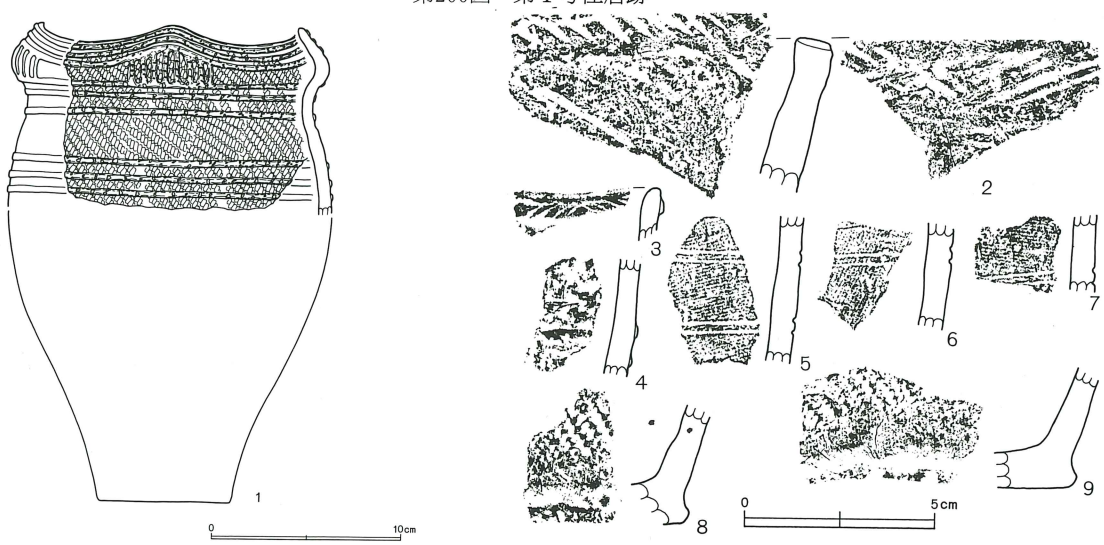
第１号住居跡（第200図、第201図）

Ｅ３Ｉ２区～Ｅ３Ｉ３区にまたがって位置する。南東に奈良時代の第５・６号住居跡が隣接するが、縄文時代の遺構は存在しない。北西方向に長軸をとり、ほぼ方形を呈する。長径3.21m、短径3.08m、深さ32cmを測る。床面はほぼ平坦面を呈し、壁はやや緩く立ち上がる。柱穴や壁溝は検出されなかった。炉は地床炉で、中央部やや北寄りに存在する。覆土は４層で構成され、１層が黒色土粒子を含む褐色土、２層がローム粒子を含む黒色土、３層がローム粒子を多量に含む黒色土、４層が黒色土粒子を若干含む黄褐色土である。住居跡の所属時期は前期諸磯ｂ式期である。

遺物は、器形復元可能な土器の大形破片と若干の土器片が出土した。第201図１は諸磯ｂ式の浮線文系土器であり、緩い４単位の波状口縁が内彎し、頸部で強く括れる器形を呈する。口縁に沿っ

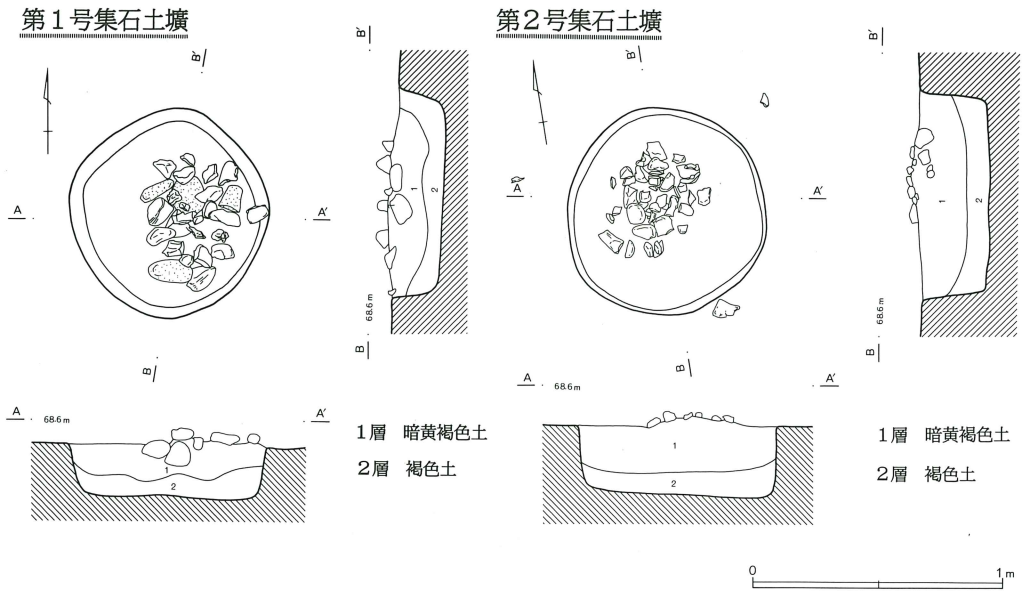


第200図　第1号住居跡



第201図　第1号住出土土器

て3本の浮線文を施文して口縁部を区画し、頸部と胴部も3本浮線文で区画する。波頂部下は8本の浮線文を垂下する。浮線文の上には叉状の刺突文を施す。地文は単節ＲＬを施文し、縄文施文後



第202図　縄文時代の集石土壙

浮線文を施文する。推定口径16.8cm、現存高10cmを測る。

２は口唇部に刻みを施す早期の条痕文系土器群で、流入品である。内外面に粗い条痕文を施文し、繊維を少量含む。３、４は前期諸磯ｂ式の浮線文系土器である。３は口縁部破片で、緩い波状を呈し、口縁に沿って扁平な浮線文を施文し、細かな異方向の刻みを施す。４は縄文ＲＬ地文上に２本の浮線文を施す。５～７は細い平行沈線文を施すもので、地文に縄文を施文しない。７、８は底部破片であり、いずれも撚りの硬い単節ＲＬを施文している。

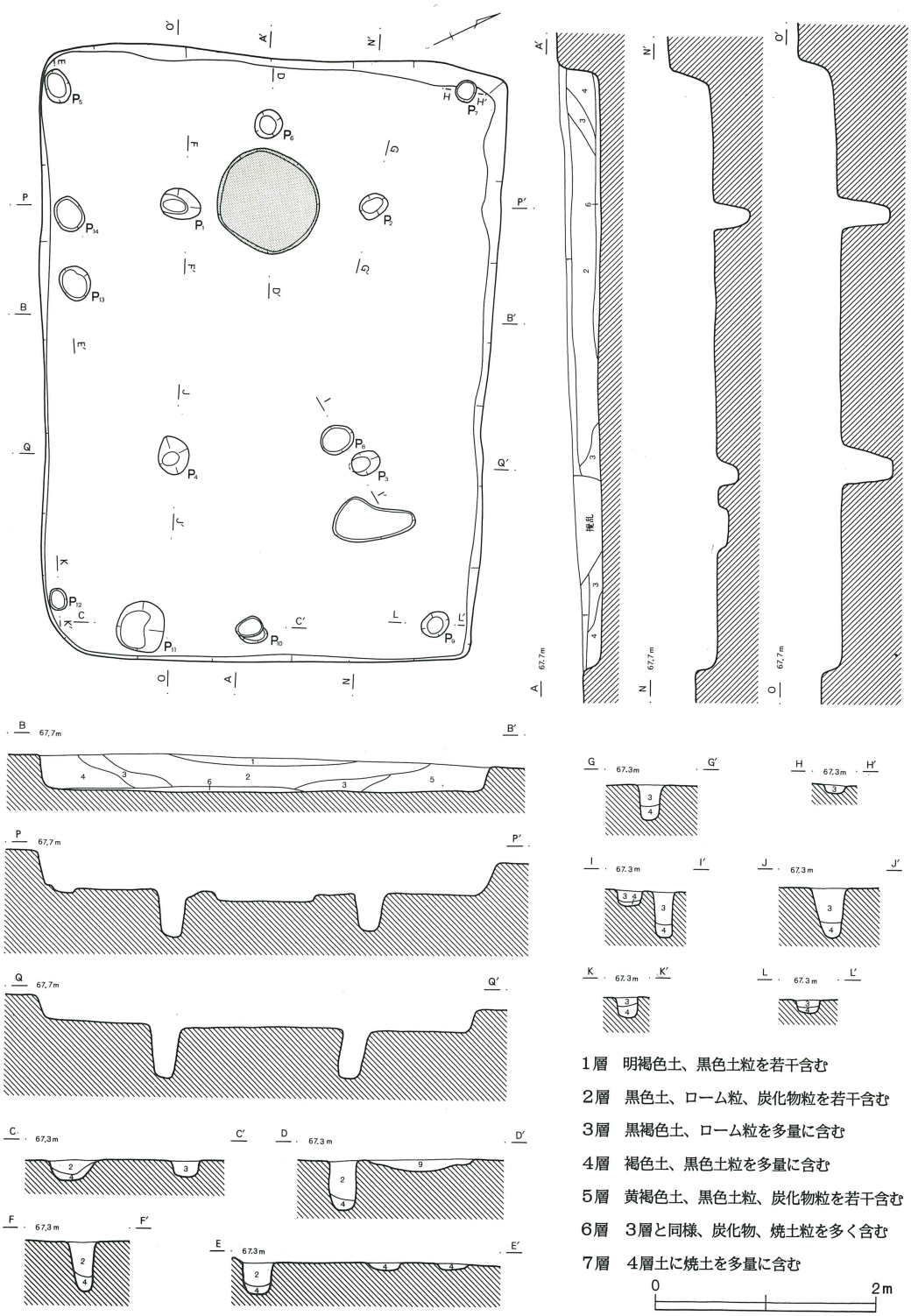
第１号集石土壙（第202図）

Ｅ４Ｉ４区に位置する。南に奈良時代の第８号住居跡が隣接する。プランはほぼ円形を呈し、長径0.84m、短径0.81m、深さ24cmを測る。覆土は２層で、１層が黒色土粒子を含む暗黄褐色土、２層がローム粒子を多量に含む褐色土である。礫は第１層中にあり、大形の礫を多く含む。遺物は出土していないが、早期の中でも条痕文期の可能性が高い。

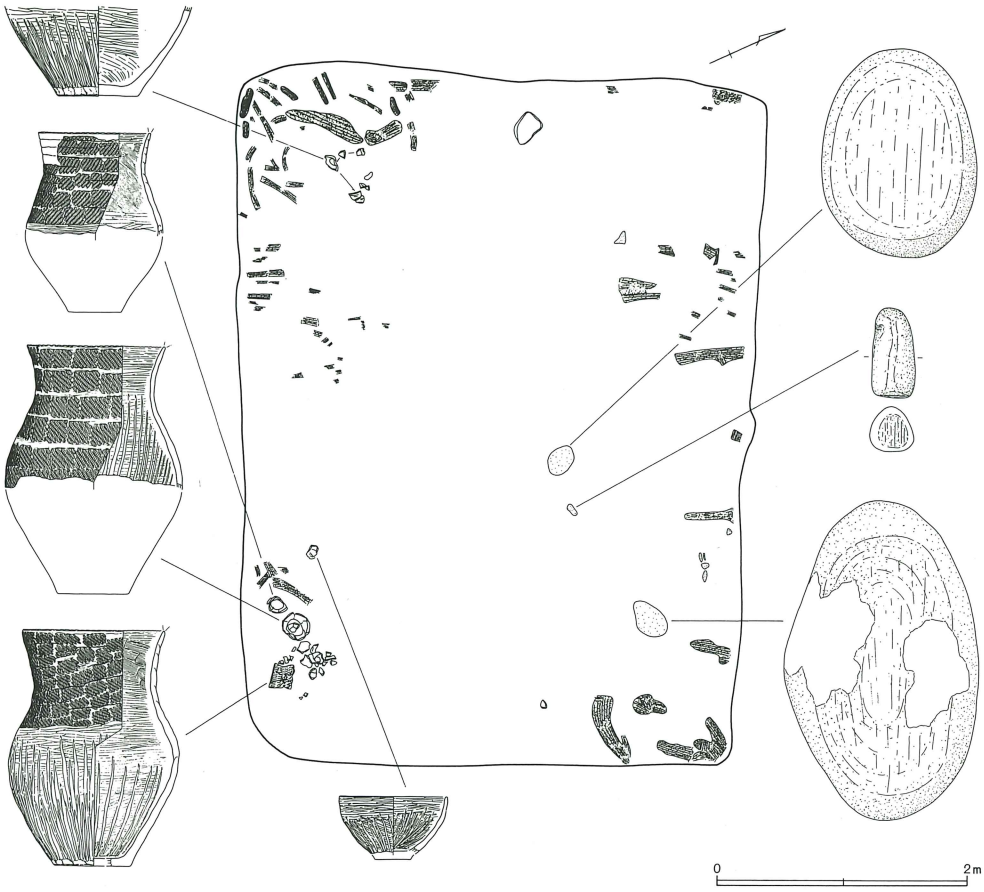
第２号集石土壙（第202図）

Ｅ３Ｉ４区～Ｅ４Ｉ４区にかけて位置する。周辺に遺構は存在しない。第１号集石土壙と同様に円形のプランを呈し、長径0.85m、短径0.83m、深さ30cmを測る。覆土は２層で、１層が黒色土粒子を含む暗黄褐色土、２層がローム粒子を多量に含む褐色土である。礫は、破砕礫が多い。遺物は出土していないが、第１号集石土壙と同様のものである。

2．弥生時代の遺構と遺物



第203図　第4号住居跡

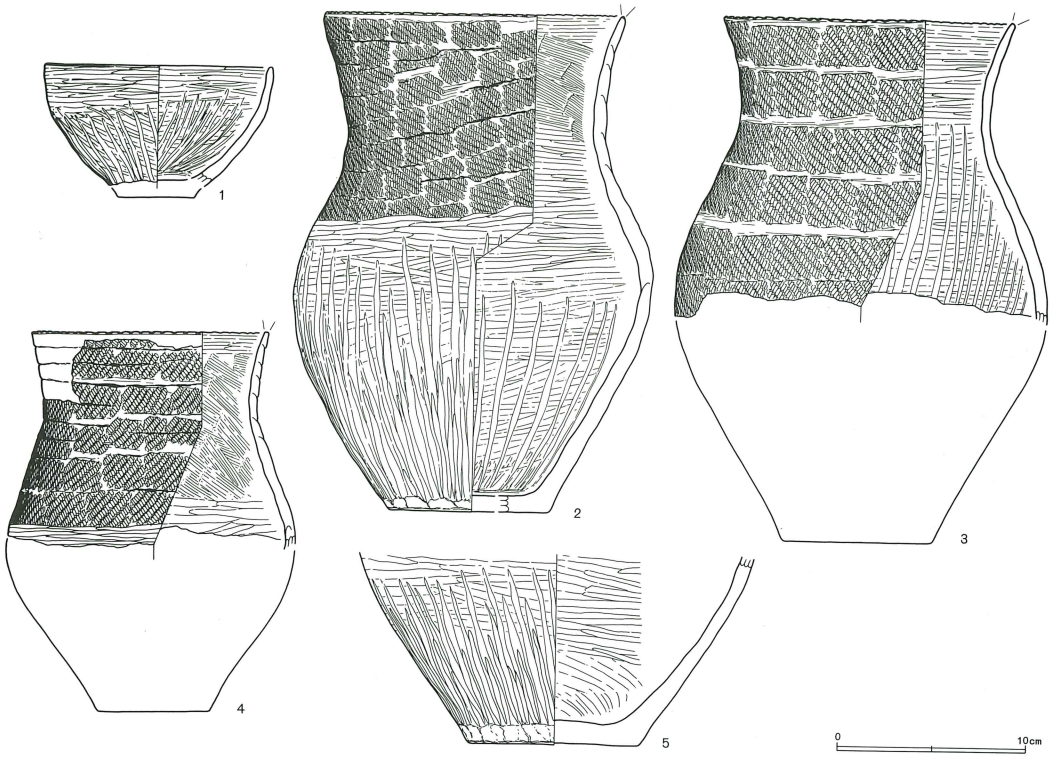


第204図　第４号住遺物分布図

第４号住居跡（第203図～第206図）

Ｅ４Ｉ３区に位置する。周辺には遺構はなく、北東に奈良時代の東群の住居跡群が存在する。北西方向に長軸をとり、北より約70度ほど西へ振れる。ほぼ長方形を呈し、長径5.50m、短径4.12m、深さ32cmを測る。床面は若干凹凸が存在するが、ほぼ平坦面を呈し、南東方向へ若干傾斜する。壁はやや緩く立上り、壁溝はない。柱穴は14本検出されたが、Ｐ１～Ｐ４の４本主柱の構造と思われる。深さはＰ１＝44cm、Ｐ２＝34cm、Ｐ３＝45cm、Ｐ４＝48cm、Ｐ５＝３cm、Ｐ６＝46cm、Ｐ７＝８cm、Ｐ８＝15cm、Ｐ９＝12cm、Ｐ10＝16cm、Ｐ11＝19cm、Ｐ12＝18cm、Ｐ13＝12cm、Ｐ14＝６cmを測る。炉は地床炉で、ほぼＰ１とＰ２の中央部に位置する。覆土は６層で構成され、１層が黒色土粒子を若干含む明褐色土、２層がローム粒子、炭化物粒子を少量含む黒色土、３層がローム粒子を多量に含む黒褐色土、４層が黒色土粒子を多量に含む褐色土、５層が炭化物粒子を少量含む黄褐色土、６層が炭化材、焼土粒子を多く含み、しまり粘性の強い黒褐色土である。住居跡の所時期は吉ヶ谷式期である。

住居跡は焼失しており、床面に縦横の炭化材が検出された。特に、壁近くでは良好に遺存しており、東壁と北西のコーナーに多く検出された。土器は南西コーナーに纏まって出土しており、完形

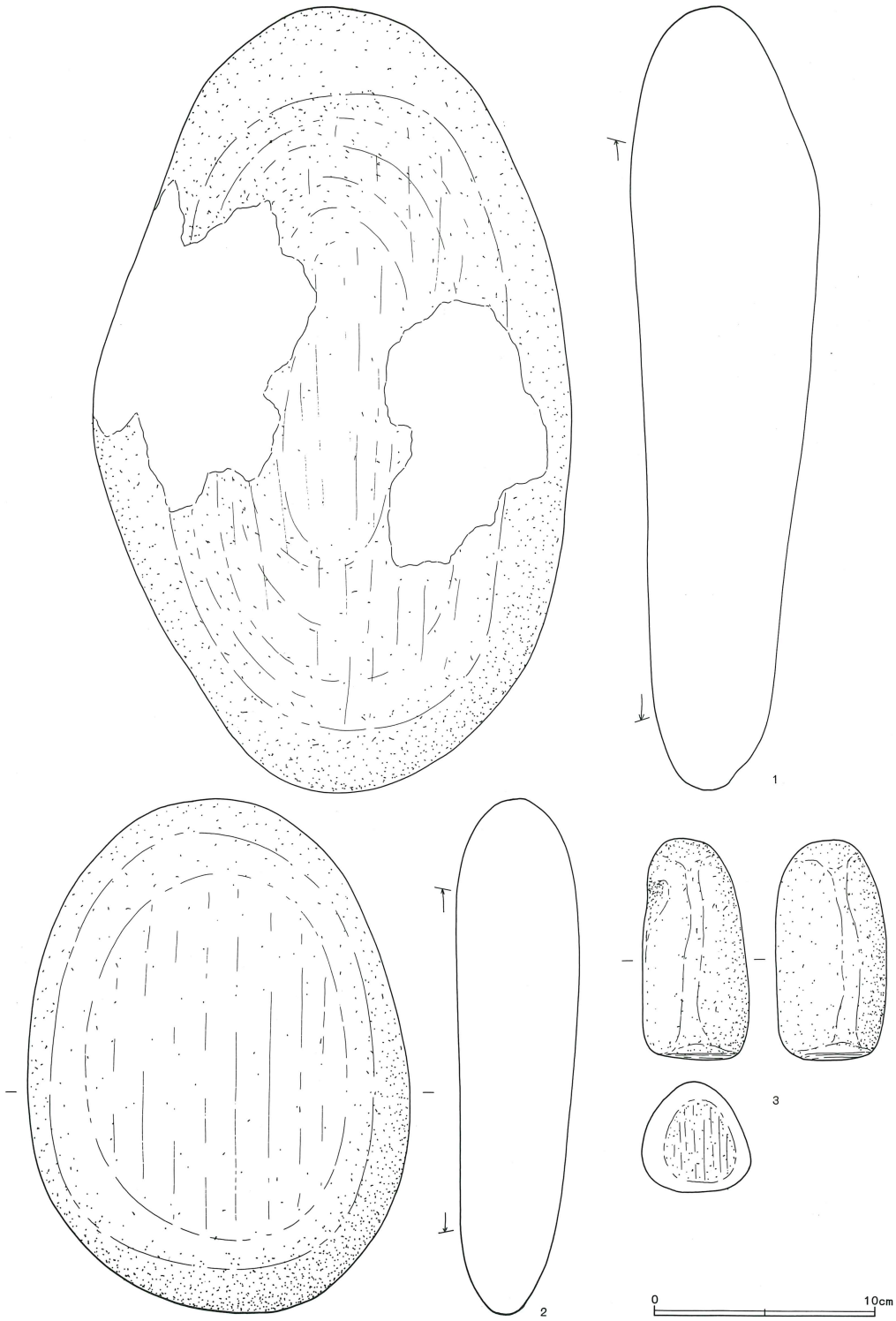


第205図　第４号住出土土器

土器を含め５個体が復元された。石器は中央部やや東寄りに石皿と磨石が出土し、南東コーナー近くに大形の石皿が検出されている。

第205図１は椀形土器である。底部を欠損するが、全体の７割程を現存する。内外面とも横位の磨きを施した後に、同下半部に縦位の磨きを施す。口径12.1cm、現存高6.3cmを測る。２は完形の甕形土器で、底部を一部欠損する。口縁部に輪積痕を残し、単節ＲＬの比較的短い縄文を施文する。胴部は縄文施文後に磨きを施しており、口縁部裏には刷毛目が一部残されている。頸部の括れが強く、胴部の張りが大きい甕である。口径16cm、器高26.1cm、胴最大径19.1cmを測る。３は頸部が強く括れ、胴部まで幅広の縄文ＲＬをやや帯状に施文する甕形土器で、口径15.5cm、現存高15.9cmを測る。４は口縁部に輪積痕を残し、単節ＬＲを５段に施文する。口唇部にも縄文を施文している。裏面は刷毛目を施した後、口縁部裏と胴下に磨きを行う。５は底部で、底径9.2cm、現存高10cmを測る。

石器は第206図の３点が出土した。１は長楕円形を呈する自然石を利用した大形の石皿である。火を受けているためか部分的に器面が剝落している。擦り面はあまり窪み面と成らず、浅い凹面を呈する。２は楕円形の扁平礫を利用した石皿であり、片面のみ使用されてやや凹面状を呈する。３は三角柱状の礫の一端を使用した磨石である。擦り面は平坦面を呈し、光沢がでる程使用されている。他の面は使用されない。

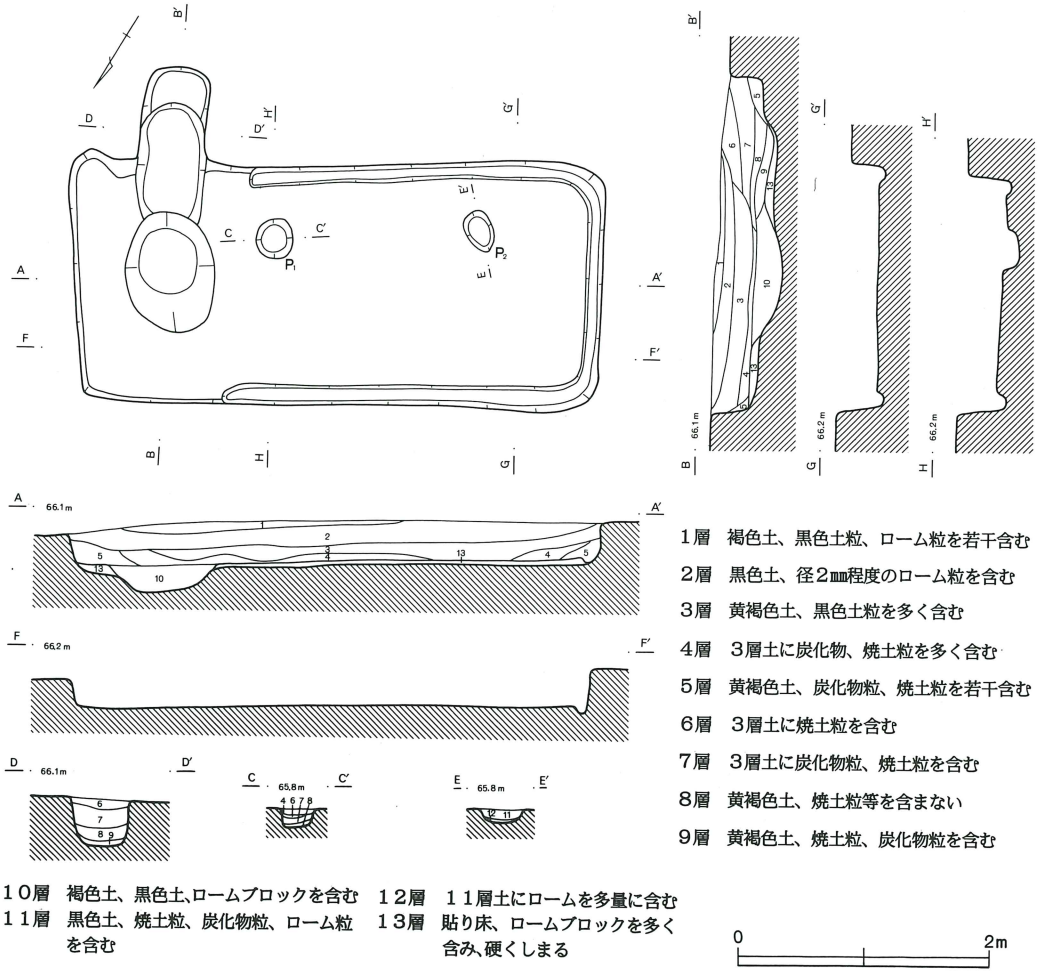


第206図　第４号住出土石器

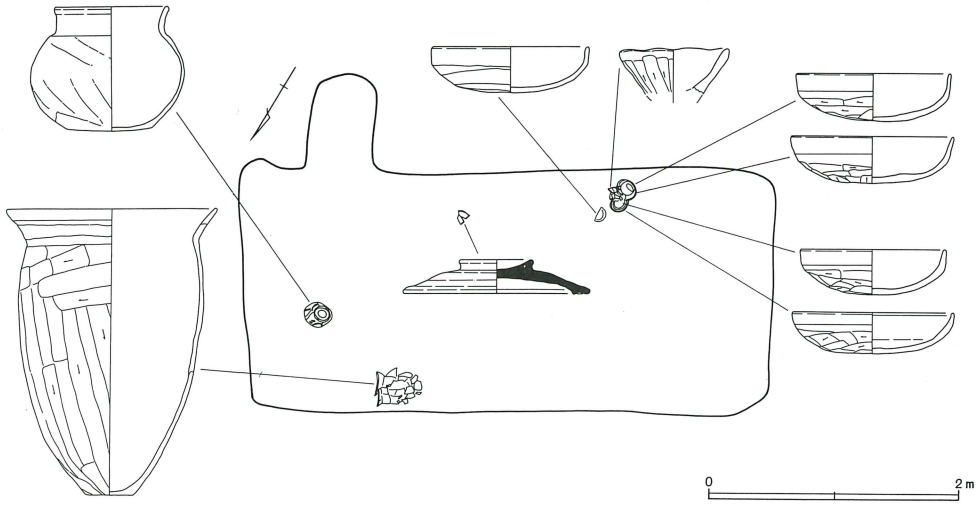
3．歴史時代の遺構と遺物

第２号住居跡（第207図～第209図）

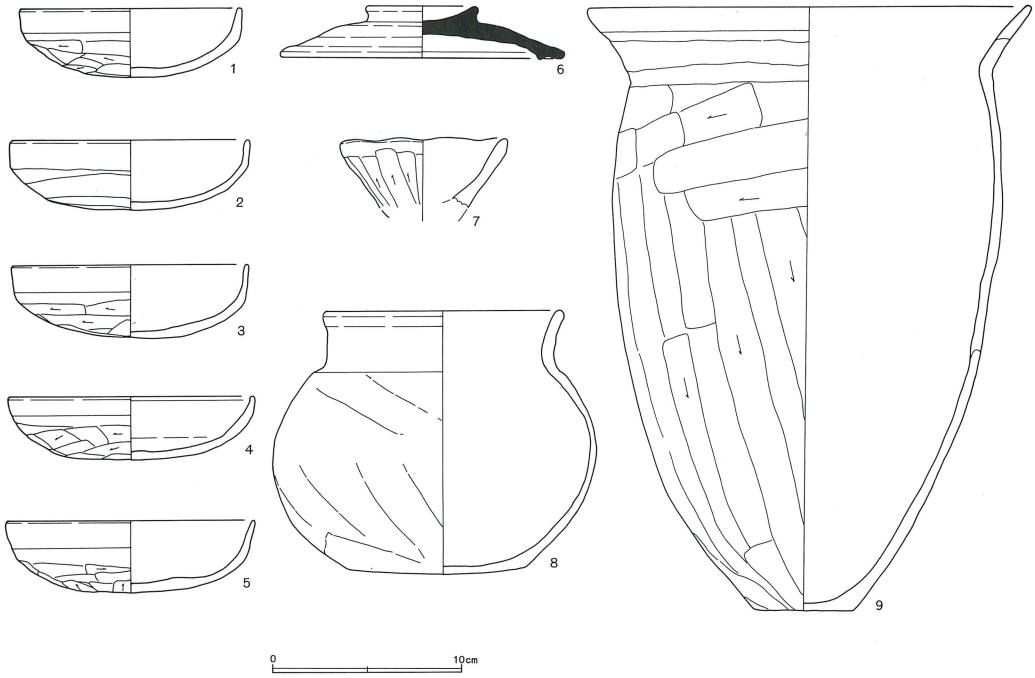
Ｅ３Ｉ２区に位置する。北に第５・６号住居跡、南に第３号住居跡が存在する。住居跡は東西方向に長軸をとる長方形を呈し、南カマドを持つ。長径4.24m、短径2.68m、深さ38cmを測る。カマドは長軸上の南東コーナー付近に設置されており、カマドを通る主軸線は南から約32度程東へ振れている。床面はほぼ平坦面を呈しているが、南に向って若干傾斜している。壁溝はカマドの周辺を除く壁際に認められ、柱穴は２本検出された。深さはＰ１＝16cm、Ｐ２＝11cmを測る。覆土は基本的には５層で構成され、１層が黒色土粒子を若干含む褐色土、２層がローム粒子を含む黒色土、３層が黒色土を多く含む黄褐色土、４層が炭化物、焼土粒子を多く含む黄褐色土、５層がローム粒子を多く含み、炭化物、焼土粒子を若干含む黄褐色土である。これらの層は、貼り床層である13層の上に堆積している。住居跡の所属時期は８世紀前半のおよそ第２四半期内に位置付けられる。



第207図　第２号住居跡



第208図　第２号住遺物分布図



第209図　第２号住出土土器

遺物はカマドの反対側の壁付近と、Ｐ２の周辺に纏まって出土した。１～５は土師器坏で、いずれも完形。いずれも口縁部外面から体部内面にかけてヨコナデ、底部内面はナデ、体・底部外面はヘラケズリ調整を施している。１～３は口縁部が直立し、口唇部を丸くおさめる形態をもつ。１は口径11.8cm、器高3.6cm。焼成は良好で橙色を呈し、底部外面には煤が、口縁部内面の一部にはタール状の物質が付着。２は口径12.7cm、器高3.7cm。器表は風化が激しい。焼成は不良で橙色。３

は口径12.6cm、器高3.9cm。焼成は良好で橙色。４は口径13.1cm、器高3.7cm。口縁部は内湾して口唇部の内面をやや肥厚させる。焼成は良好で明褐色。内面は風化が激しい。５は口径13.2cm、器高3.8cm。口縁部はわずかに外傾しながら開く。焼成はやや不良で明赤褐色である。

６は須恵器蓋で、口径15.1cm、器高2.7cm、つまみ径5.8cm、1/4残存。口縁内面にはかえりが付き、つまみは高台状を呈する。調整は全体にヨコナデを行なう。焼成は良好で灰色。７は土師器小型坏で、口径8.9cm、現存高3.8cm。成形は雑で、口縁部は波打っている。体部はヘラケズリ調整を行なう。８は土師器の小型甕で、口径12.8cm、器高13.8cm、胴部径17.1cm、底径9.4cm、完形。頸部はほぼ直立し口縁部はわずかに外反して丸い。胴部は球形に近く平底を呈する。器表は風化激しく調整が不明瞭。９は土師器甕で口径23.6cm、器高31.7cm、胴部径20.7cm、底径5.4cm、完形。口縁部は外反し、口唇部は丸い。胴部外面はヘラケズリ、口縁部はヨコナデ調整を施す。

第３号住居跡（第210図、第211図）

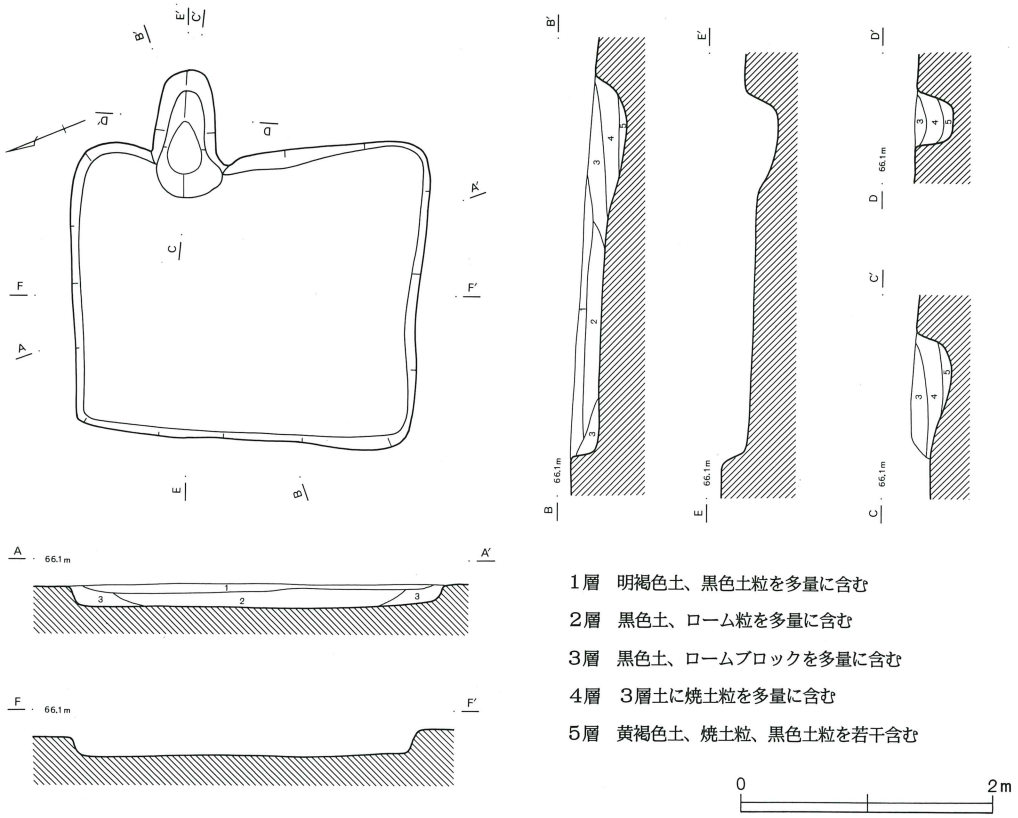
Ｅ４Ｉ２区に位置する。北に第２号住居跡が隣接する。南北方向に長軸をとる長方形を呈し、カマドを通る主軸線は南から約66度東へ振れる。カマドはほぼ東カマドで、長軸東側壁の北寄りに位置する。床面は平坦面を呈するが、南東方向に若干傾斜している。柱穴、壁溝等は検出されなかった。覆土は基本的には３層で構成され、１層が黒色土粒子を多量に含む明褐色土、２層がローム粒子を多量に含む黒色土、３層がロームブロックを多量に含む黒色土である。住居跡の所属時期は、８世紀初頭の第１四半期内に位置付けられるであろう。

遺物はカマド内と床面から若干出土している。

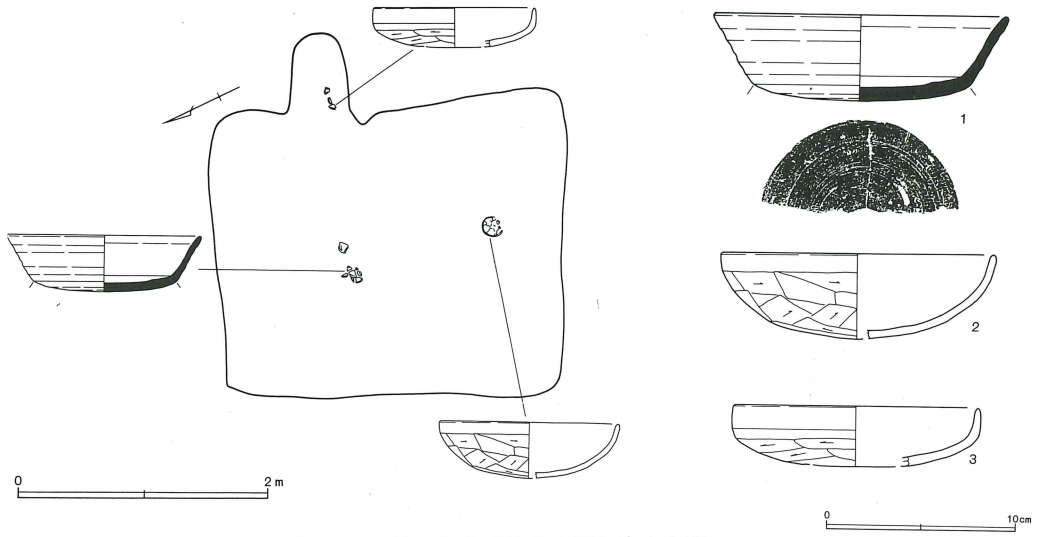
１は須恵器坏。口径15.6cm、器高4.5cm、底径10.4cm。1/2残存。体部はまっすぐ開き、口唇部はわずかに外反させ丸くおさめる。体部内外面、底部内面はヨコナデ、底部外面は回転ヘラケズリ調整を施す。焼成は良好で灰色。胎土には砂粒を含む。２は土師器坏。口径14.6cm、器高4.4cm。全体に丸みを帯びた器形で、椀形を呈する。焼成はやや不良で橙色。３は土師器坏で口径13.1cm、器高3.1cm、1/6残存。口縁部はほぼ直立して口唇部は丸い。口縁部と体部の境で明瞭に屈曲し底部は浅い。焼成やや不良で橙色を呈する。２・３はいずれも体・底部外面はヘラケズリ、口縁部外面から体部内面はヨコナデ調整を行なう。

第５・６号住居跡（第212図～第214図）

Ｅ３Ｉ２区に位置する。北西に縄文時代の第１号住居跡、南東に第２号住居跡が存在する。２軒の住居跡が重複しているものと思われるが、土層の切り合い関係が不明瞭であった。１軒の可能性もある。ほぼ北方向に長軸をとり、長軸上にカマドを設置している。カマドを通る主軸は北から若干東へ振れている。第５号住居跡は長径3.44m、短径2.06m、深さ66cmを測る。第６号住居跡は長径4.52m、短径3.70m、深さ15cmを測る。第５号住居跡のカマドは、北壁のほぼ中央部に設置されている。柱穴は検出されないが、壁溝はカマドの東側を除いて全周する。床面は平坦面を呈し、壁はやや緩く立ち上がる。覆土は基本的には８層で構成され、カマドが崩落した後、８層がレンズ状に堆積している。１層は黒色土粒子を含む褐色土、２層がローム粒子を含む黒色土、３層がローム

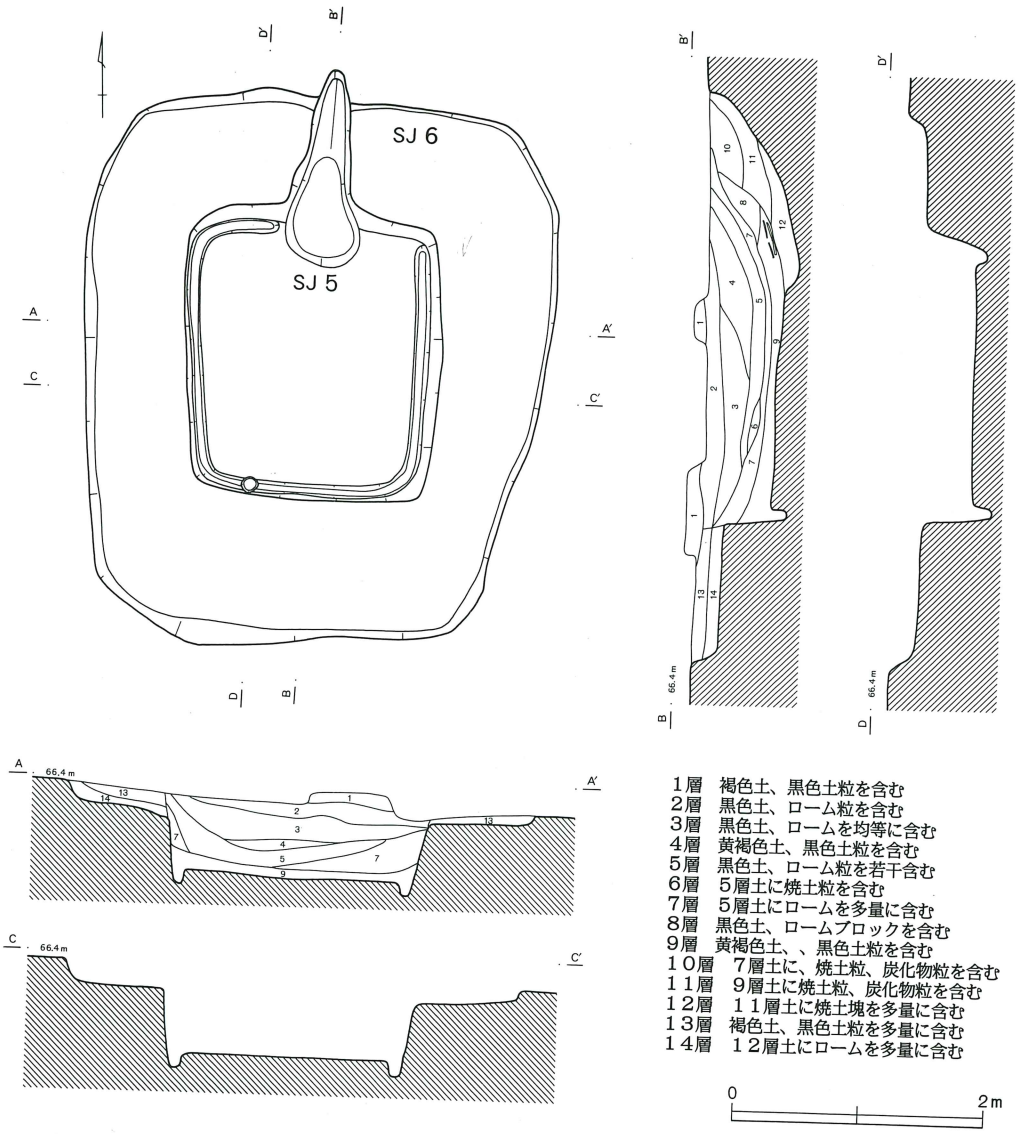


第210図　第３号住居跡



第211図　第３号住遺物分布図と出土土器

を均等に含む黒色土、４層が黒色土粒子を含む黄褐色土、５層がローム粒子を若干含む黒色土、６層が焼土粒子とローム粒子を若干含む黒色土、７層がローム粒子を多く含む黒色土、９層が黒色土

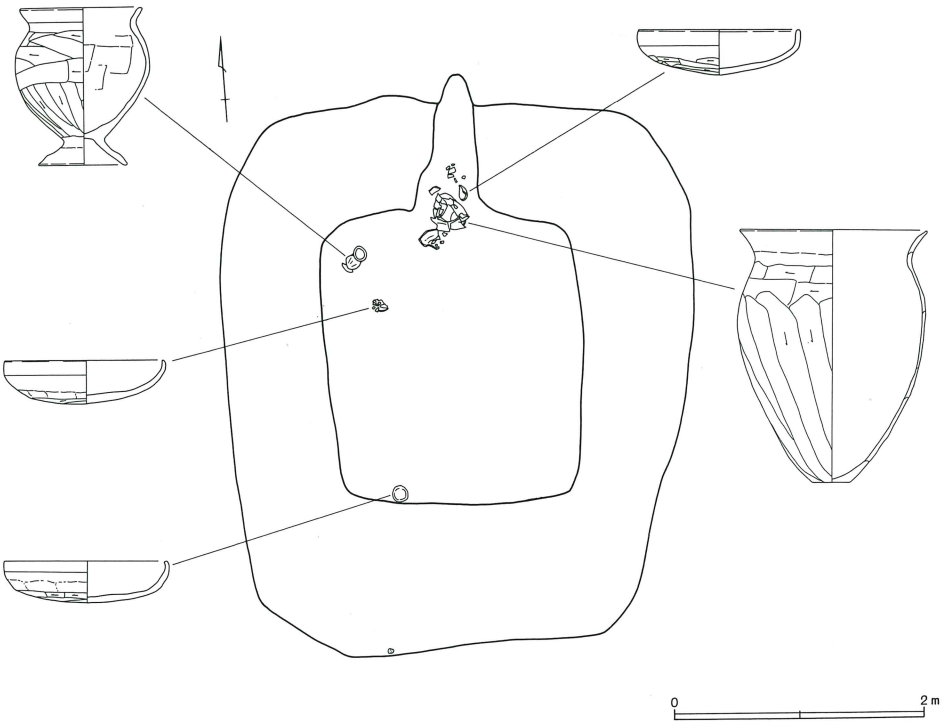


第212図　第5・6号住居跡

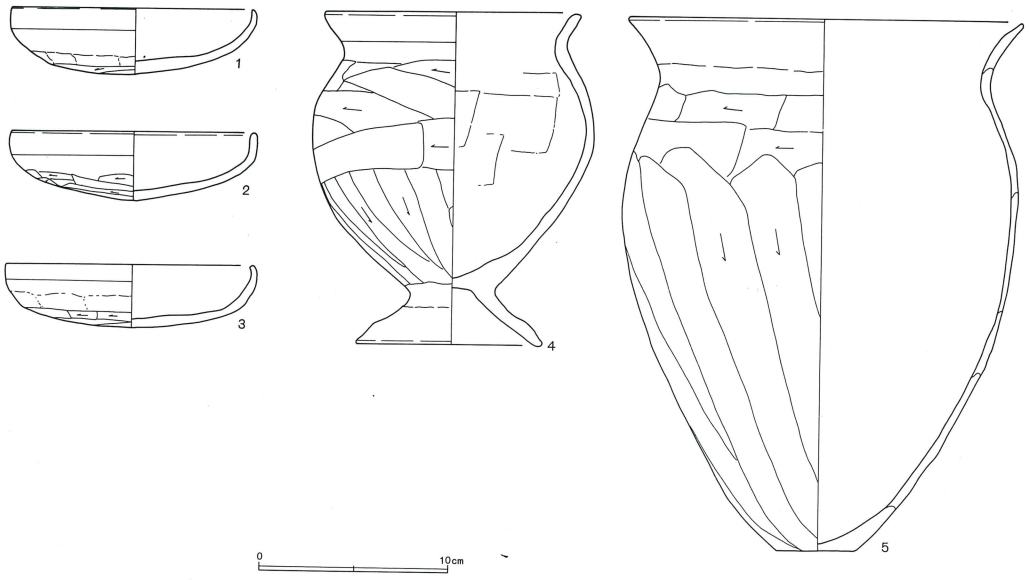
粒子を含む黄褐色土である。第5号住居跡の所属時期は8世紀後半の第3四半期内に位置付けられる。第6号住居跡については遺物の出土がなく、時期判定は不可能である。

遺物は、カマド内及びその周辺から纏まって出土した。1～3は土師器坏である。いずれも口縁部外面から底部内面にかけてヨコナデ、底部内面はナデ、底部外面はヘラケズリ調整を施す。1は口径13.1cm、器高3.5cm、完形。口縁部は内湾し、口唇部は丸くおさめる。焼成は不良でにぶい橙色。2は口径13.1cm、器高3.6cm、1/2残存。口縁部はほぼ直立し口唇部は丸い。焼成はやや不良で橙色を呈する。胎土に砂粒を含む。3は口径13.4cm、器高3.3cm、完形。口縁部は内彎し、口唇部は内側に肥厚させる。焼成は良好でにぶい橙色を呈する。胎土に砂粒を多く含む。

4は土師器の台付甕である。口径13.6cm、胴径14.9cm、器高17.5cm、完形。頸部で「く」の字に



第213図　第５・６号住遺物分布図



第214図　第５・６号住出土土器

屈曲して口縁部はまっすぐ開く。口唇部は丸くおさめる。胴部は中位よりやや上に最大径があり、丸みをもつ。脚台部は大きく開くが、ほぼ中位にゆるやかな段を有する。端部はややつまみだして丸くおさめる。口縁部内外面および脚台部内外面はヨコナデ、胴部外面はヘラケズリ、胴部内面はヘラナデ調整を施す。頸部外面と脚台部上端にはとくに強いヨコナデを施して胴部との境を明瞭にしている。焼成は良好で明赤褐色を呈するが、胴部上半にススが付着している。

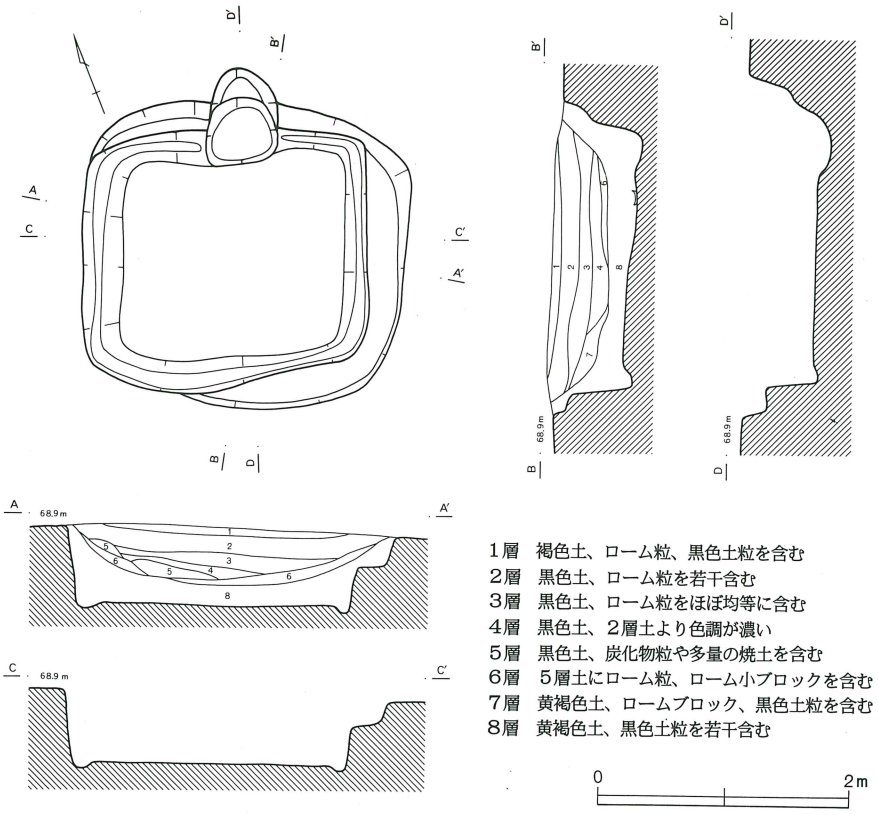
5は土師器甕である。口径20.9cm、胴径21.0cm、底径4.2cm、器高27.9cm、完形。頸部は緩やかに屈曲し、口縁部は外反しながら開く形態である。口唇部は器壁がやや薄くなる。胴部はあまり張り出さず、径は中位よりやや上部で最大となる。口縁部外面から内面にかけてはヨコナデ、胴部外面はヘラケズリ、内面はヘラナデ調整を施す。焼成は良好でにぶい橙色を呈し、胴部外面にはススが付着している。

第7号住居跡（第215図～第217図）

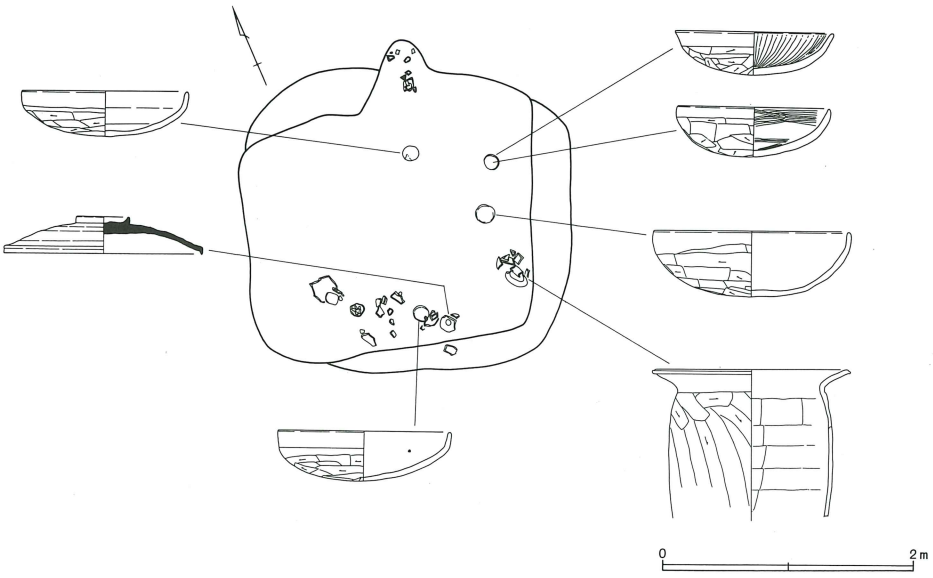
E4J0区に位置する。北側に第2号土壙、南に第3号土壙が存在し、住居跡の東側には回周する道跡が検出され、南側にも枝分かれした道跡が存在する。北カマドを持ち、長軸を東西方向にとるほぼ方形を呈する。カマドを通る主軸線は北から約20度西へ振れている。住居跡の西側から東側にかけて、1段高いテラス状の張り出しを持ち、長径2.70m、短径2.60m、深さ68cmを測る。このテラスの部分は、覆土をみる限り壁の崩落部分なのか、テラスなのか識別されなかった。床は平坦面を呈し、壁は直に立上り、その後緩く立ち上がる。壁溝は全周し、柱穴は検出されなかった。カマドは北壁のほぼ中央部に設置されており、煙道は短く比較的急に立ち上がる。覆土は8層で構成され、1層が黒色土粒子を含む褐色土、2層がローム粒子を若干含む黒色土、3層がローム粒子をほぼ均等に含む黒色土、4層がローム粒子を小量含み色調の濃い黒色土、5層が炭化物、焼土粒子を多量に含む黒色土、6層が炭化物や焼土粒子、ロームブロックを多く含む黒色土、7層がロームブロック、黒色土粒子を含む黄褐色土、8層が黒色土粒子を含みややしまりのない黄褐色土である。8層はいわゆる第一次堆積層で、厚く全体を覆う程堆積している。住居跡の所属時期は8世紀初頭の第1四半期内に位置付けられる。

遺物は南壁の周辺から、集中的に出土している。1～5は土師器坏で、いずれも完形である。1は口径12.8cm、器高3.5cm。口縁部はわずかに外反して開き、口唇部を丸くおさめる。底部は丸い。口縁部外面から体部内面にかけてヨコナデ、体・底部外面はヘラケズリ調整を行なう。また内面には放射状に暗文を施し、底部に半円形を描く。焼成は良好で橙色。2は口径12.5cm、器高4.0cm。全体に丸みを帯びた器形で、口唇部はやや尖り気味である。口縁部外面はヨコナデ、体・底部外面はヘラケズリ調整、内面には粗雑なヘラミガキを施す。焼成は良好でにぶい黄橙色を呈する。内面にはタールが付着する。3・4・5はいずれも口縁部外面から体部内面にかけてヨコナデ調整、体・底部外面はヘラケズリ調整を行なう。3は口径13.5cm、器高3.6cm、焼成良好で橙色。4は口径14.0cm、器高4.0cm、焼成良好で明褐色を呈する。5は口径16.0cm、器高5.3cmで椀型をなす。焼成は良好で橙色。

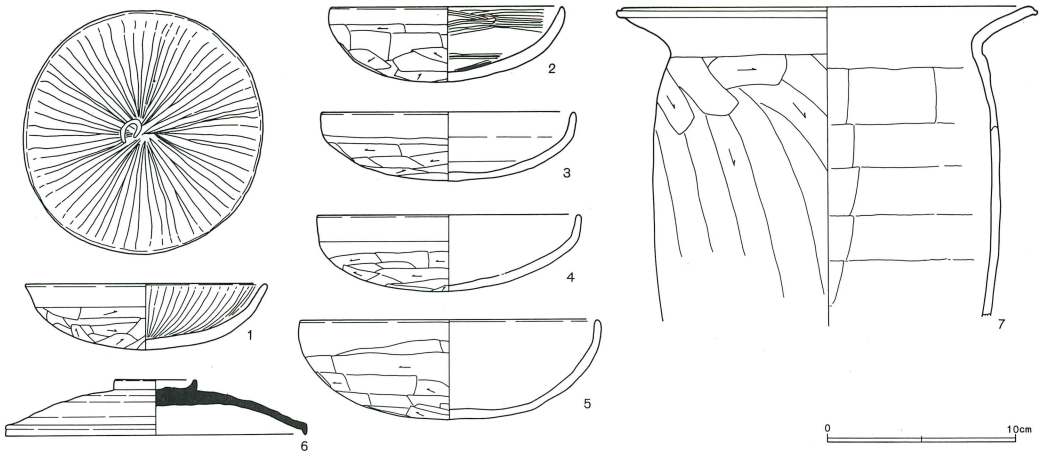
6は須恵器蓋で口径16.0cm、つまみ径4.2cm、器高2.9cm。口縁端は下方へ屈折し、高台状のつま



第215図　第７号住居跡



第216図　第７号住遺物分布図



第217図　第７号住出土土器

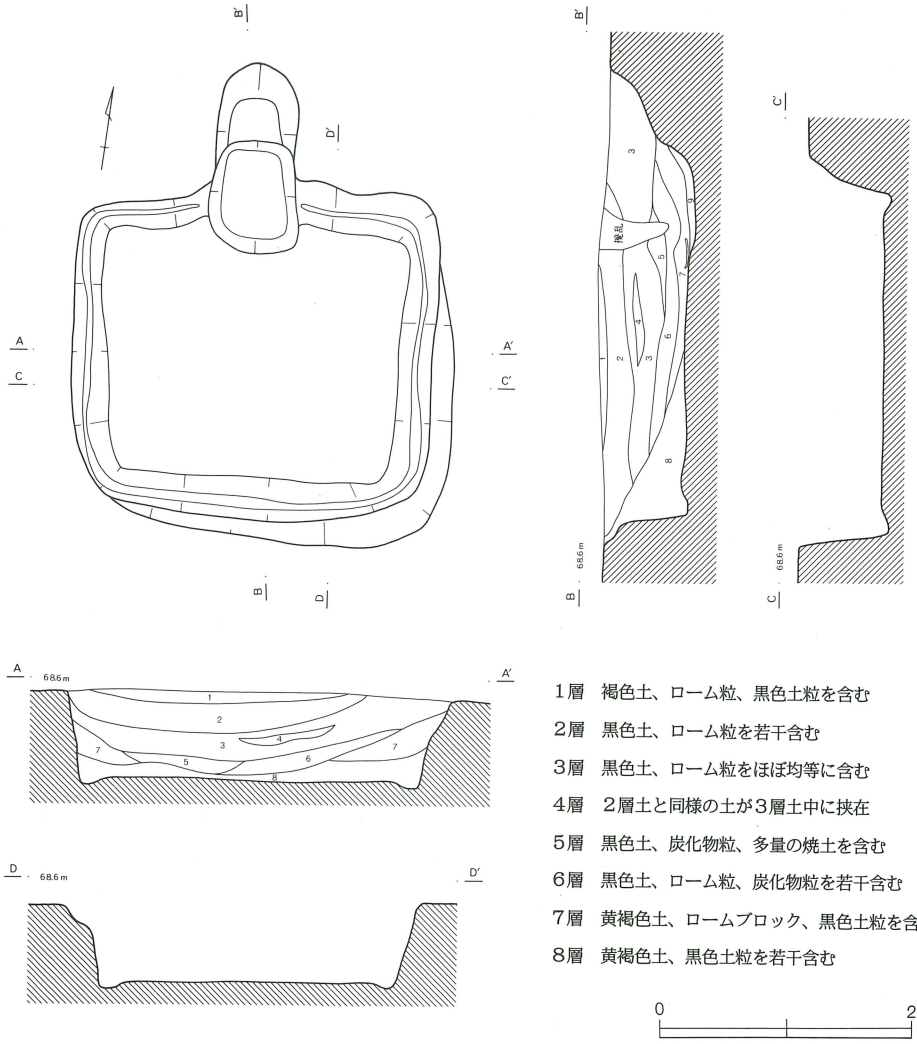
みをもつ。外面は頂部から体部中位までヘラケズリ調整を行なう。焼成は良好で灰黄褐色。砂粒含む。７は土師器甕で口径22.3cm、胴部径18.4cm、現存高16.3cm。口縁部は外反して大きく開き、口唇部はつまみ出す。頸部と胴部の境はナデによって段を有する。胴部はあまり張らない。口縁部内外面にヨコナデ、胴部外面にヘラケズリ、内面にヘラナデ調整を行なう。焼成は良好で橙色。

第８号住居跡（第218図～第220図）

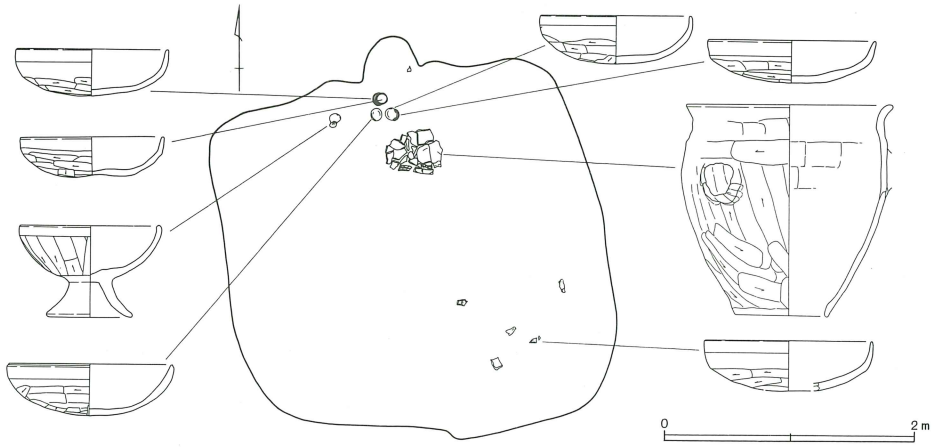
Ｆ０Ｉ４区に位置する。北西に縄文時代の第１号集石土壙が隣接する。道跡は第８号住居跡の周辺にまでは続いていない。北カマドを持ち、東西に長軸方向をとるほぼ方形を呈する。カマドを通る主軸線は、北から若干西へ振れている。長径3.78m、短径3.06m、深さ72cmを測る。壁溝は全周し、柱穴は検出されない。床面は平坦面を呈し、壁は直に立ち上がった後に緩く立ち上がる。開口部付近では、壁が崩落している部分もある。カマドは北壁の中央部に設置されており、燃焼部が長方形を呈し、緩く煙道が続く。覆土は基本的に６層で構成され、１層が黒色土粒子を含む褐色土、２層がローム粒子を若干含む黒色土、３層がローム粒子を均等に含む黒色土、ローム粒子、黒色土粒子を若干含む黒色土、７層がロームブロック、黒色土粒子を含む黄褐色土、８層が黒色土粒子を若干含み、しまりに欠ける黄褐色土である。他に、３層内に４層、５層がブロック状に含まれる。住居跡の所属時期は８世紀初頭の第１四半期内に位置付けられる。

遺物は、カマドの周辺から集中して出土した。１～６は土師器坏で、いずれも口縁部外面から体部内面にかけてヨコナデ、体・底部外面はヘラケズリ調整を行なう。１は口径11.6cm、器高3.3cm、完形。焼成良好で橙色。２は口径12.3cm、器高3.9cm、完形。焼成良好で橙色。３は口径12.3cm、器高3.3cm、完形。焼成良好で橙色。４は口径13.5cm、器高4.1cm、完形。焼成良好で橙色。５は口径13.6cm、器高4.0cm、1/2残存。焼成良好で明赤褐色。６は口径13.6cm、器高3.4cm、3/4残存。焼成良好でにぶい赤褐色。

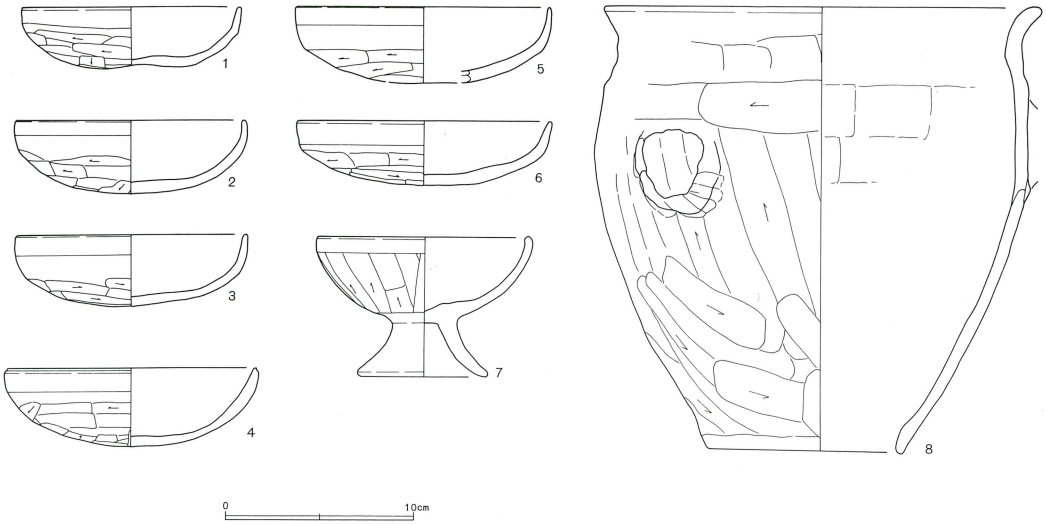
７は土師器高坏で、口径11.5cm、底径6.9cm、器高7.4cm、完形。坏部は全体に丸みを帯び、口唇部をやや内側に肥厚させる。脚台部は外反しながら開く。口縁部外面から体部内面および脚部はヨ



第218図　第８号住居跡



第219図　第８号住遺物分布図



第220図　第８号住出土土器

コナデ、体部外面はヘラケズリ調整を施す。焼成は良好で明赤褐色を呈する。

８は土師器甑である。口径23.2cm、胴部径23.1cm、底径10.4cm、器高23.5cm、完形。頸部はほぼ直立し口縁部は外反して丸くおさめる。頸部と胴部の境には段を有し、胴部はあまり張り出さず、最大径は中位よりも上にある。その位置に把手の痕跡が２箇所に見られるが、左右対称ではなくずれている。底部の口唇部はやや外反して丸くおさめる。頸部外面から内面と底部口唇部はヨコナデ、胴部外面はヘラケズリ、内面はヘラナデによって調整する。焼成は良好でにぶい黄橙色。

第１号土壙（第221図）

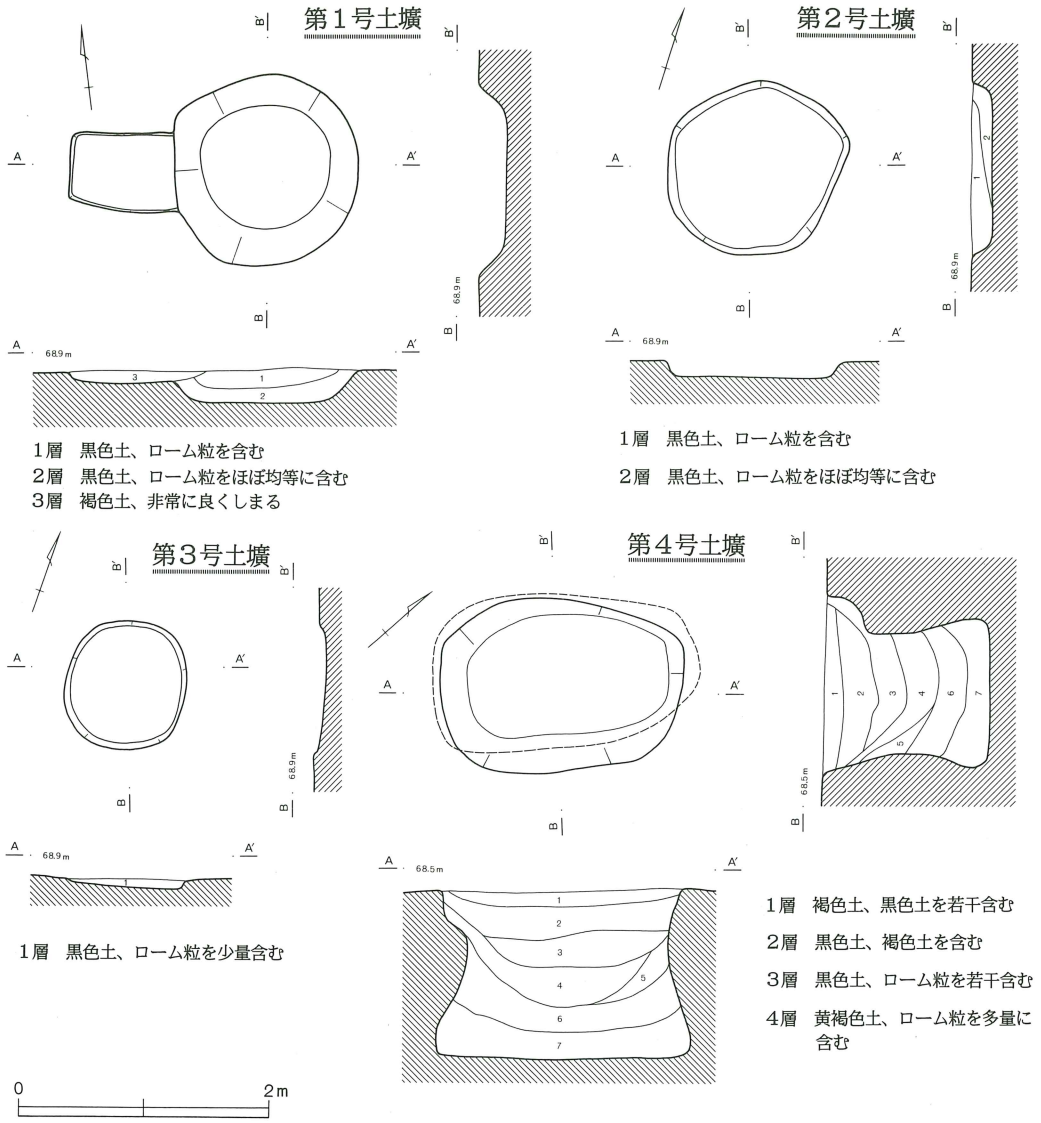
Ｅ４Ｊ０区に位置する。道跡を挟んで南に第２号土壙が存在する。長方形の土壙と円形の土壙が重複しており、長方形の方が新しい。重複部分の長径2.32m、短径1.52m、深さ25cmを測る。覆土は１層がローム粒子を含む黒色土、２層がロームを均等に含む黒色土、３層がしまりの強い褐色土である。遺物は出土していないが、道跡によって第７住居跡等と連結されている。

第２号土壙（第211図）

Ｅ４Ｊ０区に位置する。道跡を挟んで北に第１号土壙、南に第７号土壙が存在する。ほぼ円形を呈し、長径1.40m、短径1.38m、深さ18cmを測る。覆土は第１号土壙と同様である。遺物の出土はなく、道跡で第１号土壙、第７号住居跡と連結される。

第３号土壙（第211図）

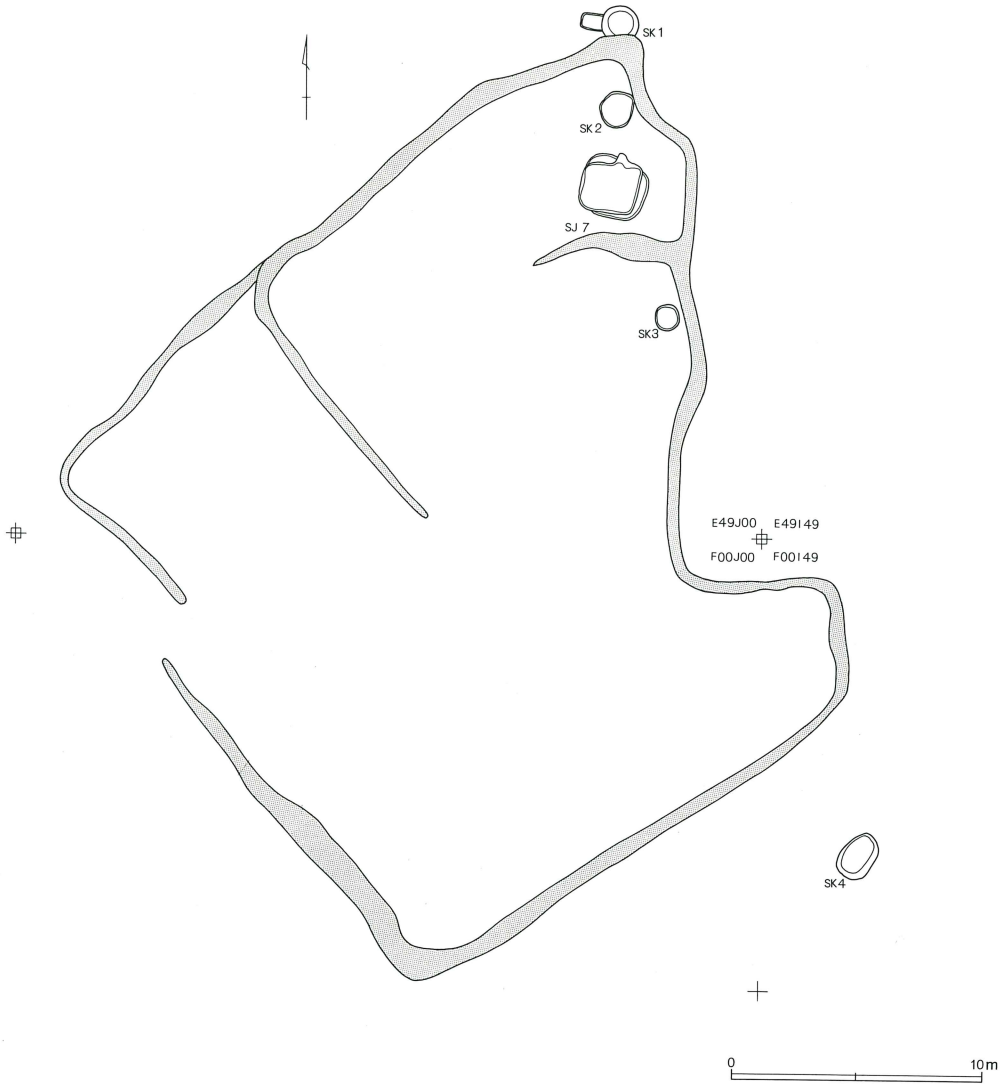
Ｅ４Ｊ０区に位置する。道跡を挟んで北に第７号土壙が存在する。ほぼ円形を呈し、長径1.02m、短径0.98m、深さ10cmを測る。覆土は１層で、ローム粒子を含む黒色土である。遺物の出土はないが、道跡によって第７号住居跡、第１号土壙と連結されている。



第221図　歴史時代の土壙

第４号土壙（第211図）

Ｆ０Ｉ４区に位置する。周辺に遺構は存在しない。若干ハングし袋状を呈する土壙で、開口部が楕円形を呈する。長径1.96m、短径1.38m、深さ1.42m を測る。縄文時代の落し穴状土壙の可能性が高い。覆土は７層で構成され、レンズ状の自然堆積を示している。やや離れるが、南地区との隣接部に、同じ形態の縄文時代前期の落し穴状の土壙が存在している。



第222図　歴史時代の道跡

道跡（第222図）

Ｅ４Ｊ０区～Ｆ０Ｊ０区にかけて存在する。道幅等明瞭ではないが、非常に強く踏み締められた部分を追って行くと、箱状に周結する道が判然とする。周辺の地山は砂質層で、脆く風化に弱い土壌であるが、道部分だけが硬く風化されずに残存している。道跡は箱庭状に巡り、２廻り程を確認したが、それ以上の可能性もある。第７号住居跡の南側では、枝分かれして住居跡へと繋がり、第１号、第２号、第３号土壙を連結している。

4．包含層出土の遺物

四反歩遺跡東地区の包含層からは、縄文時代、弥生時代、奈良時代、中・近世の遺物が出土している。土器は大半が縄文時代のもので、その中でも早期条痕文系土器群が主体を占める。次に撚糸文系土器群が続き、沈線文系土器群、前期の土器群、後期の土器群が若干出土している。土器は総数1842点出土しており、撚糸文系土器群161点、押型文系土器群２点、沈線文系土器群19点、条痕文系土器群559点、前期の土器群53点、中・後期の土器群17点、分類不可能な細片761点、弥生時代遺構の土器群が270点であった。

石器は南地区や北地区と同様に剝片、礫類が大半を占めているが、製品は早期の撚糸文期、条痕文期所産の石斧、掻器、礫器等を中心としている。石器は総数1208点で、製品が137点、剝片659点、礫が410点であった。

(1)　出土土器

第Ⅰ群土器（第223図～第225図１～12）

縄文時代早期の撚糸文系土器群を一括する。

第１類土器（第223図１、２）

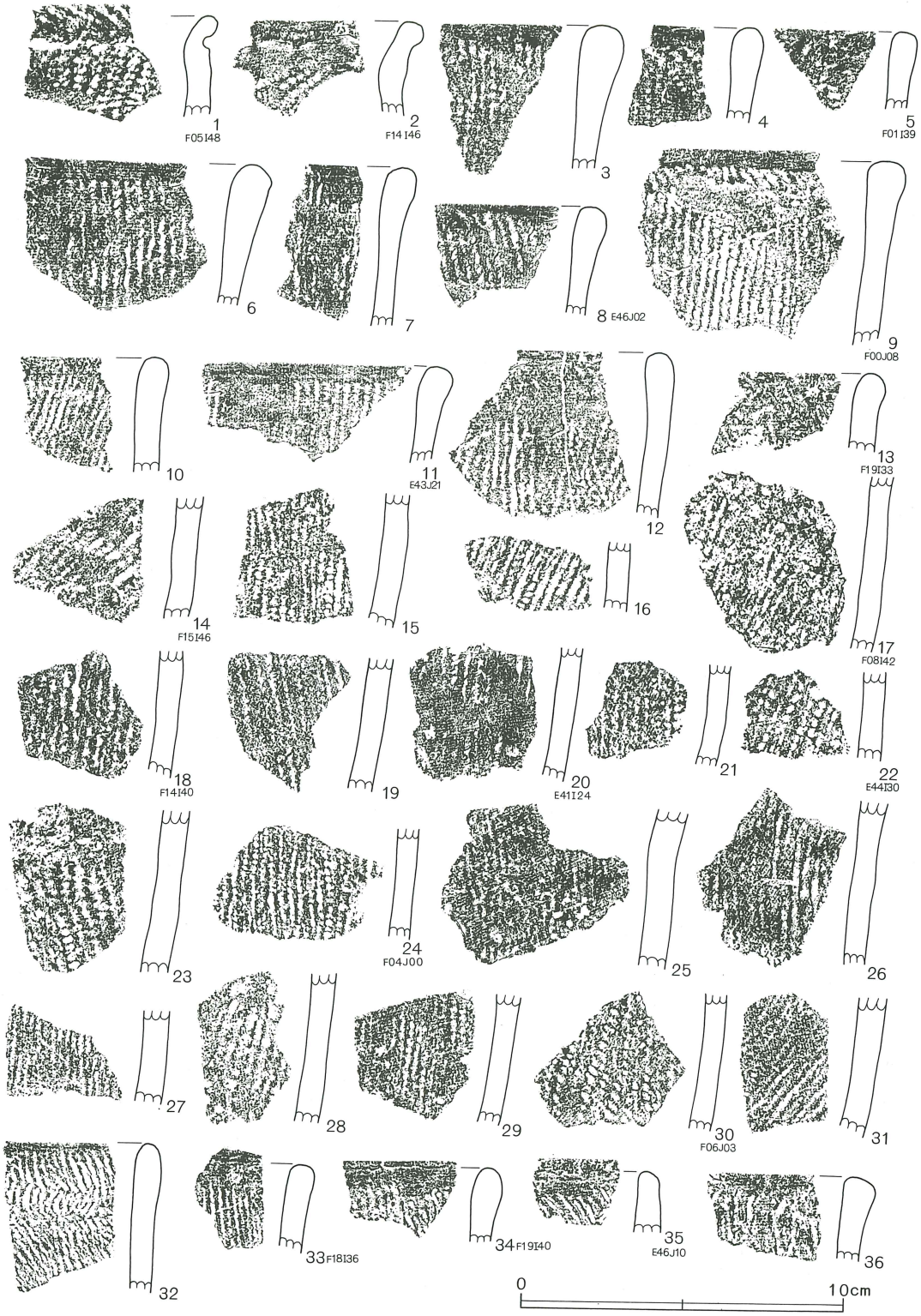
井草式土器を一括する。２点出土している。１は丸く先細りする口唇部が外折し、口縁部が若干内彎気味に立つ器形を呈し、口唇下に複節ＲＬＲの原体を側面圧痕する。この圧痕を境にして口唇部が外折するが、口縁裏は稜が付くほど折れ曲がり、指頭整形痕も残る。胴部は側面圧痕と同じ原体を使用して複節斜縄文ＲＬＲを施文し、口唇部にも縄文を施文する。２は口唇部施文こそ行わないが、口唇部が１と同様に外折して斜縄文ＲＬを施文する。口唇下は側面圧痕ではなく、指頭を強く押し当てて成形する。両者とも井草Ⅱ式、もしくはその段階に位置付けられるものであろう。

第２類土器（第223図３～36、第224図１～40）

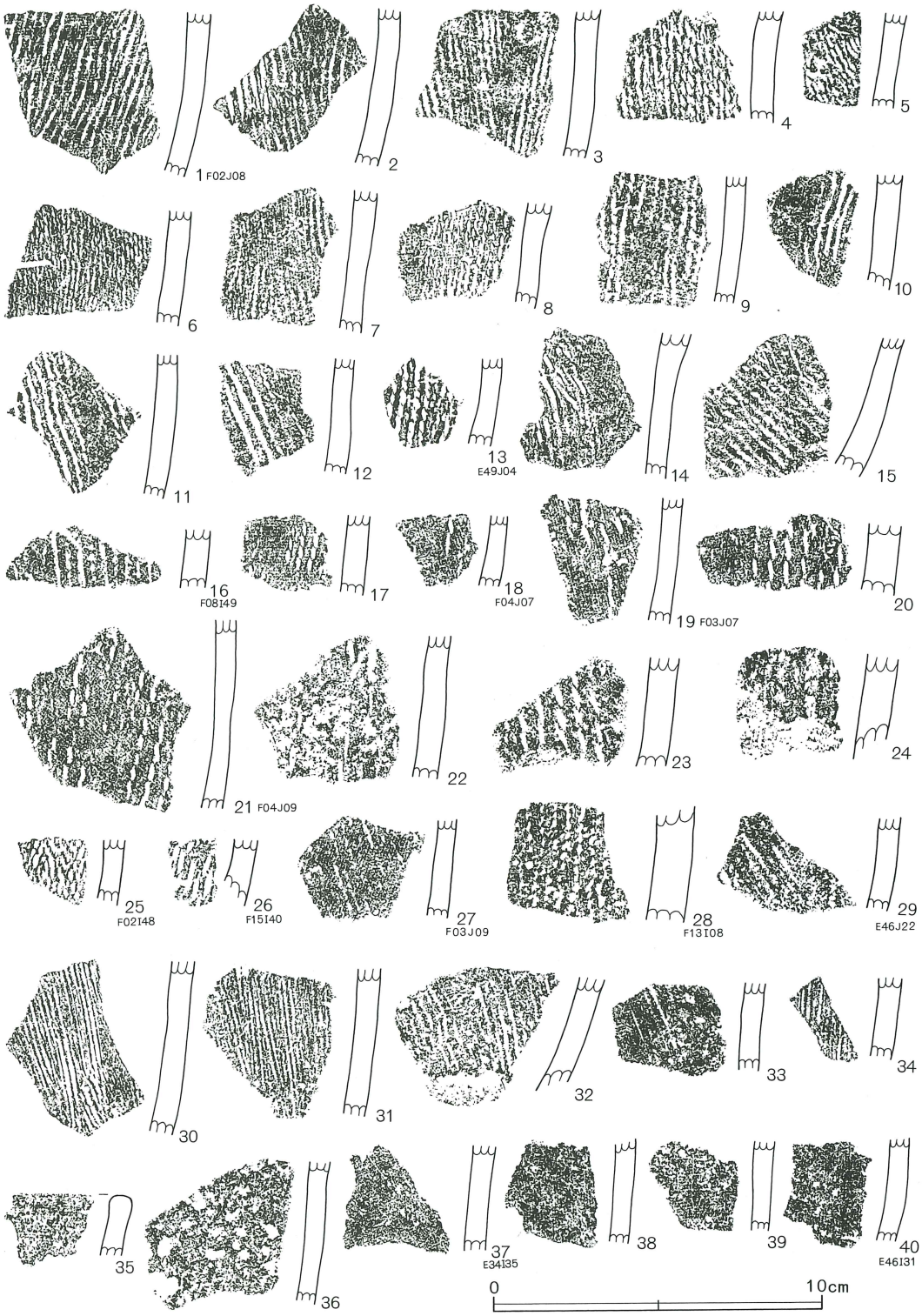
夏島式及び稲荷台式の土器群を一括する。３～31は縄文を施文する土器群である。３～11は口唇部が肥厚してやや開く器形を呈し、口唇部直下から縄文を施文するものである。３は口唇部整形後、縄文ＲＬを施文し、４は口唇部整形後、胴部に縄文ＲＬを施文し、最後に外端部に１段横位施文して、異方向の縄文を施文する。５～11は縄文を施文した後に、口唇部に整形を施すものである。縄文原体は５～８はＲＬ、９～11はＬＲである。12は肥厚する口唇部がやや内彎気味に開く器形を呈し、口唇部から間隔を開けて縄文ＬＲを施文する。13は肥厚する口唇部がやや開き、口縁部に若干無文部を設けて、縄文ＲＬを施文する。

14～31は縄文を施文する胴部破片である。縄文は節の圧痕が明瞭なもの（15、16、22～24、30）と、節よりも繊維痕が目立つもの（17～20、25、26）がある。原体は14～22がＲＬ、23～25、27～31がＬＲで、26は繊維痕が明瞭であるため単節ＲＬなのか無節Ｒなのか判断がつかない。

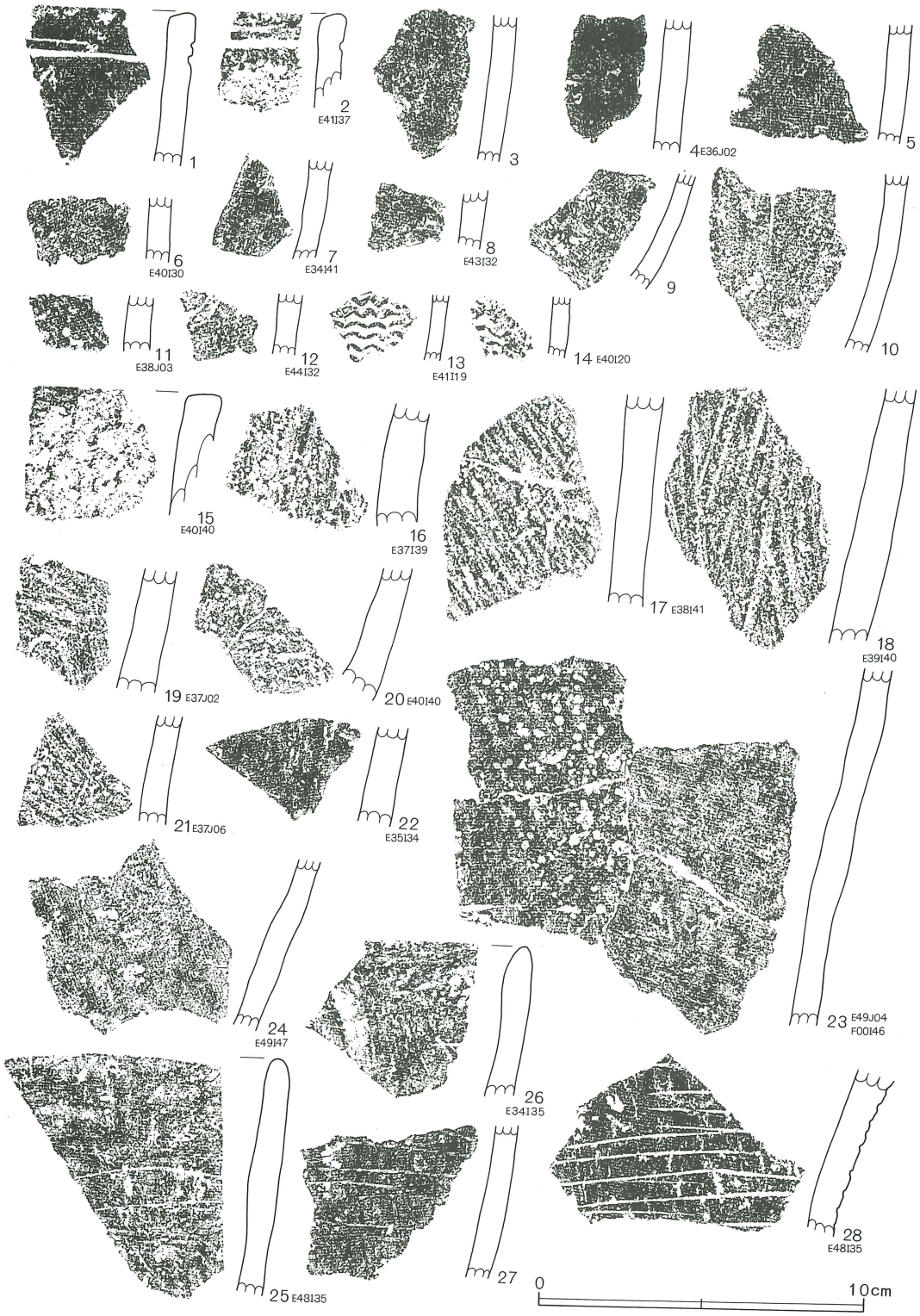
32～36、第224図１～29は撚糸文を施文する土器群である。32は丸頭状にあまり肥厚しない口唇部がやや開く器形を呈し、口端部から撚糸Ｒを施文し、頸部で一度圧痕状に止め、また施文を開始するものである。口端部は撚糸施文後軽く撫でられており、撚糸施文が口唇部整形前なのか後なの



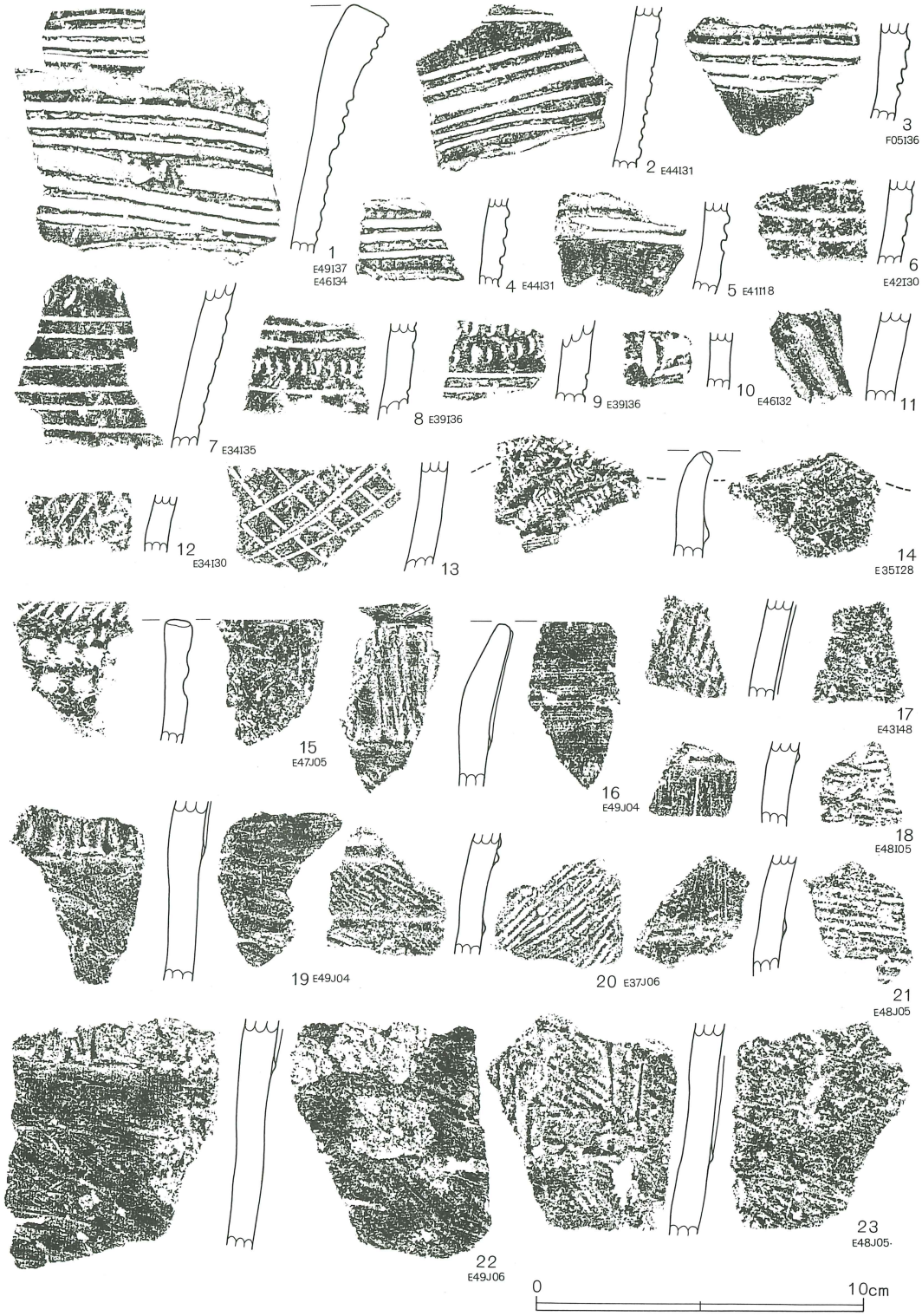
第223図　グリッド出土土器 (1)



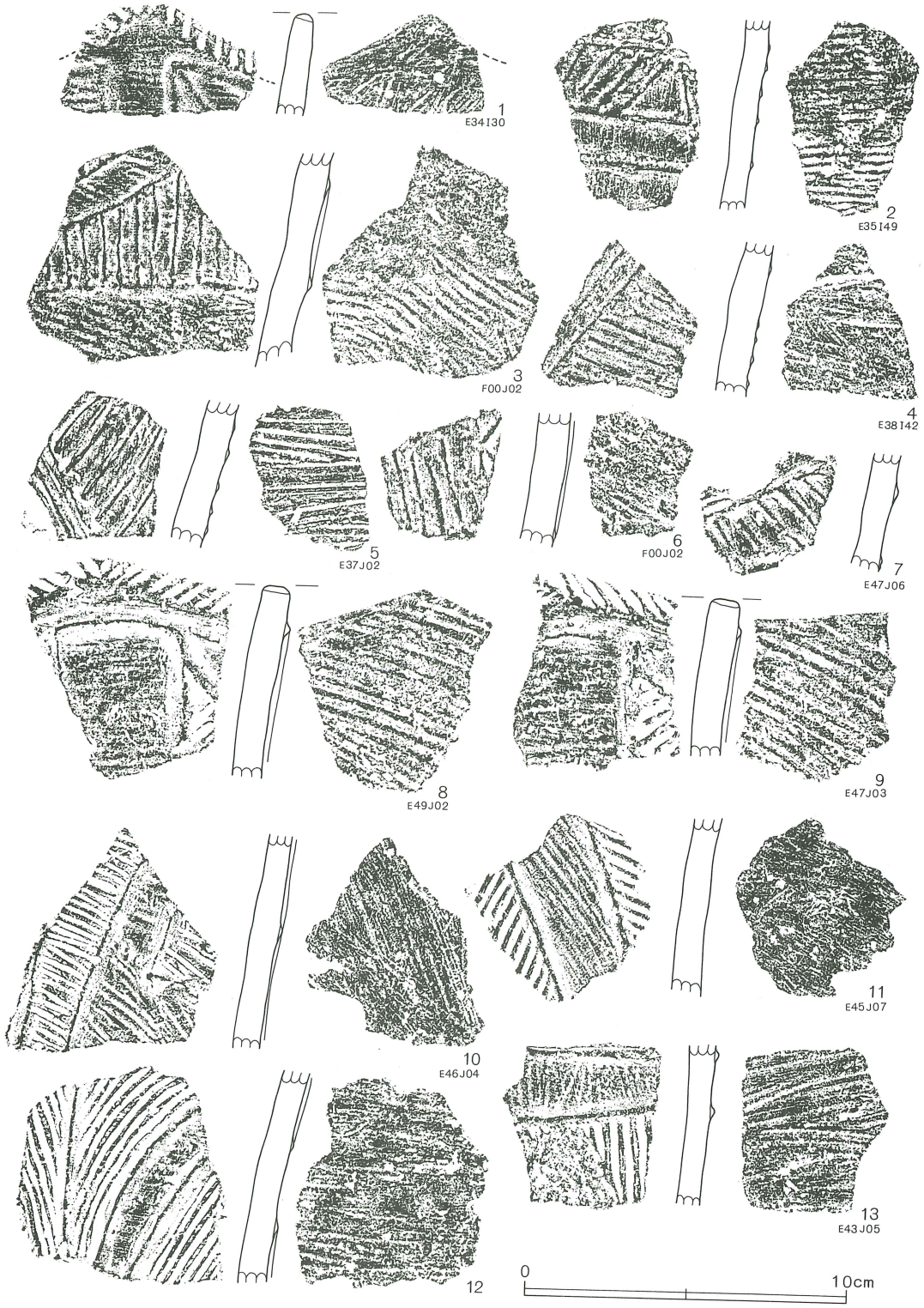
第224図　グリッド出土土器　(2)



第225図　グリッド出土土器　(3)

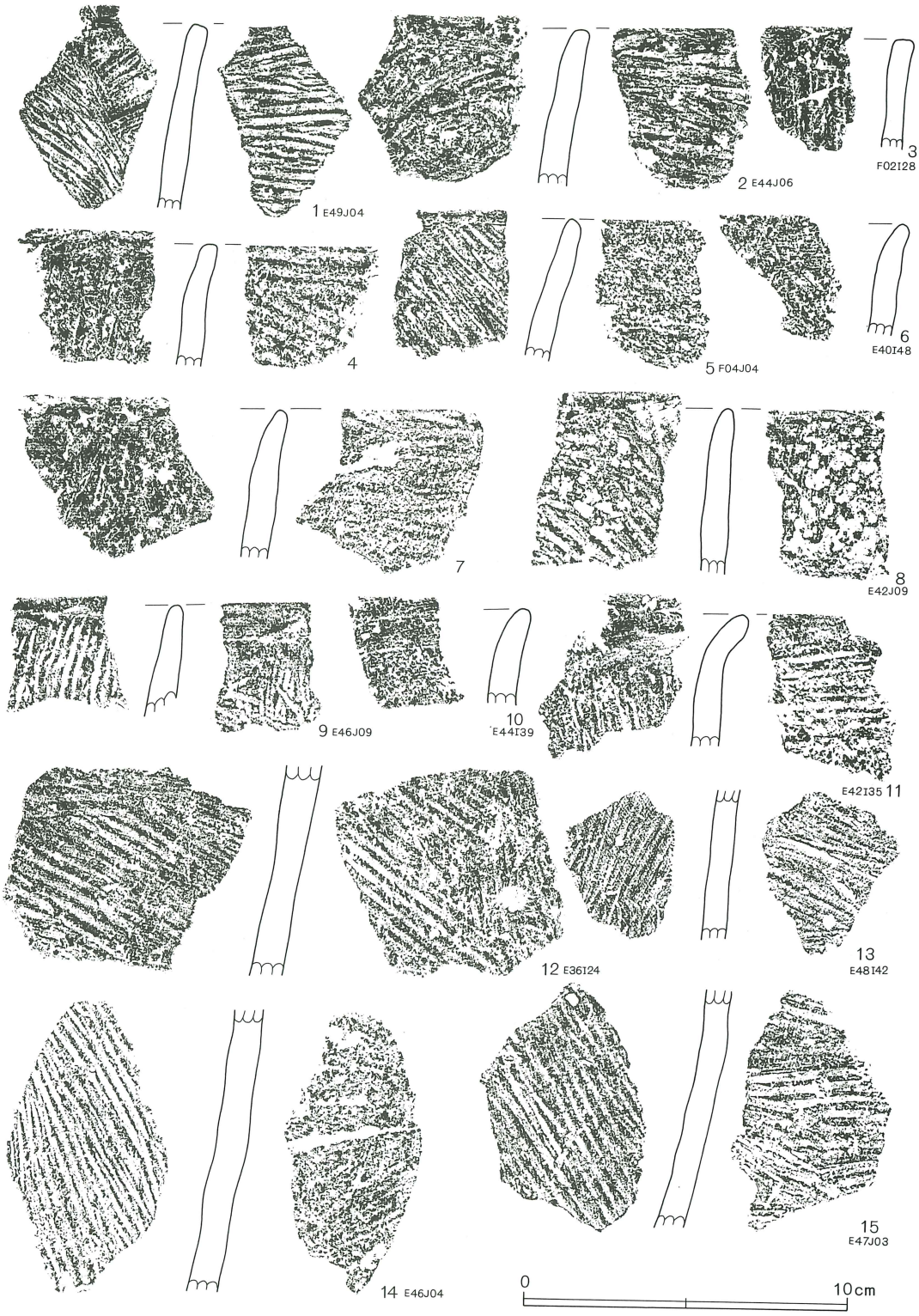


第226図　グリッド出土土器　(4)

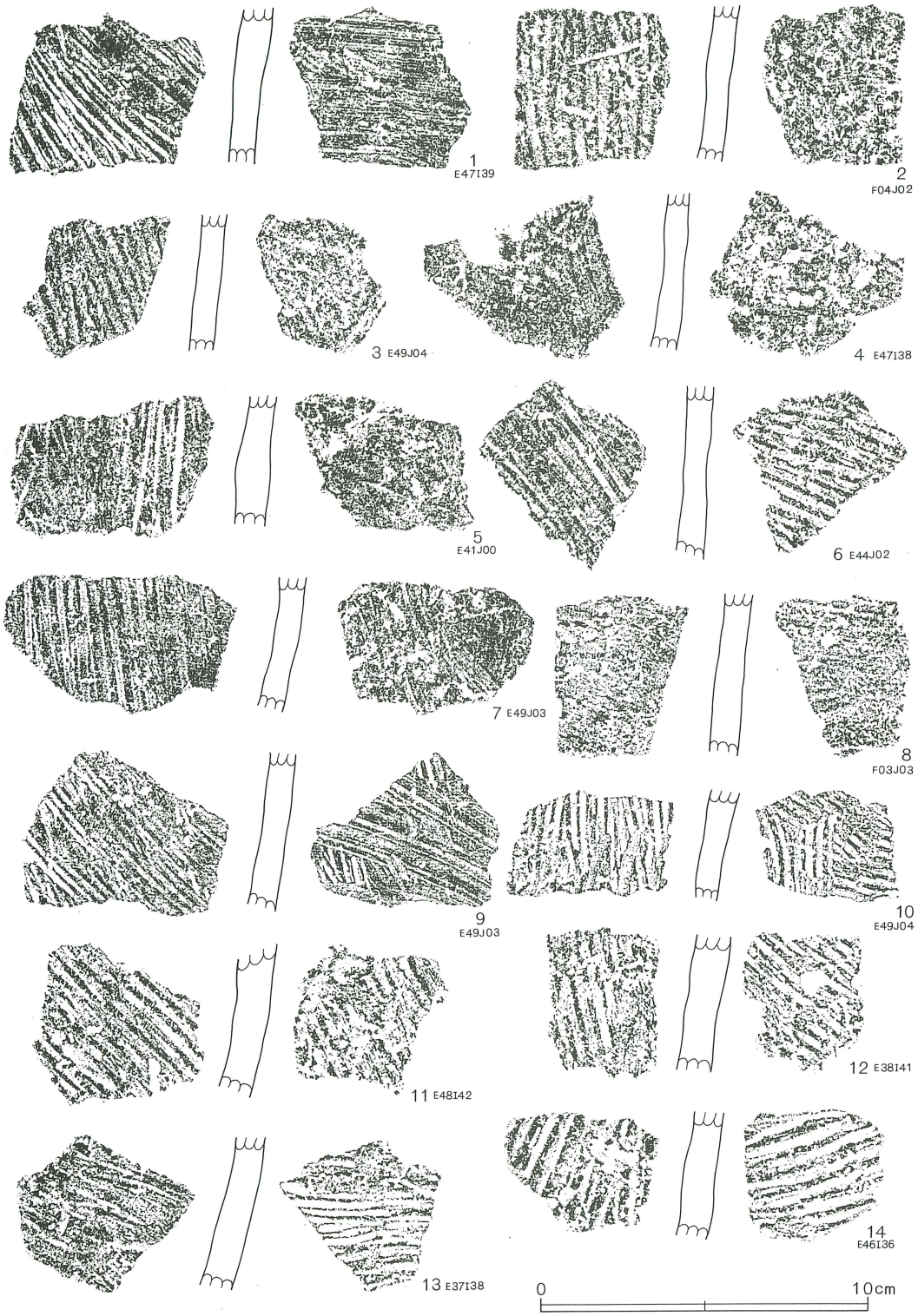


第227図　グリッド出土土器　(5)

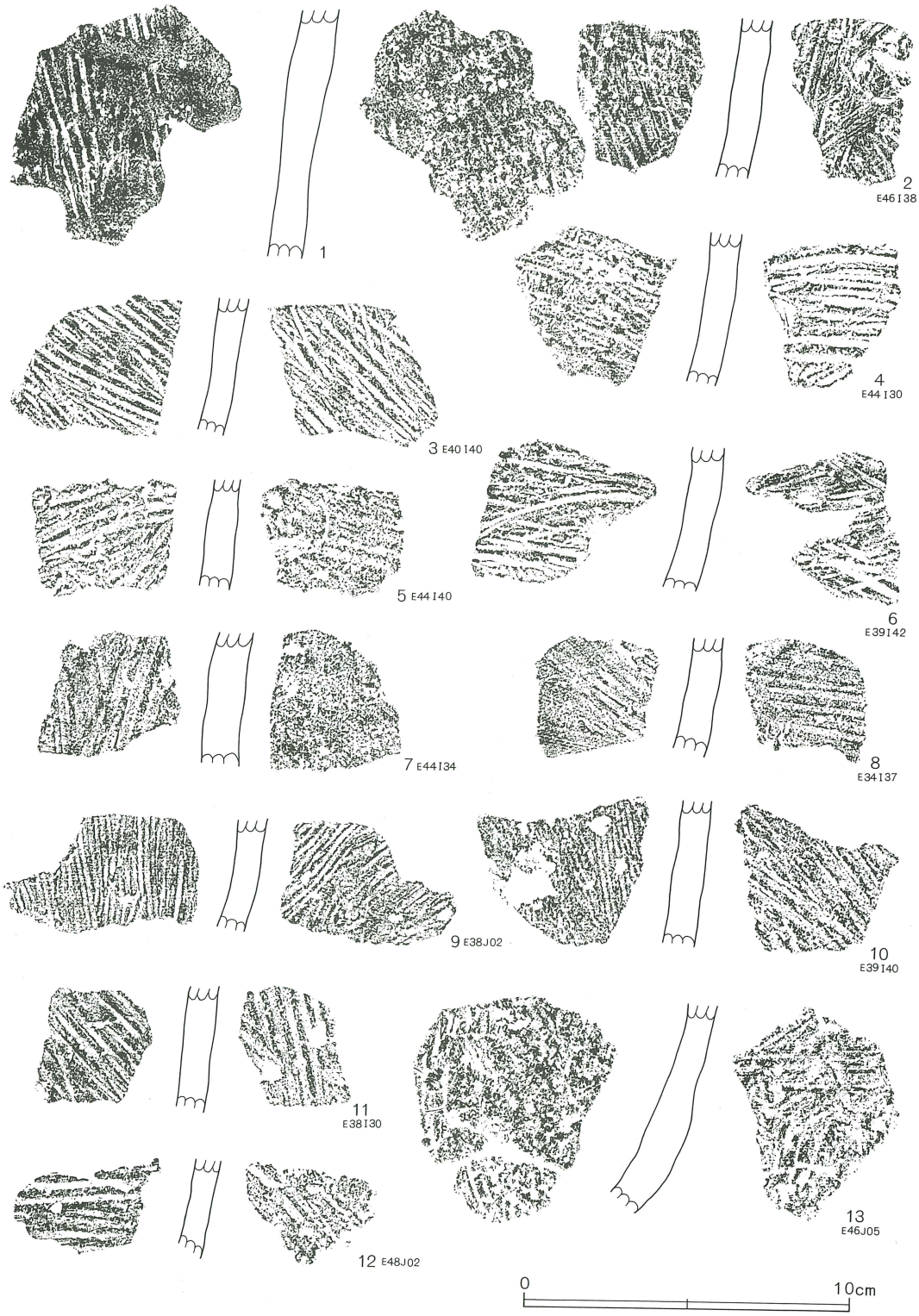
第228図　グリッド出土土器　(6)



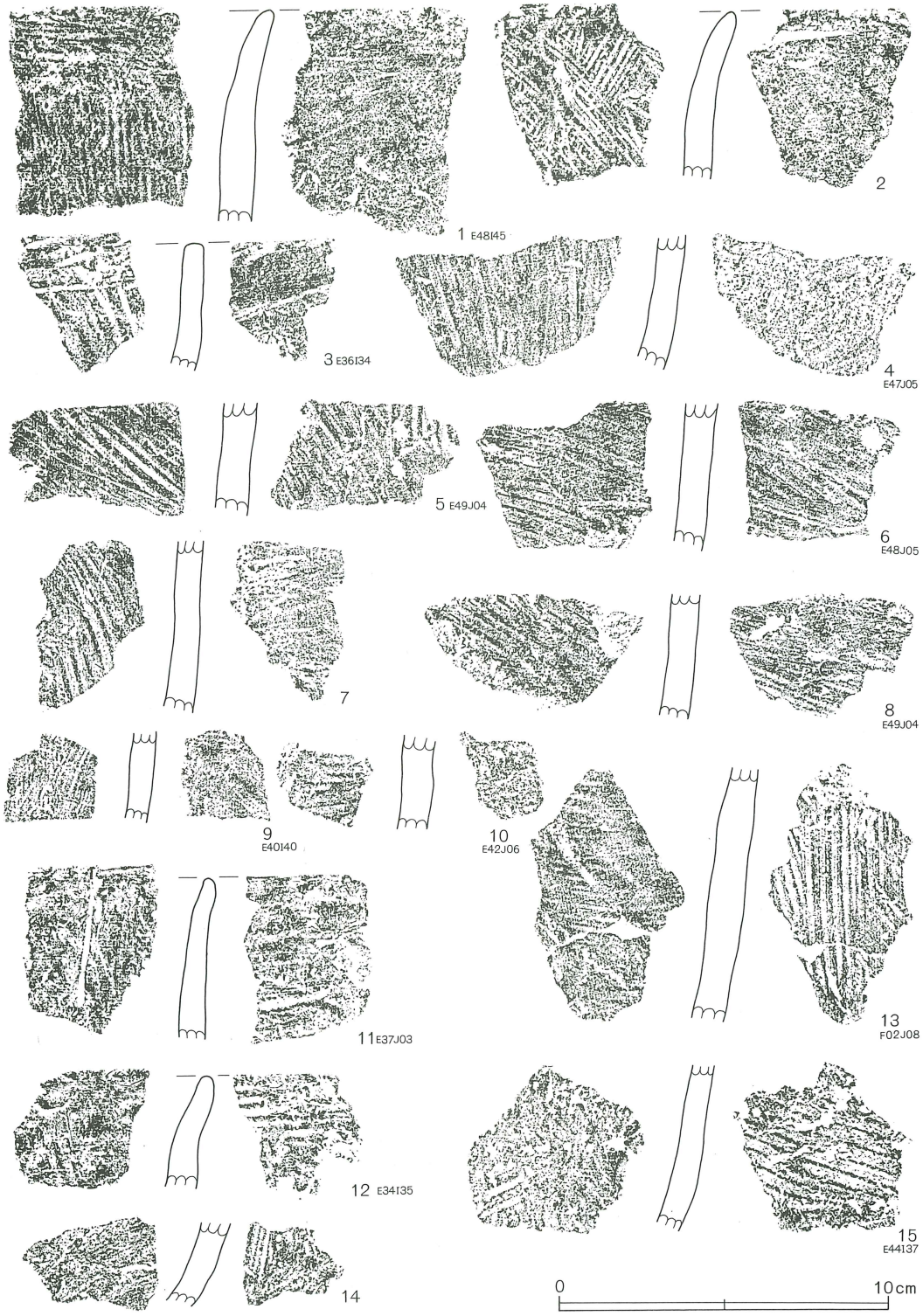
第229図　グリッド出土土器 (7)



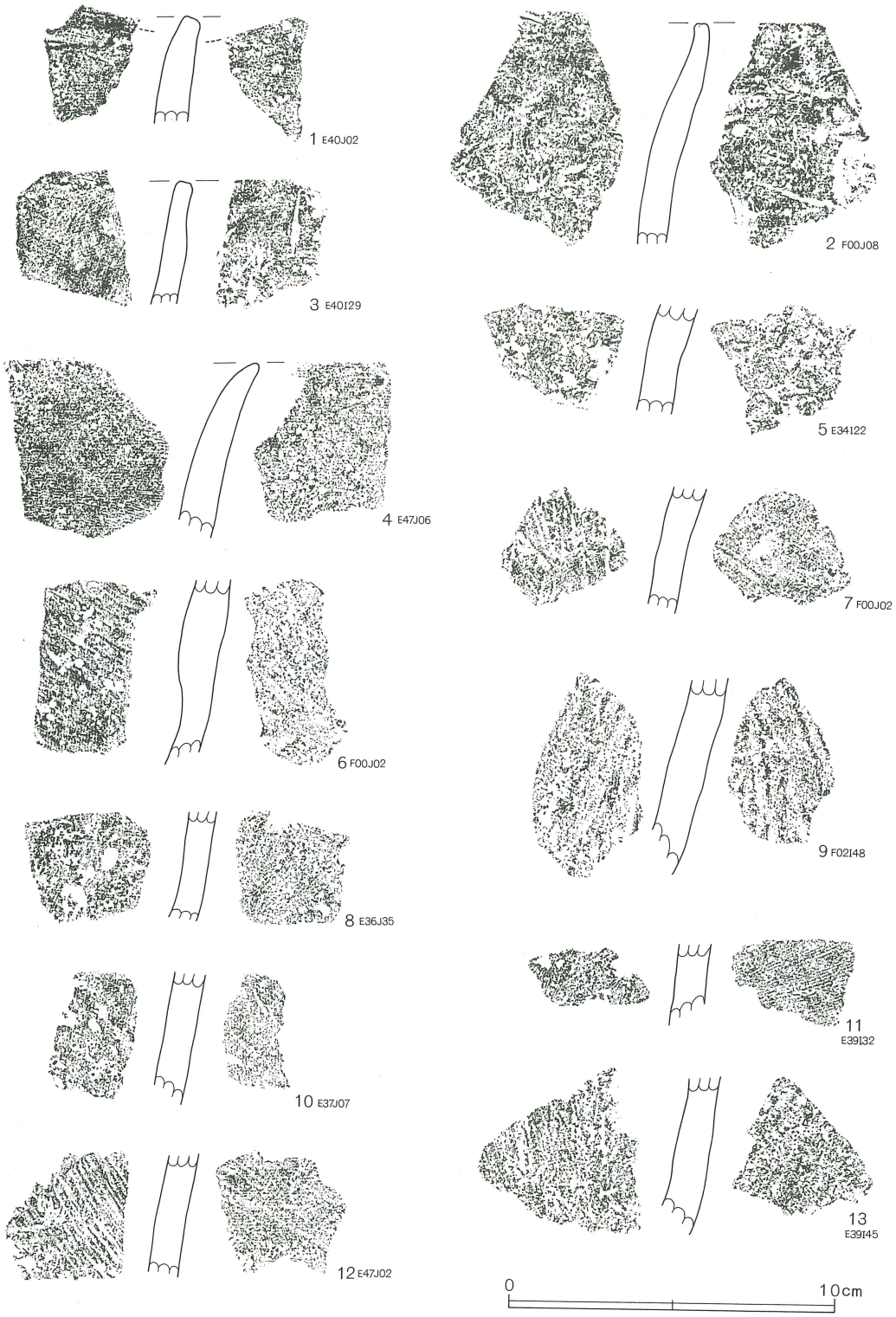
第230図　グリッド出土土器 (8)



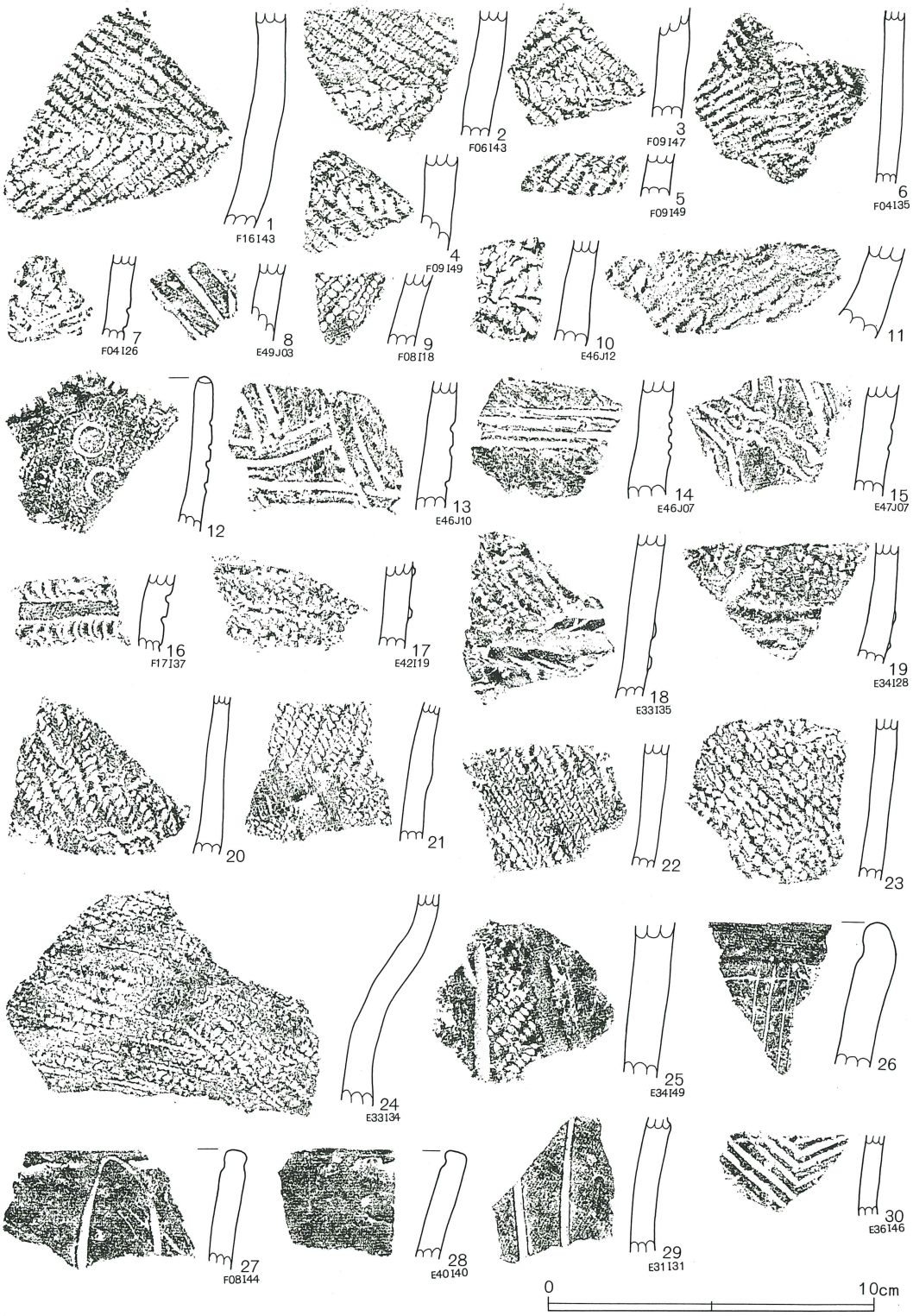
第231図　グリッド出土土器　(9)



第232図　グリッド出土土器 ⑽



第233図　グリッド出土土器 (11)



第234図　グリッド出土土器　(12)

か判断されない。圧痕状の施文は明瞭ではなく、故意なのか偶然なのかも判断し難い。33は角頭状にやや肥厚する口唇部が開く器形を呈し、口縁部に幅狭の無文部を設けて撚糸Rを施文する。34は口唇部が肥厚し、35は先細りの外削状を呈し、両者とも若干無文部を設けて撚糸Rを施文する。

撚糸文は比較的細密なもの（第224図１～８）、細くてやや条間が開くもの（９、13、15）、帯状に施文のもの（10、11、12、14）、条間を開けて施文するもの（16～21、27～29）、太い撚糸文を施文するもの（22～24、25）等がある。原体は25～29がLで、他はRである。

第223図36、第224図30～34は条線文を施文するものである。36は肥厚する角頭状口唇部が開く器形で、口唇部下から太い絡条体条線文を施文する。条線文の原体は撚糸文で、30は部分的に節が付く撚糸条線文である。条線文には細密なもの（30、31、34）と、粗いもの（32、33）がある。

35～40は無文土器であり、最終末の無文土器ではなく、有文土器と共伴する無文土器である。胎土、色調等有文土器と共通する。

第３類土器（第225図１～12）

撚糸文系土器群最終末の無文土器である東山式土器を一括する。１、２は口縁部破片で、両者とも内削状の角頭口唇部が内彎気味に立つ器形を呈し、半截竹管状工具による平行沈線文を口縁部に巡らすものである。平行沈線文は下側を強く施文するため、上側の沈線文が途絶えている。白色粒子と暗褐色粒子を多く含み、暗赤褐色を呈する。他の胴部破片も、同じ胎土、色調を呈する。

第II群土器（第225図13、14）

押型文系土器群を一括する。山形押型文土器が、２点出土しているのみである。両者とも口縁部に近い破片と思われ、横位の山形押型文を施文する。胎土に雲母、片岩類を含み、暗赤褐色を呈する典型的な押型文土器である。

第III群土器（第225図15～28、第226図１～13）

貝殻沈線文系土器群とその周辺の土器群を一括する。

第１類土器（15～24）

無文土器群を一括する。撚糸文系土器群以降の無文土器であり、15～21の擦痕状整形のものと、22～24の粗い撫で整形のものが存在する。15は角頭状口唇部が開く器形で、粗い条痕状の整形を施す。胎土に砂粒、小礫を多く含み、橙褐色を呈する。16～21も同様相を呈し、平坂式の内面整形と異なり、三戸式段階の条痕文土器の可能性がある。また、22～24は若干繊維を含み、白色粒子を多く含む特徴的な胎土で、沈線文系土器群の終末期である田戸上層式から子母口式段階に位置付けられる可能性がある。

第２類土器（25～28、第226図１～12）

田戸下層式土器を一括する。25～28は横位の細沈線文を施文するものである。25、26は同一個体で、先端が丸く尖る口唇部が若干内彎して開く器形を呈する。25～27は単沈線文の重複であり、28は３本を一緒に施文する沈線文である。胎土は緻密で、外面に粗い削り状の整形を施し、内面は荒れている。明橙褐色を呈する。

第226図１～５は同一個体であり、太い凹線状の沈線文と細沈線文を施文するものである。太沈線文でモチーフを区画し、それに沿わせて細沈線文を施文する。太沈線文は器面を抉る様に施文し、

細沈線文は束ねた工具を器面に対して斜めの角度で施文している。赤褐色を呈し、内外面とも良く磨かれた土器である。6、7は平行沈線を施文する破片であり、沈線文はやや太い。7は「ハ」字爪形文状の刺突文を施文する。8、9は平行沈線文間に刺突文を挟んで施文するもので、8は単列の刺突文、9は複列の刺突文を施文する。10は沈線文間に縦長の刻みを施文し、縦位の刻み列で文様帯を区画するものと思われる。11、12は斜位の沈線文を施文する破片で、11は凹線状の太沈線文で施文するものである。

第3類土器（第226図13）

田戸上層式土器を一括する。13のみ確認されたが、単沈線文で粗い斜格子目文を施文するものである。内外面ともよく磨かれており、胎土に細砂粒と白色粒子を多く含み、明赤褐色を呈する。本群第1類の無文土器の中に胎土の類似するものがあり、この類に含まれる可能性もある。

第Ⅳ群土器（第226図14～23、第227図～第233図）

条痕文系土器群を一括する。

第1類土器（第226図14、15）

沈線文系土器群との過渡期にある子母口式土器を一括する。14は緩い波状口縁を呈する波頂部で、隆帯文で口縁部の幅狭文様帯を区画し、文様帯内に斜位の絡条体圧痕文を施文する。口唇部にも刻み状に斜位の絡条体圧痕文を押圧する。繊維を含むが条痕文はなく、擦痕状の整形を施す。15は丸頭状の口唇部が内彎気味に立ち、口縁部に2列の刺突文列を施文する。刺突文は結節状に施文し、右から左へ施文する。口唇部には刻みを施す。繊維を少量含み、砂粒、小礫を多く含む。条痕文は施文されない。

第2類土器（第226図16～23、第227図、第228図1～15）

条痕文系土器群初頭期の野島式土器を一括する。

第1種（第226図16～23、第227図1～7）、区画線及び充塡文に細隆起線文のみを施文するものである。モチーフには等間隔に細隆起線文を垂下するもの、横位に施文するもの、幾何学状のモチーフを施文するもの等がある。16は角頭状にやや先細りする口唇部が開く器形を呈し、肥厚部分に細隆起線を巡らせて口縁部文様帯を区画し、縦位の細隆起線を等間隔に垂下する。繊維を若干含み、緻密な胎土で、擦痕状の器面調整を施す。17、19、22も同一個体の可能性があり、条痕文ではなく擦痕状の整形を施す。20はやや太い細隆起線文を間隔を開けて横位に施文しており、明瞭な条痕文を表裏面に施文する。18、21は同一個体で、横位の細隆起線文下に縦位の擦痕文を施文し、裏面に条痕文を施文する。23は縦横の細隆起線文で直線的なモチーフを施文する。第227図1～7は縦横に斜位の細隆起線文を組み合せ幾何学的なモチーフを構成するものである。1は波状口縁を呈し、襷状区画を施すものである。口唇部には刻みを施す。2～7は細隆起線文で幾何学的なモチーフを区画し、集合細隆起線文を充塡施文して、表裏面に条痕文を施文するものである。

第2種（第227図8～13、第228図1～15）、細隆起線文で区画し、集合沈線文を充塡施文するものである。8、9は緩い波状口縁を呈し、細隆起線文を口唇部から間隔を開けて垂下して文様帯を縦位に区画する。区画内は2本対の細隆起線文で襷状区画を施し、やや太めの集合沈線文を充塡施文する。口唇部には波頂部を境にして異方向の刻みを施文する。他は細隆起線文内に集合沈線文を

充塡施文する胴部破片で、条痕文を施文するが、12、第228図８の様に２本対の細隆起線文間の条痕文を磨消すものもある。13は区画内に格子目沈線文を施文する。いずれも繊維を含み、橙褐色を呈する。

第３類土器（第228図16～18、第229図～第233図）

条痕文のみを施文する土器群を一括する。

第１種（第228図16～18、第299図～第231図）、表裏面に条痕文を施文するものを一括する。16は角頭状口唇部に刻みを施し、17、18、第229図１～６は口唇部が角頭状を呈するが、刻みは施さない。17、18は擦痕状の器面整形である。７～11は先細りの丸頭状口唇部を呈し、開く器形であるが、11は口唇部が外反する。他は胴部破片で、擦痕状に近い条痕文もある。

第２種（第232図１～10）、表に条痕文を施文するものを一括する。１、２は先細りに尖る口唇部が外反する器形であり、２には文様状のクロスする条痕文を施文している。３は角頭状口唇部を呈し、口縁部が内彎気味に立つ。

第３種（第223図11～15）内面に条痕文を施文するものを一括する。表面には擦痕状の整形を施す。11、12は口唇部が若干内彎して開く器形を呈する。

第４種（第233図１～13）、表裏面に擦痕文を施文するものを一括する。１、３は波状口縁で、先細りの角頭状口唇部が開く器形を呈する。２は角頭状口縁部が内彎して開き、４は先細りの口唇部が大きく開く器形を呈する。擦痕文には条痕文に近いものから、撫で状の整形に近いものまであり、いずれも若干の繊維を含んでいる。

第Ⅴ群土器（第234図１～24）

前期の土器群を一括する。

第１類土器（１～６）

関山式土器を一括する。何れも繊維を含み、裏面整形の丁寧な土期群で、撚りの異なる０段多条縄文で、整然とした羽状縄文を施文するものである。１、２はループ文が、３、４には結束部分が明瞭に施文される。

第２類土器（７～11）

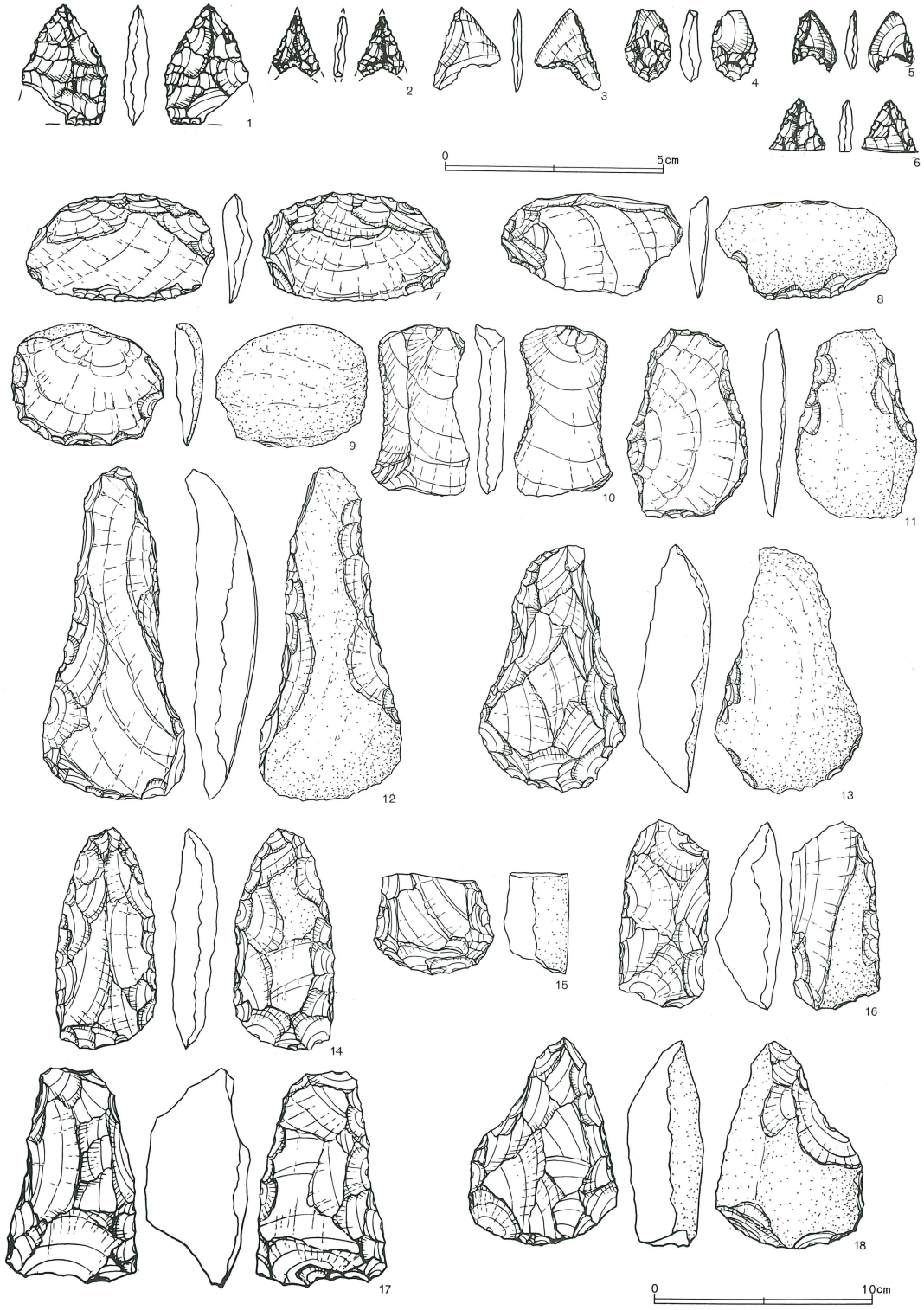
黒浜式土器を一括する。７は単節縄文ＲＬ地文上に、半截竹管による平行結節沈線文を施文する。８は平行沈線文を施文するもので、９は単節ＲＬの斜縄文、10は羽状縄文、11は無節斜縄文Ｌを施文する。何れも繊維を含む。

第３類土器（12）

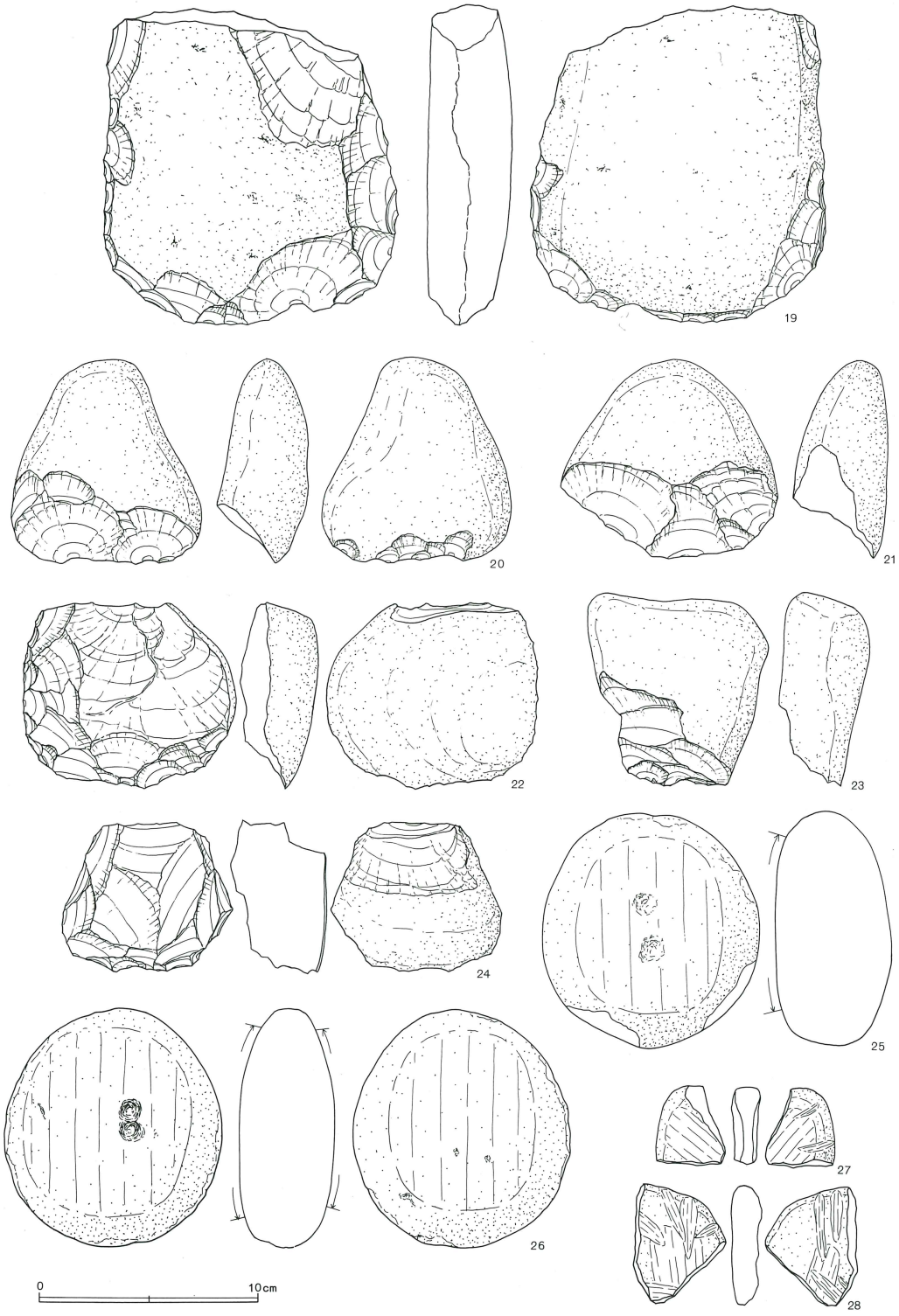
諸磯ａ式土器を一括する。12は緩い波状口縁が内彎気味に開く器形で、波頂部から円形竹管文列を垂下する。地文は２段ＲＬに１段Ｒを第１種巻きに付加した付加条縄文である。

第４類土器（13～24）

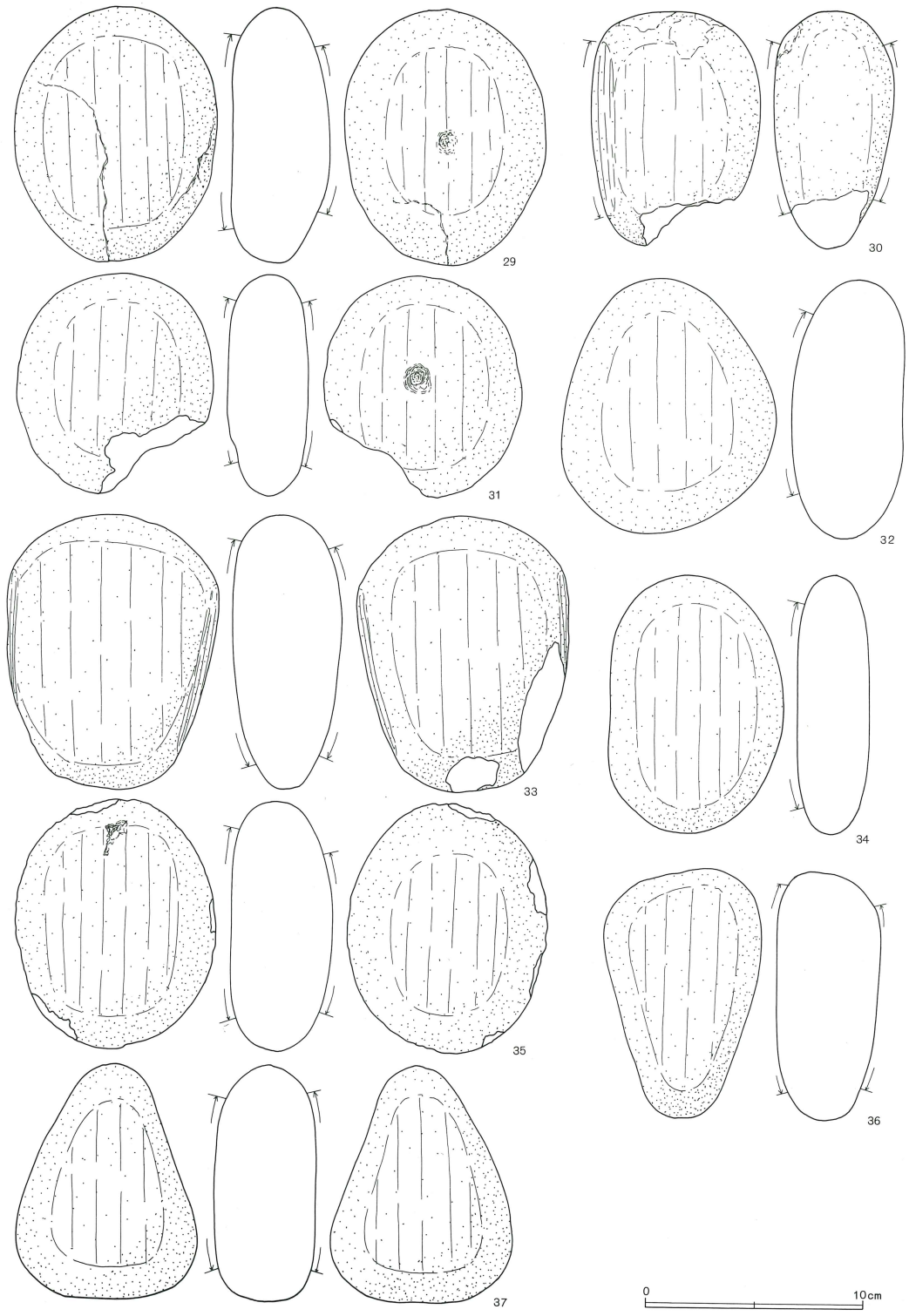
諸磯ｂ式土器を一括する。13～15は沈線文系の土器で、平行沈線文のみを使用して弧状等のモチーフを施文する。16は爪形文系土器、17～19は浮線文系土器である。20～24は単節ＲＬを施文し、20には結節の回転縄文を施文している。



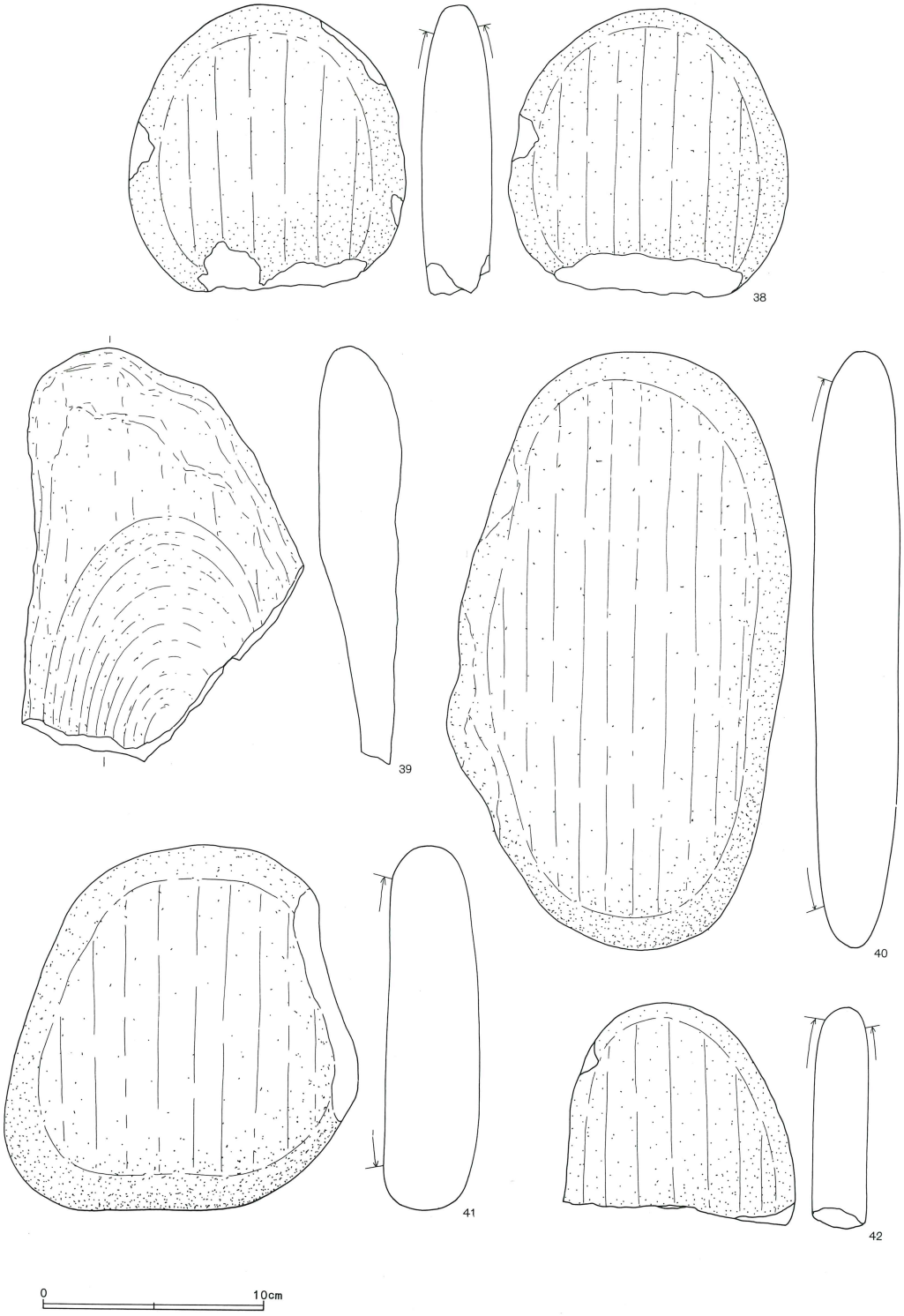
第235図　グリッド出土石器 (1)



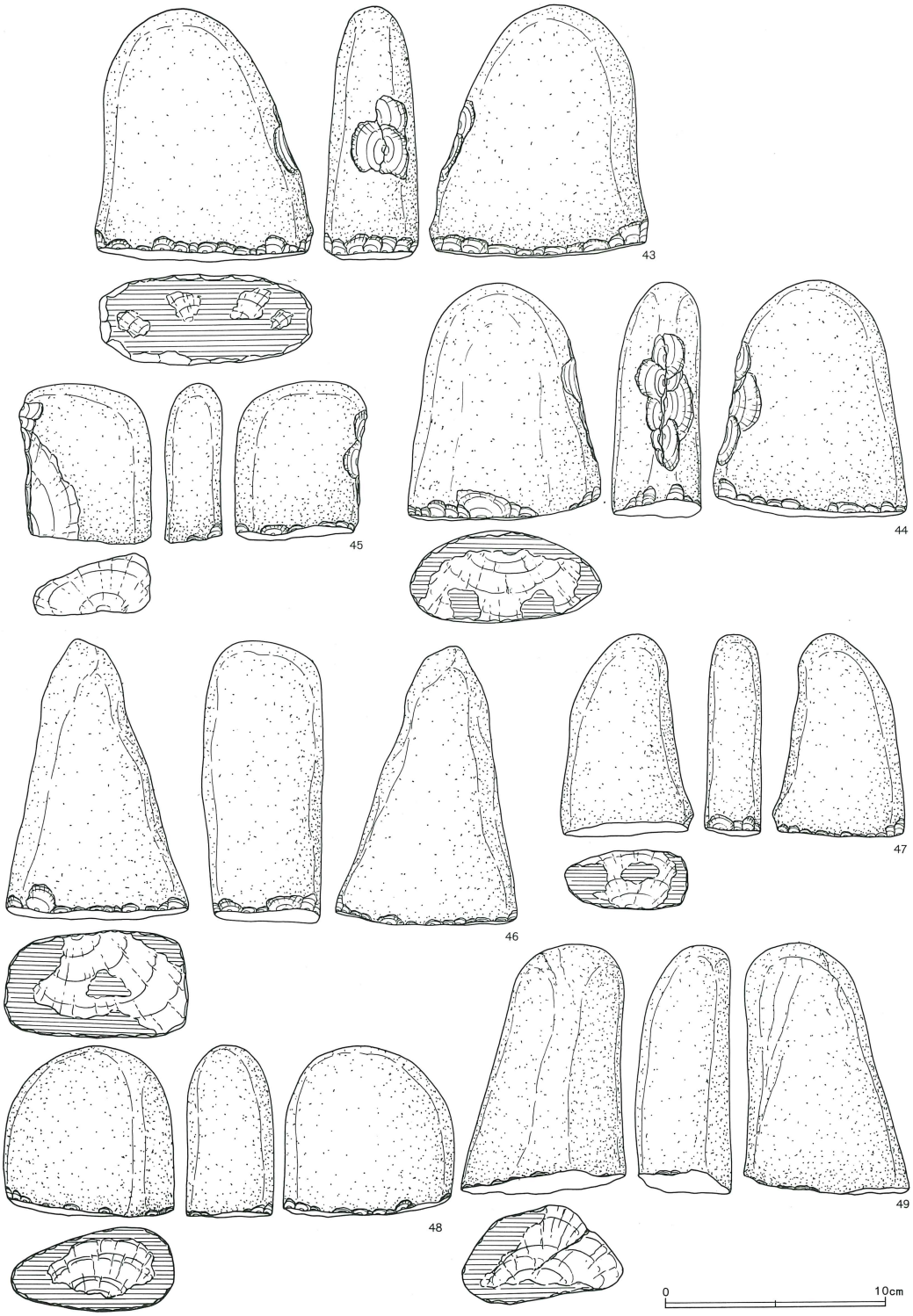
第236図　グリッド出土石器　(2)



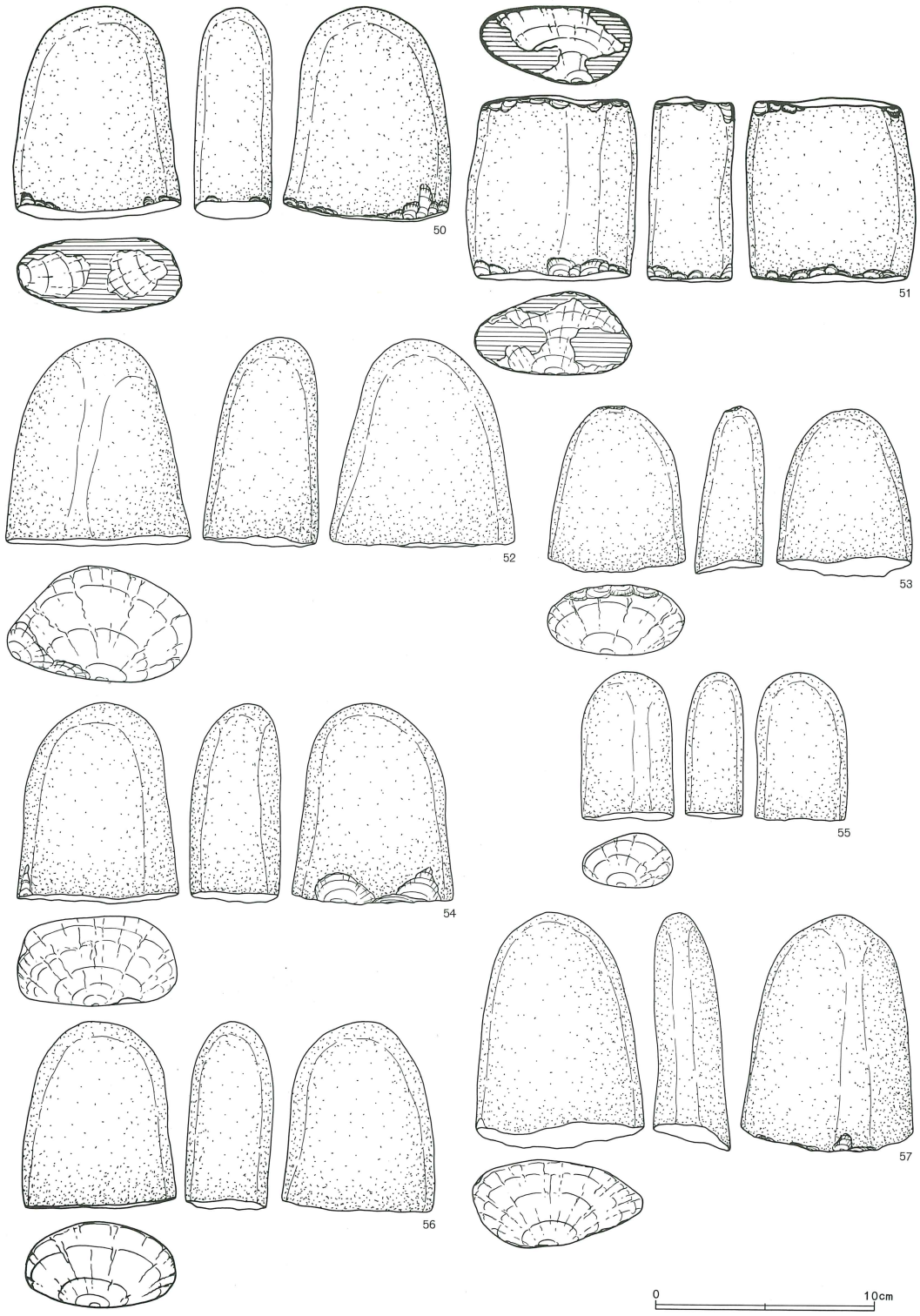
第237図　グリッド出土石器 (3)



第238図　グリッド出土石器 (4)



第239図　グリッド出土石器　(5)



第240図　グリッド出土石器　(6)

第Ⅵ群土器（第234図25～30）

中・後期の土器群を一括する。

第１類土器（25）

中期の加曽利ＥⅡ式土器を一括する。25は地文に単節ＲＬを施文し、磨消懸垂文を垂下する。

第２類土器（26～30）

後期の堀之内Ⅱ式土器を一括する。26、29は口唇部から多条の沈線文を垂下し、27は曲線の沈線文でモチーフを描く。28は無文の口縁部が開くもので、30は多条沈線文を鋸歯状に施文する。

(2) 出土石器

石鏃（第235図１～６）

６点出土している。１、２、６は欠損品で、３～５は未製品である。１は平基、２は凹基石鏃である。

掻器（第235図７～10）

７点出土している。７～９は横長剥片の端部を加工した掻器で、８、９は礫表を大きく残す。10は縦長剥片の両側縁に調整加工を施して刃部にしている。

打製石斧（第235図11～18）

11点出土している。14、17以外は礫表を大きく残す石斧で、15～18は刃角が大きい礫器状の石斧である。12、14は前期的な石斧であるが、他は早期に特徴的な石斧である。

礫器（第236図19～24）

32点出土している。19、24は石斧状の礫器であり、19は大形で頭部を欠損する。20、21、23は円礫の端部を剥離したチョッパー状の礫器であり、調整剥離は片側から刃部にのみ施している。22は片面のみに礫表を残し、裏面は調整剥離で、礫表を剥ぎ取る。

磨石（第236図25、26、第237図29～37）

39点出土している。25、26、29、31には擦り面に浅い窪みが認められる。25は片面のみの使用であるが、他は両面が使用される。30、33は側面にも擦り面が認められる。

有溝砥石（第236図27、28）

２点出土している。27は両面に幅の広い擦り面が認められ、その上に肩の部分に２本の溝状の擦り面が認められる。28は溝状の擦り面が表裏側面にも認められる。

石皿（第238図38～42）

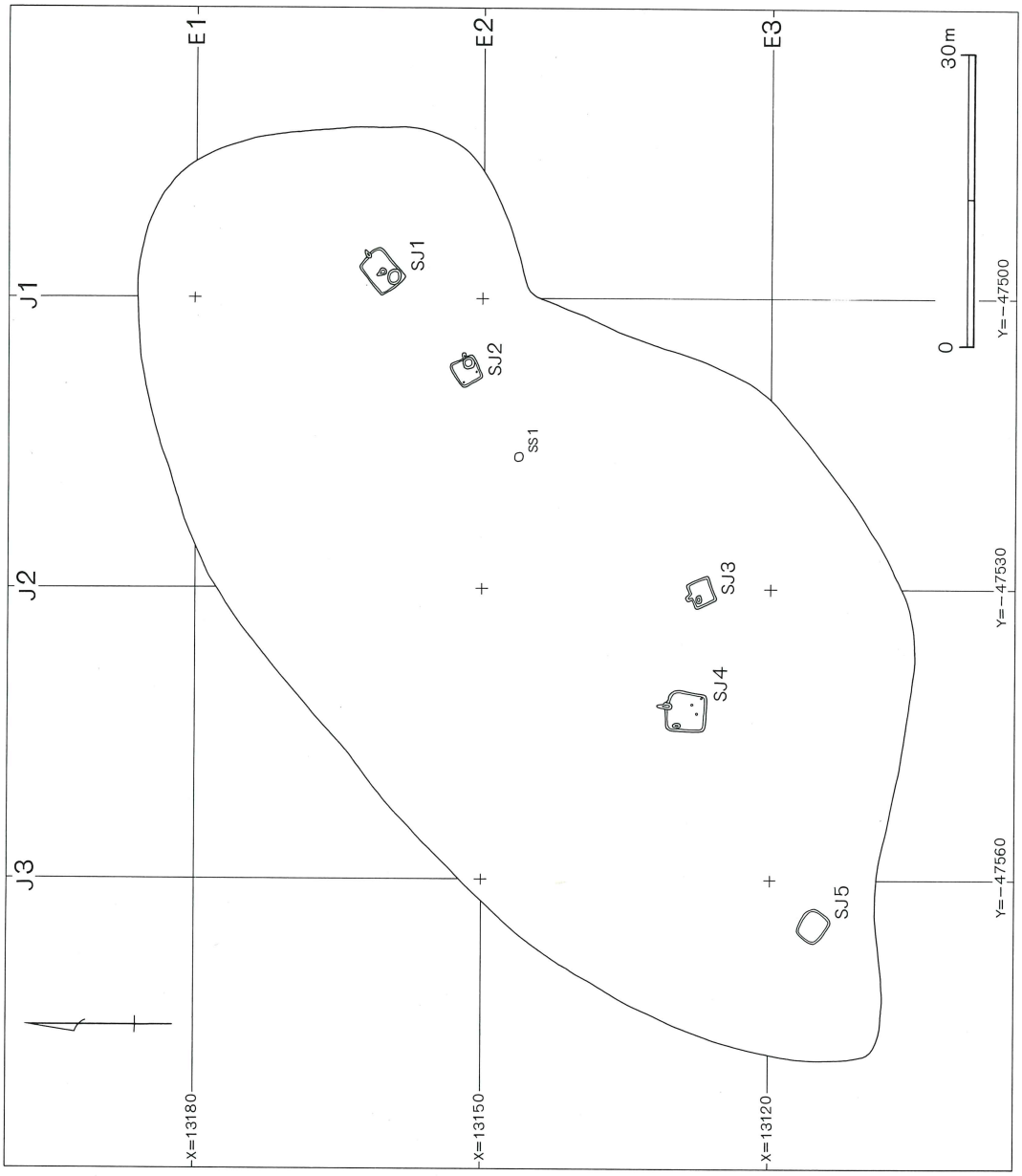
６点出土している。38、40～42は扁平礫の石皿で殆ど凹面がなく、39は緑泥片岩製の凹面の深い石皿である。

スタンプ形石器（第239図43～第241図57）

23点出土している。43～45は側面に調整剥離を施すもので、43、44は底面が使用で摩耗する。他は側面に調整加工を施さず、46～51には底面からの使用による細かな剥離痕が認められ、底面は摩耗する。51は両面が使用される。

Ⅵ．四反歩遺跡北地区の調査

四反歩遺跡北地区は調査区の北端にあたり、北東から湾入する谷によって東地区や南地区と分離されている。しかし、谷頭にあたる調査区南西部では南地区と台地が続き、それぞれが基部を共有する樹枝状台地であることが理解される。遺跡はその台地の南東斜面に形成されており、台地の最

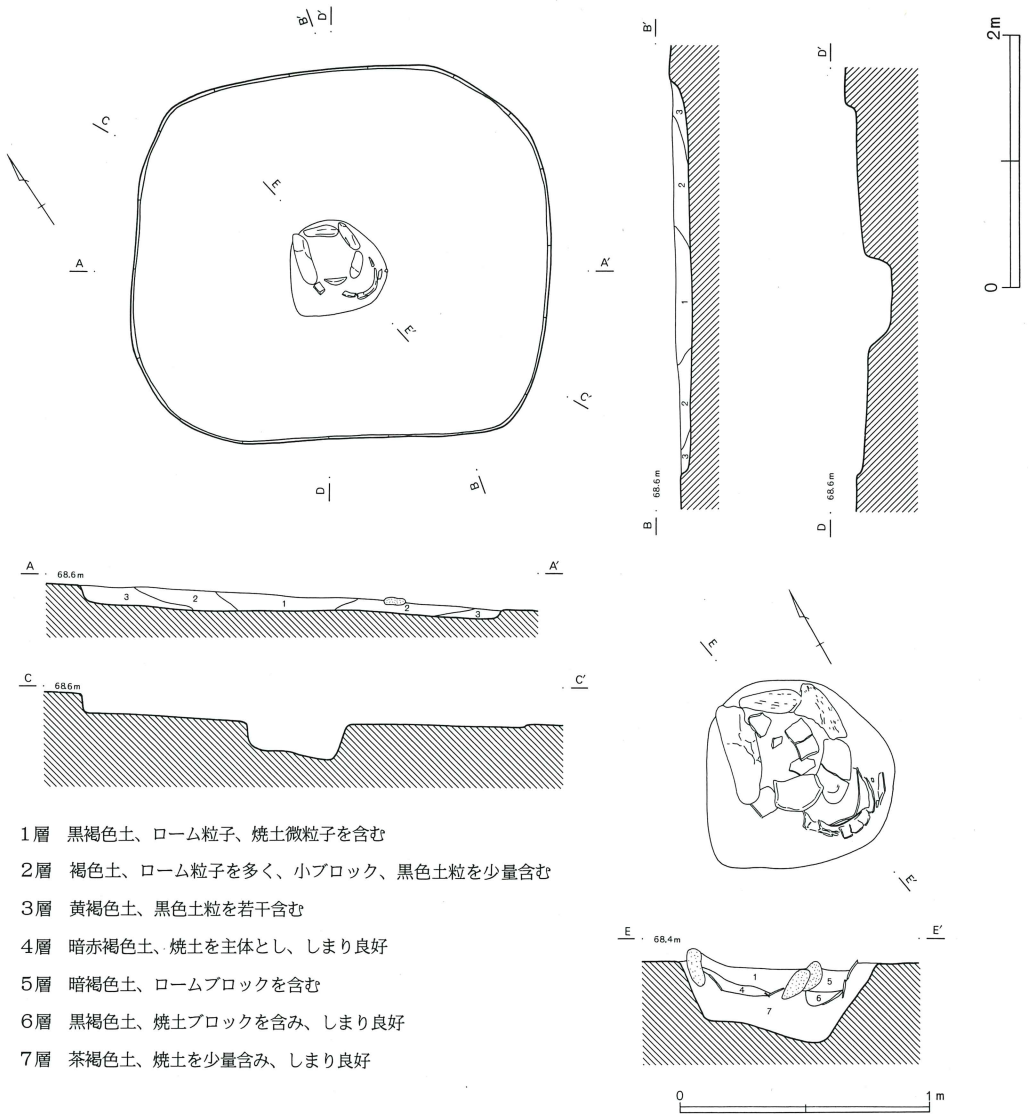


第241図　四反歩遺跡北地区全体図

高地点では標高約69.5m前後を測る。湾入する谷の最深部では約66.5m前後を測るため、台地との比高差は最大3m前後を測る。

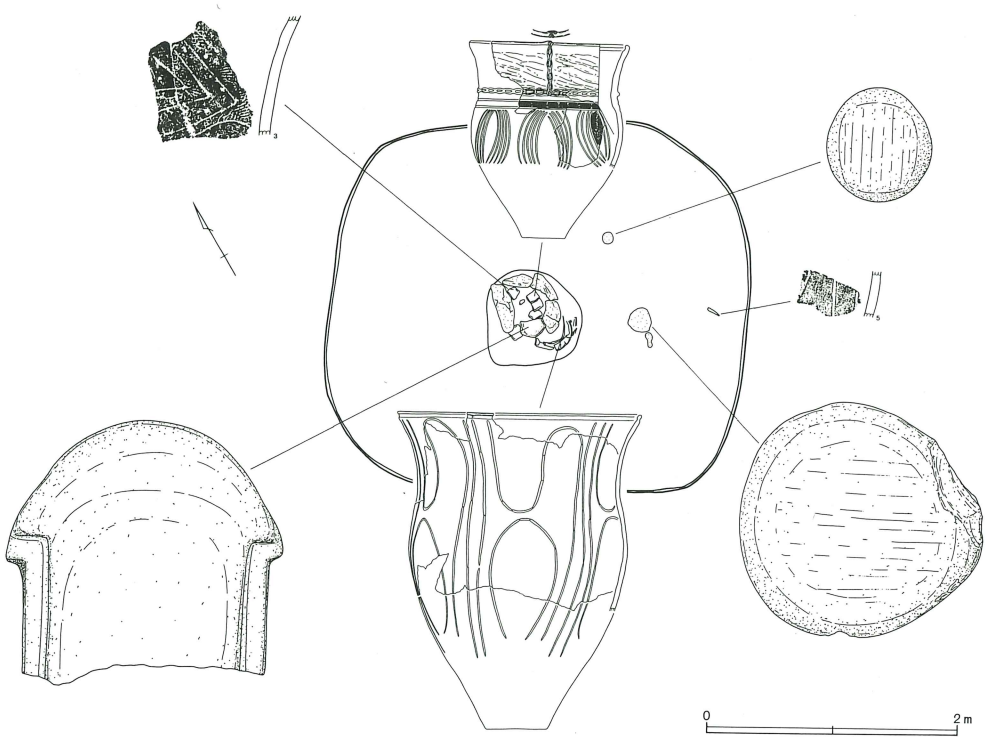
遺構はおよそ標高67.5mから69mを測る範囲の南東斜面において検出されており、縄文時代と奈良時代の住居跡を中心とするものであった。

縄文時代では後期の住居跡が1軒と、早期の集石土壙が1基検出された。住居跡は四反歩遺跡内にあって、唯一の後期住居跡であり、堀之内II式期の所産である。調査区南西部の谷頭付近に位置している。他に同時期の土壙等もなく、単独の存在と思われるが、特徴的な在り方である。遺物は南地区、東地区からも出土しているが少量であり、北地区においても同じ様相を呈している。



1層　黒褐色土、ローム粒子、焼土微粒子を含む
2層　褐色土、ローム粒子を多く、小ブロック、黒色土粒を少量含む
3層　黄褐色土、黒色土粒を若干含む
4層　暗赤褐色土、焼土を主体とし、しまり良好
5層　暗褐色土、ロームブロックを含む
6層　黒褐色土、焼土ブロックを含み、しまり良好
7層　茶褐色土、焼土を少量含み、しまり良好

第242図　第5号住居跡



第243図　第５号住遺物分布図

集石土壙は早期の所産と思われ、集石下に土壙を伴うものである。撚糸文系土器群を主体とする南地区では集石下に土壙を伴う例がなかったが、条痕文系土器群を主体とする東地区では、集石下に土壙を伴うものが検出されており、北地区の集石土壙と同様相を呈していた。本地区のグリッド出土土器は撚糸文系土器群を若干含むものの、主体はやはり条痕文系土器群であり、その点でも東地区と類似する。本地区の集石土壙は、条痕文期所産の可能性が高い。

奈良時代では８世紀後半の第３四半期内に位置付けられる住居跡が４軒検出されており、各々は南東斜面上に構築されていた。住居跡４軒はほぼ同時期の年代が与えられるが、大きく２群に分けられる。北東の群は第１号住居跡、第２号住居跡で構成され、それぞれ北東方向にカマドを持ち、主軸方向を同じくする。南西の群は第３号住居跡、第４号住居跡で構成され、北方向にカマドを持ち、主軸線は若干ずれるがほぼ北方向で一致する。第１号住居跡と第４号住居跡は大形の住居跡であり、第２号住居跡、第３号住居跡はやや小形である。両群において大小の住居跡が組合わさって、それぞれ対峙するのが特徴的である。

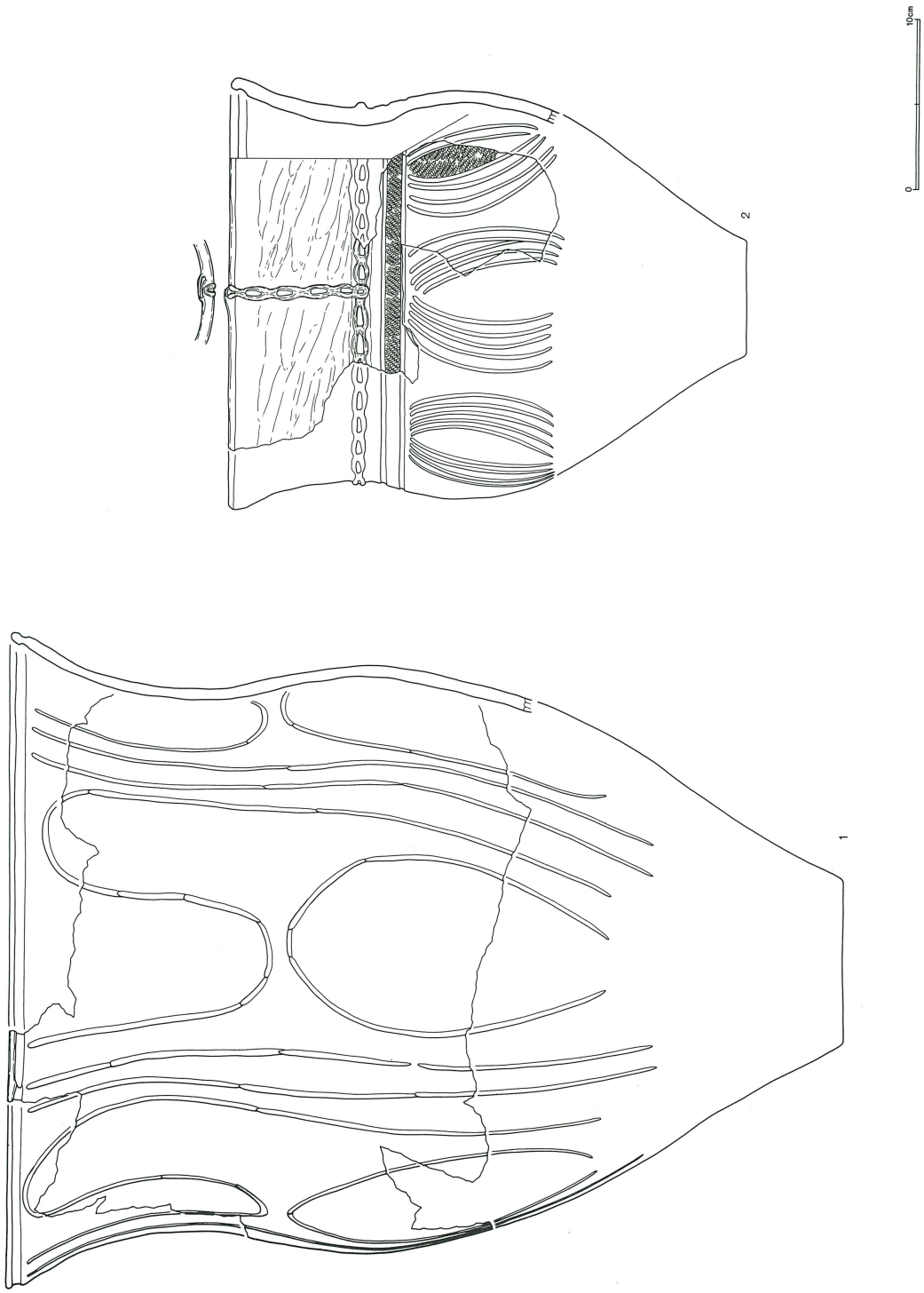
グリッドの包含層からは、縄文時代を中心として弥生時代、奈良時代、中・近世の遺物までが出土しており、縄文時代では撚糸文系土器群、沈線文系土器群、条痕文系土器群、前期諸磯式土器、後期堀之内式土器が出土している。主体は条痕文系土器群である。石器は剝片や破砕礫、焼礫等が大半を占め、製品では打製石斧や礫器を中心とする早期の石器群が主体を占めている。

第244図　第５号住出土土器

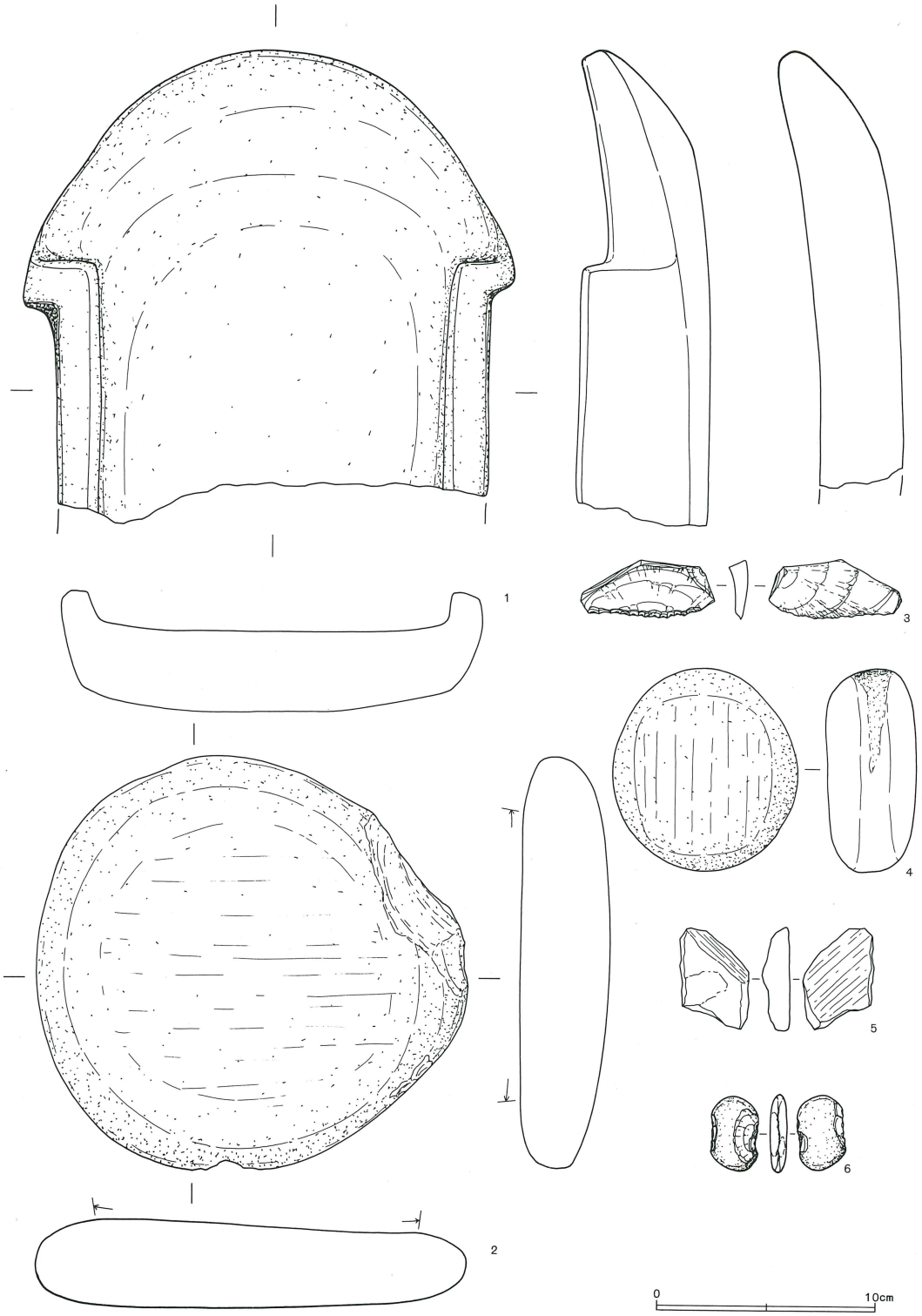
１．縄文時代の遺構と遺物

第５号住居跡（第242図～第244図）

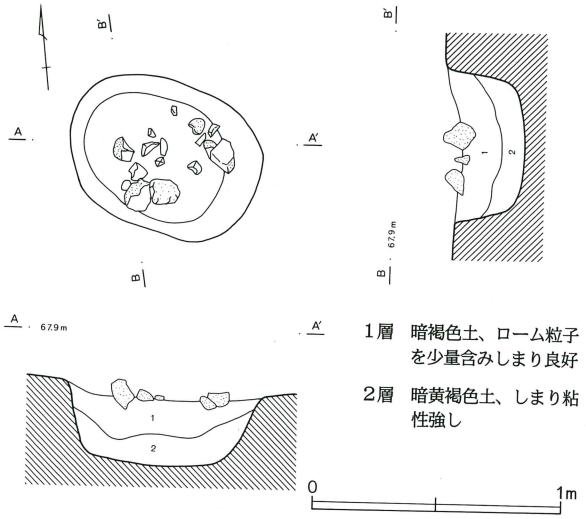
Ｅ３Ｊ３区に位置する。周辺に遺構はなく、北東方向に奈良時代の第４号住居跡が存在する。南北方向に長軸をとる隅丸長方形を呈し、北から約45度西に振れている。長径3.34m、短径2.96m、深さ15cmを測る。小形の住居跡であるが、炉以外は非常に不鮮明な住居跡で、プラン等不明瞭であった。発掘されたプランは遺構確認時に識別された黒色土の範囲であり、この範囲のみが残存していた可能性もある。床面は南東の谷方面に向って緩く傾斜するが、平坦面を呈している。壁の立上りは不鮮明で、皿状を呈する。柱穴は検出されなかった。炉はほぼ中央部に存在し、石囲い埋甕炉である。石囲い部分は50cm前後の長細い礫を主体にして「コ」字状の囲いを作り、開口部分に欠損した石皿を仕切りとして立てている。埋甕は石囲いの軸線より、南東方向にややずれて埋設されていた。土器は底部を欠損するが、口縁部は一部残存していた。石囲い内からも敷いた様な状態で土器片が出土している。覆土は浅く不鮮明であったが、レンズ状堆積をした３層を確認した。１層がローム粒子、焼土粒子を含む黒褐色土、２層がローム粒子を多く含み、黒色土粒子を少量含む褐色度、３層が黒色土粒子を若干含む黄褐色土である。



第245図　第５号住出土土器実測図



第246図　第５号住出土石器



第247図　第１号集石土壙

遺物は炉内と床面から少量出土している。第245図１は炉体土器である。底部を欠損し、胴部の７割程が現存する。口縁部は一部が現存する。口縁部は開きながら若干口唇部が内彎し、口唇部下に凹線状の太い沈線文を巡らせる。口縁部裏には緩い凹線状の窪みが巡る。頸部が緩く括れ、胴部が張る器形を呈し、口縁部から２本対の沈線文を垂下して文様帯を分割する。分割内は上下に対向する弧線文を配し、上側弧線文の一端が延びて懸垂文として垂下する。一見、３本沈線文で文様帯を分割しているかの様である。懸垂文の分割幅は不均一であるが、４単位に器面を分割するものと思われる。推定口径33.8cm、現存高31cmを測る。２は炉内出土である。幅広の口縁部無文帯がやや開き、押圧状の連鎖状刺突文を施した縦横の隆帯文で、文様帯を区画する。隆帯下は磨消縄文帯が巡り、以下に「ハ」字状に開く多条の対弧線文を垂下させるが、単位数は不明である。推定口径は25.6cm、現存高は20cmを測る。第244図１は無文の口縁部が開くもので、２、３は磨消縄文で菱形状のモチーフを描出する。４～７は炉体土器の同一個体である。

第246図１は石囲い炉の境に使用されていた石皿である。多孔質の安山岩製で、側縁に船縁状の囲いが付く。擦り面の端部も断面が船首状を呈する。２は扁平な円形礫を使用した石皿で、片面のみ使用するが殆ど凹面状を呈さない。３は横形剝片の１辺を加工しただけの掻器である。４は円形の扁平礫を使用した磨石で、両面と側面に擦り面がみられる。５は砥石であり、側縁にも擦り面がみられる。６は石錘であり、小形の扁平楕円礫の長側縁に加工を施している。

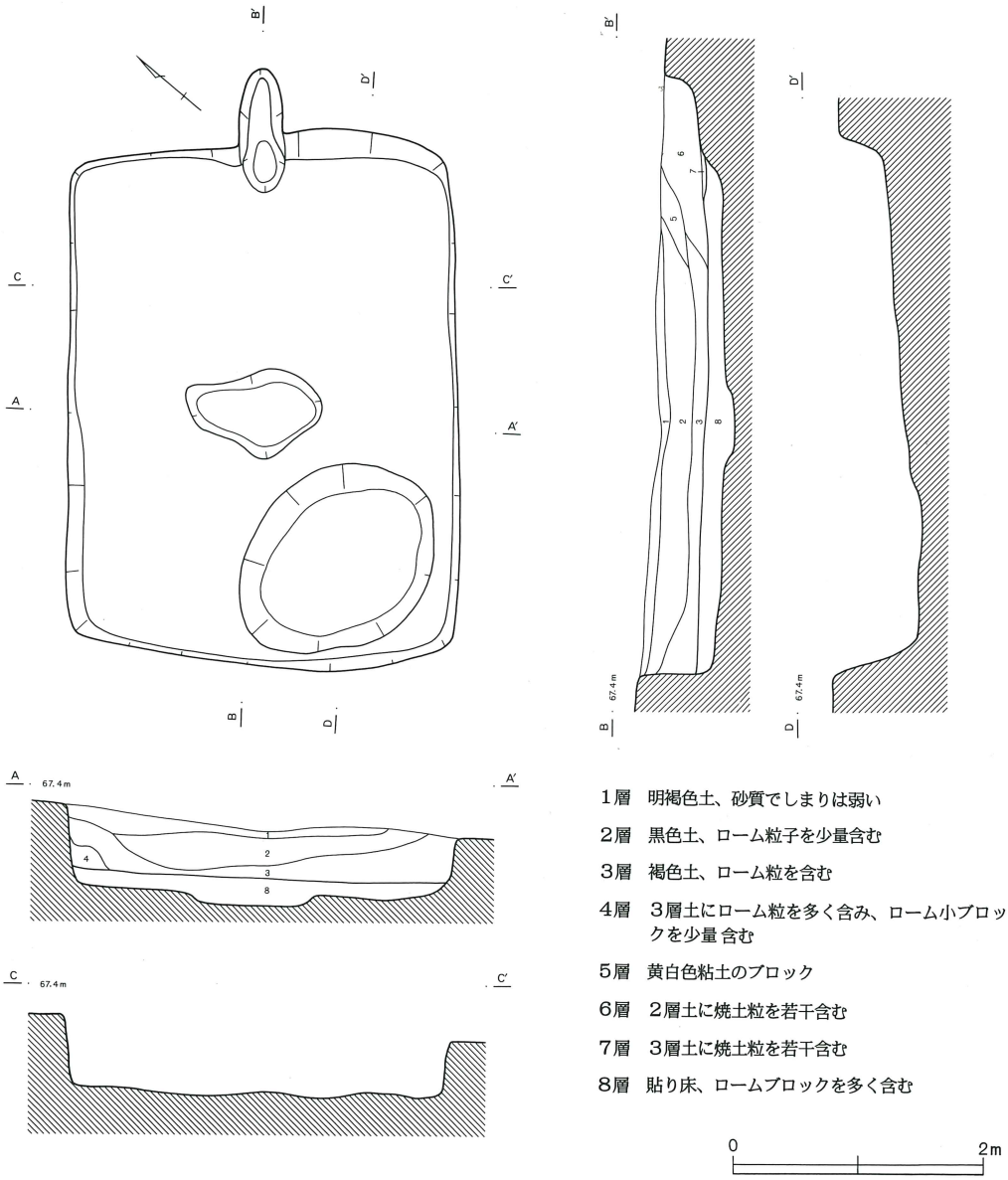
第１号集石土壙（第247図）

Ｅ２Ｊ１区に位置する。周辺に縄文時代の遺構はなく、北東方向に奈良時代の第２号住居跡が存在する。プランは楕円形を呈し、長径0.76m、短径0.62m、深さ35cmを測る。覆土は１層がローム粒子を含みしまりの強い暗褐色土、２層がしまり粘性とも強い暗黄褐色土である。礫はチャートの大形破砕礫を中心としており、被熱している。遺物は出土していない。

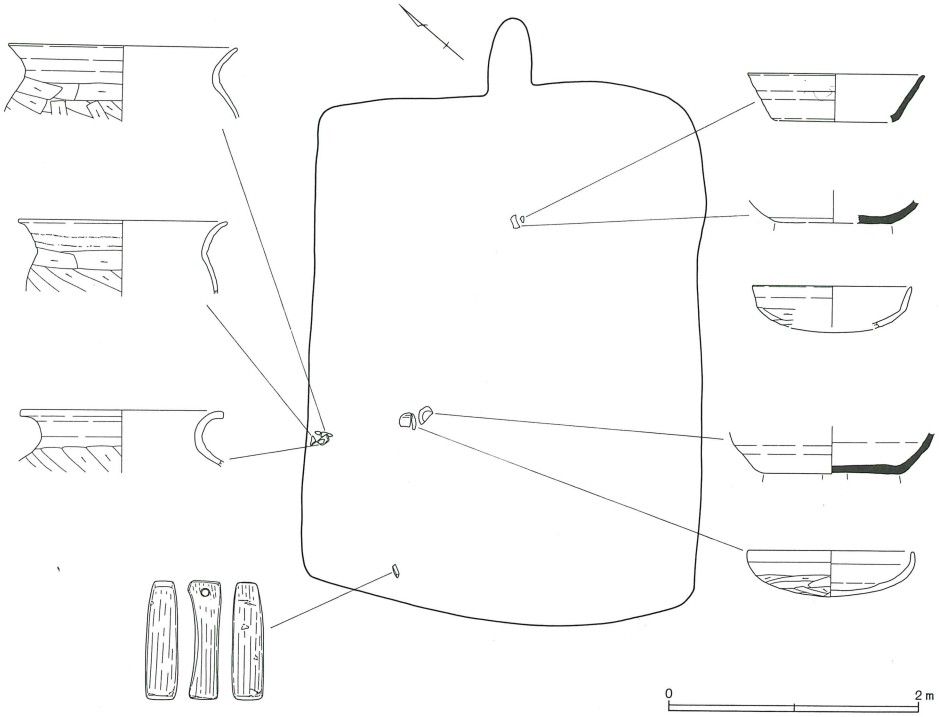
2．歴史時代の遺構と遺物

第１号住居跡（第248図～第250図）

Ｅ１Ｊ０区に位置する。南西に10m程離れたところに、同時期の第２号住居跡が存在する。北東方向に長軸をとる長方形を呈し、カマドを通る主軸線は北から52度東へ振れている。長径4.76m、短径3.20m、深さ68cmを測る。北東壁のほぼ中央部にカマドを持ち、カマドは燃焼部が比較的小さ



第248図　第１号住居跡

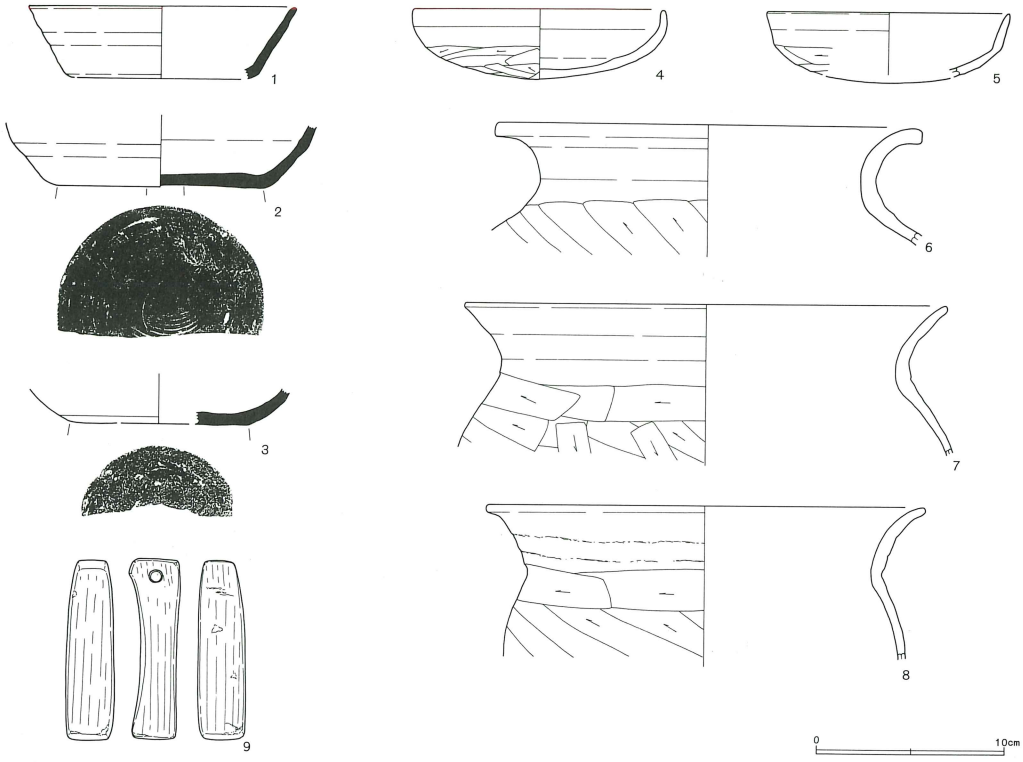


第249図　第１号住遺物分布図

く煙道部も短い。床は貼床で平坦面を呈するが、南東方向にやや傾斜する。住居跡の掘り方は南西方向に大きく傾斜しており、中央部と南西コーナーに土壙状の窪みが存在した。柱穴、壁溝等の付属施設は検出されなかった。覆土は貼床を入れて８層で構成されるが、基本的はカマドを除くと４層で構成される。１層は砂質でしまりの弱い明褐色土、２層はローム粒子を少量含む黒色土、３層はローム粒子を含む褐色土、４層はロームブロックを含む褐色土、５層は黄褐色の粘土ブロック、６層は焼土粒子を含む黒色土、７層は焼土粒子、炭化物を含む褐色土である。８層は貼床で、ロームブロックと黒色土を半々に含む。

遺物は少量であるが、床面付近から出土している。１～３は須恵器坏である。１は口径14.7cm、器高3.3cm、復元底径は10.2cm、1/8残存。底部は欠失しているため調整は不明である。焼成はやや不良で灰色を呈する。２は底径10.9cm、現存高3.3cmで、底部付近のみが2/3残る。底部外面は回転糸切り離しの後周囲をヘラケズリ調整したものである。焼成はやや不良で黄灰色。胎土には針状物質を含む。３は底径9.6cmで現存高1.9cm、底部は回転ヘラケズリ調整を行なう。焼成はやや不良で黄灰色。胎土に砂粒を多く含む。

４・５は土師器坏である。４は口径13.4cm、器高3.7cm、完形。丸みを帯びた器形で、口縁部はわずかに内彎させ、口唇部は丸くおさめる。調整は口縁部外面から内部内面にかけてヨコナデ、底部外面はヘラケズリである。焼成は良好で明褐色。５は復元口径12.9cm、残存高3.4cm、1/4残存。口縁部は外反しながら開く形態を示し、体部との境に稜をもつ。口唇部は丸くおさめる。口縁部は



第250図　第１号住出土土器

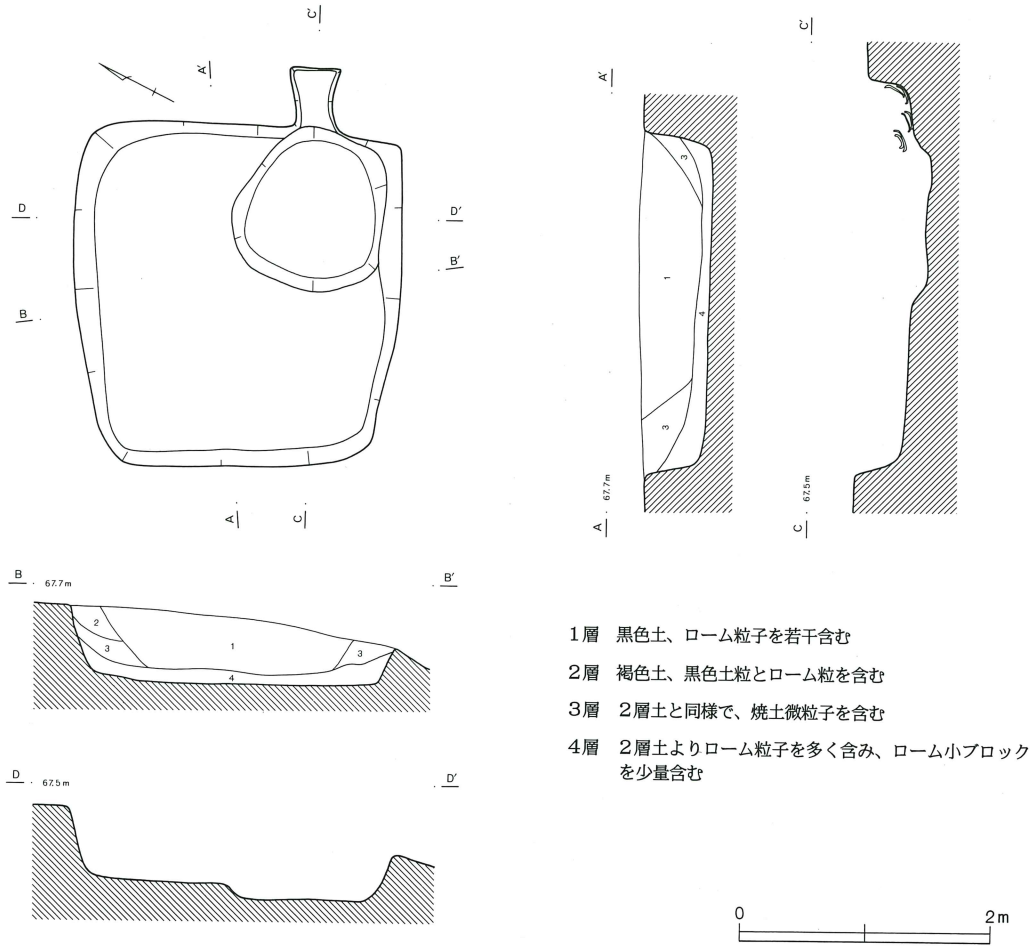
内外面にヨコナデ調整、体・底部外面にはヘラケズリ調整を施す。焼成は不良で風化が激しい。

６～８は土師器甕である。６は甕の胴部上端から口縁部が残存する。口径22.7cm、現存高6.1cm、口縁部1/4残存。頸部から口縁部にかけて大きく外反し、口唇部をやや肥厚させ、端部に面をもつ。胴部は大きく張り出した形態を示す。頸部外面から内面にかけてヨコナデ調整、胴部はヘラケズリ調整を行なう。焼成は良好で明赤褐色。７は口径25.6cm、現存高7.9cm、口縁部1/6残存。頸部は「く」字形に屈曲し、口縁部はまっすぐに開く。口唇部は丸くおさめる。焼成は良好でにぶい褐色。８は口径23.3cm、現存高8.0cm、1/6残存。頸部は「く」字形に屈曲して開き、口縁部はさらに外反して口唇部をやや肥厚させる。胴部は張り出しの弱い形態である。焼成は良好で赤褐色。

９は砥石で全長9.4cm、幅2.6cm、厚さ2.7cm。使用痕が著しい。径７㎜の紐通し孔が通る。

第２号住居跡（第251図～第253図）

Ｅ１Ｊ１区に位置する。北東10m程離れたところに、同時期の第１号住居跡が存在する。北東方向に長軸をとるほぼ方形を呈し、カマドを通る主軸線は北から64度東へ振れている。長径3.16m、短径2.46m、深さ55cmを測る。北東壁の東コーナー寄りにカマドを持つ。カマドは燃焼部があまり焼けておらず、比較的小さく煙道部は直に立上る。床は平坦面を呈するが、南東方向にやや傾斜する。柱穴、壁溝等の付属施設は検出されなかった。覆土は４層で構成され、１層がローム粒子を若干含む黒色土、２層が黒色土粒子とローム粒子を含む褐色土、３層が焼土粒子を若干含む褐色土、

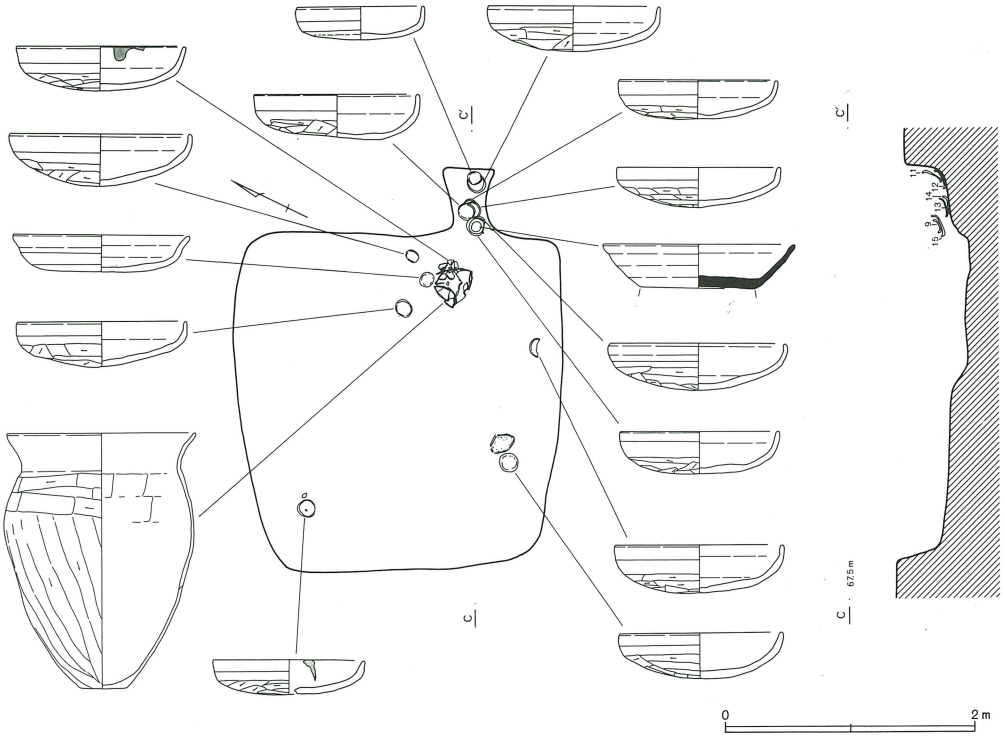


第251図　第２号住居跡

４層が全面を覆う第一次堆積層で、ローム粒子を多く、ロームブロックを少量含み、しまり粘性ともに強い褐色土である。

遺物は崩落したカマド内と、その周辺に集中して出土した。１は須恵器坏で口径15.5cm、底径9.2cm、器高3.6cm、完形。体部から口縁部にかけてわずかに内湾しながら開き、口唇部を肥厚させる。体部外面から底部内面はヨコナデ、底部外面は回転ヘラケズリ調整を行なう。焼成は良好で灰白色。胎土に針状物質を含む。

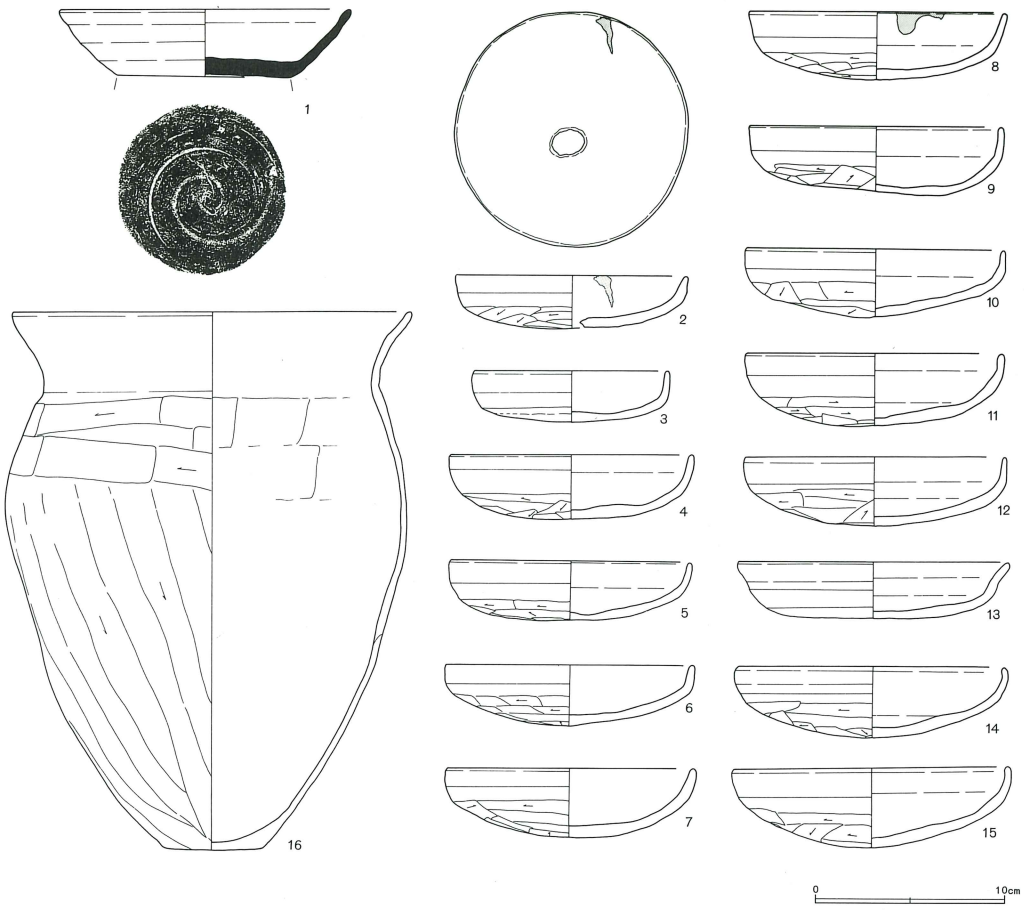
２～15は土師器坏で、いずれも完形である。調整は口縁部外面から体部内面はヨコナデ、体・底部外面はヘラケズリ、底部内面はナデを施している。２は口径12.3cm、器高2.8cm。短い口縁部が緩やかに立ち上がる。焼成は良好で橙色であるが、底部外面は全体に黒い。底部に長径1.7cm、短径1.3cmの楕円形の孔が、焼成後に開けられている。３は小型の坏で口径10.5cm、器高2.7cm。口縁部はほぼ直立し、底部は浅く平たい。焼成は良好で橙色である。体・底部外面はヘラケズリ調整の後、さらにナデ調整を施している。４は口径13.0cm、器高3.5cm。口縁部は内湾気味に外傾する。



第252図　第２号住遺物分布図

焼成はやや不良で、にぶい黄橙色を呈する。５は口径12.9cm、器高3.1cm。口縁部が内彎気味に外傾する。焼成はやや不良で橙色を呈する。６は口径13.2cm、器高3.3cm。口縁部は直立気味に立ち上がる。焼成は良好でにぶい橙色。胎土には砂粒を多く含む。７は口径13.3cm、器高3.6cm。器形は丸みを帯び、口縁部の立ち上がりは明瞭ではない。焼成は良好で明褐色である。８は口径13.7cm、器高3.6cm。口縁部はまっすぐにやや外傾して開く。焼成は良好で明赤褐色である。９は口径13.5cm、器高3.6cm。口縁部はほぼ直立する。焼成は良好で明赤褐色。10は口径13.8cm、器高3.6cm。口縁部はやや内彎して立ち上がる。焼成は良好で橙色を呈すが、底部外面全体は黒い。11は口径13.8cm、器高3.9cm。口縁部は内彎しながら立ち上がる。底部は丸く深い。焼成は良好でにぶい赤褐色。12は口径13.9cm、器高3.7cm。口縁部は直立気味に立ち上がる。焼成は良好でにぶい褐色を呈する。13は口径14.4cm、器高3.0cm。口縁部が屈曲して外反し、口縁部中位でさらに外反して「Ｓ」字を呈している。焼成はやや不良で橙色。胎土に砂粒を多く含む。14は口径14.5cm、器高3.9cm。全体に丸みを帯びた器形で、口縁部は内彎し、口唇部を内側へつまみ出すように、わずかに肥厚させる。焼成は良好で明褐色。底部外面全体にススが付着している。15は口径14.8cm、器高4.3cm。口縁部は内湾して立ち上がり、口唇部は内側にやや肥厚させる。底部は丸く深い。焼成は良好で橙色を呈する。

以上の完形の坏14点のうち、口縁部内面の一部にタール状物質が付着しているものは、２～６・８・10・13・15の９点である。

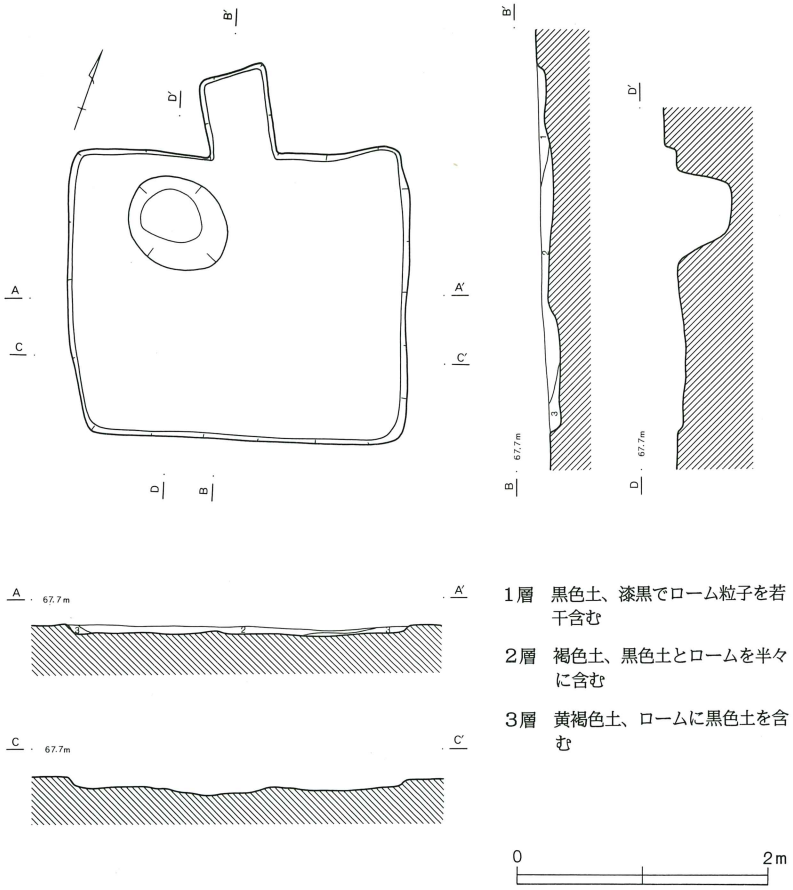


第253図　第２号住出土土器

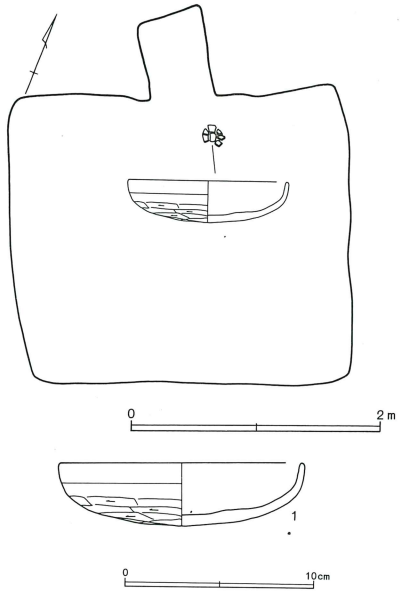
16は土師器甕で、口径21.2cm、胴部径21.3cm、底径5.3cm、器高28.4cm、完形。頸部は緩やかに屈曲し、口縁部は外反しながら開く。口唇部はわずかに内側に肥厚させる。頸部と胴部の境には段を有する。胴部はあまり張り出さない形態で、中位より上方に最大径をもつ。頸部外面から内面はヨコナデ調整、胴・底部外面はヘラケズリ調整、内面はヘラナデ調整を施している。焼成良好で明赤褐色を呈する。

第３号住居跡（第254図、第255図）

Ｅ２Ｊ１からＥ２Ｊ２区にまたがって位置する。西へ10m程離れたところに、同時期の第４号住居跡が存在する。北カマドを持ち、東西方向に長軸をとる長方形を呈し、カマドを通る主軸線は北から23度西へ振れている。長径3.02m、短径2.74m、深さ約15cmを測る。北壁のほぼ中央部にカマドを持ち、カマドは燃焼部が長方形の箱状に作られている。床は凹凸面が著しく、南東方向にやや傾斜する。カマドの西側に貯蔵穴が存在し、大きさは長径0.91m、短径0.72m、深さ45cmを測る。覆土は薄く３層が確認されており、１層がローム粒子を若干含む黒色土、２層が黒色土とローム粒



第254図　第３号住居跡



第255図　第３号住遺物分布図と出土土器

子を均等に含む褐色土、３層が黒色土を若干含む黄褐色土である。

遺物は殆どなく、カマド付近から完形の杯が出土したのみである。１は土師器坏で、口径13.0cm、器高3.3cm、完形。口縁部外面から体部内面はヨコナデ、体・底部外面はヘラケズリ、底部内面はナデ調整。焼成は良好で明赤褐色。

第４号住居跡（第256図～第259図）

Ｅ３Ｊ２区に位置する。東へ10m程離れたところに、同時期の第３号住居跡が存在する。北カマドを持ち、南北方向に長軸をとる長方形を呈し、カマドを通る主軸線は北から５度東へ振れている。長径5.22m、短径4.22m、深さ最深部で75cmを測